

# バカとクウガと未確認

オフアニム1925

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

学生として平穏な日々を送っていた吉井明久。

しかし、復活したグロンギ——未確認生命体によって、突如として平穏は崩れ去る。

残酷に死にゆく人々と、襲われる友人達を見た明久は、アークルを手にし戦う事を決意した。

——しかし、未確認生命体と戦い続けるには、明久はまだ若すぎた。

戦う度にすり減る精神、守る為に殺す葛藤。

それらと向き合うのは、高校生の少年である彼には荷が重すぎたのである。

\*この小説は『仮面ライダーダークウガ』と『バカとテストと召喚獣』のクロス作品です。ギャグはほぼ無いので、ご注意下さい。

まだまだ勉強中の身である為、つたない部分が多々見られると思いますが、温かい目で見て頂けると幸いです。

更新は不定期です。

のんびり投稿したいと思ってますので、よろしくお願い致します。

\*本作には気分を害するような残酷描写が多々出てくる予定です。苦手な方はブラウザバックを推奨します。

本作を読んだ事によりご気分を害されても、責任は取れません。

Twitterアカウント作りました。↓@trans|am|sakka

# 目次

訓練	警察	正氣	決着	変身	決意	絶望	東間	大人	希望	崩壊	平穩
120	104	94	83	72	62	54	46	34	22	11	1

流水・下	流水・上	青龍	跳躍	衝動	疾走	女豹	桜子
268	254	235	209	190	163	146	133

# 平穩

——どこか遠い場所で、声が聞こえた。

声は、2つ。

月光と静寂が世界を支配する時間帯で、薄らと響いている。

声のする方へ足を運ぶと、突然、視界が赤々と燃え盛り、暗闇を払いのけた。

この瞳に映るのは、死体。

死体、死体、死体、死体、死体。

数えるのも嫌気が差す程の、死体。

そして、2つの声が響き渡った。

——片や、心底楽しそうな、無邪気な笑い声。

——片や、狂ったような、全てを呪う怨嗟の声。

ようやく、声の主達を視界に捉えた。

白い青年と、黒い少年だ。

互いに声を叩きつけ合い、拳で殴りつけ合う。

やがて2人は限界を向かえ、倒れ込む。

ふと、哀しみが頬を伝う。

拭っても拭っても溢れ出る。

彼はもう居ないのだ。

彼はもう居なくなってしまうのだ。

既に、自分の知る彼ではない。

せめて、彼の地獄をこの手で終わらせてあげよう。

起き上がる、彼だった異形に暴力の塊を向けて――

――引き金を、引いた。

彼はやつと。

地獄から、闘いの日々から。

開放された。

△▼△▼△▼△▼

僕の名前は、吉井 明久。

文月学園2年Fクラスの生徒だ。

今は学園に登校中。

自己紹介ついでに、文月学園の紹介もしよう。

僕の通っているこの文月学園は、特殊な学校だ。

特殊と言われる由縁は試験召喚システムという物にある。

これは召喚獣と呼ばれる、自分をデフォルメさせた存在を召喚するというものだ。

学生はこの召喚獣を役し、互いに戦わせるのだ。

召喚獣にはそれぞれ強さがあり、その強さを左右させるのは学生自身のテストの点数だ。

点数が高ければその分強く、低ければその分弱くなる。

試験召喚システムは、学生同士競わせ、互いに切磋琢磨させる為にある。

ただ、その思惑に乗せられるのは向上精神溢れる者か、負けず嫌いが殆どだ。

生憎と僕は勉強嫌いで、向上精神も無ければ、大して負けず嫌いでもない。

つまり、どの学校にも少数はいる、成績不良者というやつだ。

ちなみに、誠に遺憾ながら、僕は観察処分者というバカの代名詞を学園で唯一保持している。

つまり、皆から吉井 明久Ⅱバカだと認識されているのだ。誠に遺憾だが。

……と、いつの間にか校門に着いてしまった。

これから授業があると思うと憂鬱だ。

そんな暗めの顔の僕を迎えたのは、筋骨隆々の鬼、鉄人こと西村教諭。

彼は僕が校門をくぐろうとすると、声を掛けてきた。

「おはよう、吉井。どうした、浮かない顔して。それと遅刻ギリギリだぞ」

「おはようございます、鉄人」

「西村先生だ。お前らFクラスの生徒は何度言えば俺の呼び方を改めるんだ」

「トライアスロンが趣味なんだし、呼びやすいから良いでしょう?」

「ほほう? よほど補習が受けたいに見える。何、安心しろ。観察処分者の吉井が勉強したいと言っていると報告すれば、すぐにでも補習が受けれる」

「ごめんなさい調子乗ってました西村先生」

「それで良い。……それと、浮かない顔をしていたが、何か悩みがあるなら相談に乗るぞ」

「お気遣いありがとうございます。でも、大した事じゃないので大丈夫です」

「そうか、なら良い。……もうこんな時間か。早く教室へ行かないと遅刻だぞ。遅刻すれば補習だ」

「それは大変ですね。ではまた後で」

「ああ、廊下は走るなよ」

「はい」

今の会話から何となく分かるだろうが、鉄人こと西村先生は事あるごとに補習を



課そうとしてくる鬼のような人だ。

しかし、本当に生徒想いな優しい人でもある。

だからこそ、ほとんどの生徒はあの厳しい先生の事を慕っているし、僕も口答えこそすれど本当は慕っている。

鉄人という呼び名とは、親愛を込めた愛称なのだ。

おっと、もうこんな時間だ。本当に遅刻しない内に自分の教室——Fクラスへと移動する事にしよう。

見慣れた廊下を渡り、ポロポロの我らがホーム——Fクラスのドアをくぐる。

それとほぼ同時に朝礼開始のチャイムが鳴った。

どうやらギリギリ間に合ったようだ。

遅刻ではない事に軽く胸を撫で下ろし、机と椅子の代わりにちやぶ台と座布団が置いてある教室を見渡す。

クラスメイトの中に、友人達の姿を見つけた。

「おはよう、皆」

僕の声に一番初めに気付いた、野性味溢れる大男が挨拶を返す。

「おう。相変わらず遅刻ギリギリだな、明久」

「今日も何とか間に合ったよ」

彼の名前は、坂本 雄二。このFクラスの代表だ。

雄二との間柄は、悪友という言葉が一番合っていると思う。

よく一緒になってバカをやっている。

雄二の挨拶で僕に気付いたのか、友人達がそれぞれ反応を返す。

「おはようなのじゃ、明久」

「おはよう、秀吉」

特徴的なじじい言葉を遣うのは、木下 秀吉。

美少女と言って差し支えない容姿だが、男である。

容姿ゆえに周囲から女子として扱われる為、何かあるたびに、わしは男じゃ！

と叫んでいる。

「…………おはよう」

「おはよう、ムッツリーニ」

彼の名前は、土屋 康太。通称ムッツリーニだ。

本人は否定するが、ドの付くムッツリスケベである。

また、盗さ……写真撮影が非常に上手い。彼の撮った写真は高価で取引されるほ

どだ。

変わった友人達だが、僕はそんな彼らと過ごす毎日が楽しい。

学園を卒業しても、こんな時間がいつまでも続けばいいのに。

と、そこで担任の教師である鉄人が来たので、自分の席に着く事にした。

△▼△▼△▼△▼

——場所は文月学園から変わり、とある廃れた建物内。

そこには、バラのタトウを額に入れた妙齡の女がいた。

その女は言う。

『さあ、ゲゲルを始めるぞ』

周囲に誰も居ないにも関わらず、しかし大勢に聞かせるように発せられた、日本語ではない女の掛け声。

それは、確かに大勢に聞き届いていた。

どこからともなく現れた、蜘蛛と人が合わさったような異形。

床を突き破って現れた、キノコと人が合わさったような異形。

空から舞い降りて現れた、コウモリと人が合わさったような異形。

他にも、数十を越える数の異形が、女の下へと集った。

異形達が、やはり日本語ではない言葉で言う。

『やっとゲゲルが始まったか。待ち長かったぜ』

『早速始めてえ！ リントを殺しまくってやる！』

異形達の思い思いの言葉に対し、女は簡潔に答える。

『慌てるな、まずはルールの説明を行う』

女は一息置く。

『今回のゲゲルだが、ルールを変則的にする。べ、ズ、メ、ゴの階級からそれぞれ5人が代表してゲゲルを行う』

女の説明に、異形の1体が異を唱える。

『おいおい、ちよつと待てバルバ！』

つまり合計して、たった20人しかゲゲルに

参加出来ないって事かよ!?

せっかく楽しみにしてたつてのに、そりやないぜ

!』

バルバと呼ばれた女は、その言葉に対し面倒そうに答える。

『文句ならダグバに言え。これは奴が言い出した事だ。もつとも、言った後で生きていくかは分からんがな』

『くつ……』

余程ダグバと呼ばれた存在が恐ろしいのか、異形達は押し黙る。

そんな中、一体だけバルバへ質問を投げ掛ける異形がいた。

『何故、ダグバはそんな事を?』

『簡単だ。全員のゲゲルが終わるまで待ち切れないそうだ』

『……ダグバらしいな。仕方ない、今回は納得しよう。……だが、次は全員参加にしてくれよ』

『ダグバがその気になればな』

あつさりと納得した異形に、周囲の異形達が異を唱える。

『おい！ そんな簡単に納得して良いのかよ?!』

『そうだ！ せっかくのゲゲルに参加出来ねえなんて、我慢出来るわけねえだろうが！』

『では聞くが、お前達にダグバを説得出来るか？ ダグバを説得するにはそれ相

応の力が必要だと思うが』

皆、一様に顔を伏せた。

『俺達ではダグバには敵わない。結局、弱者は強者に従うしかないんだよ』

『クソツ！』

その異形は悪態をつくつと、近くにあった空き缶を思い切り蹴り飛ばした。

バルバは唸りながら部屋の隅まで飛んでいく空き缶を目で追いながら、周囲の異形達に聞こえるように呟く。

『……参加出来ないと嘆くのは勝手だが、私は序列5位以上のみが参加出来るとは一言も言っていない。実力を示せば良いものを……』

バルバの眩きを聞いた異形達が、皆勢い良く顔を上げた。

『バルバ、そいつはつまり……』

『何の事だ？』

……そういえば、お前達は気が立っていたな。お前達の事だ、喧嘩でも始めるのだろうか……私は別に止めん。——例え死人が出てもな』

『『『!!』』』』

その瞬間、異形達は互いの命を奪う為、己が全力を以て拳を、牙を、爪を、武器を振るった。

全ては、ゲゲルという儀式に参加する為に。

『これでゲゲルが早く進むな。……だが、簡単に終わってしまったては面白くない。難しいからこそ、ゲゲルは面白い』

バルバは、いつの間にか手にしていた物に声を掛ける。

『そうだろう？ ——なあ、クウガ』

ねっとりとした笑みを、携えながら。

石のベルトは、何も答えない。

『フフフ、今回のゲゲルも愉しくなりそうだ』

それはとても愉しげで、しかしどこか背筋の凍る嘲笑い声だった。

その声は、喧騒の中に混ざって溶けていった。

## 崩壊

異形達の狂気の宴から、1週間が経った。

狂気の宴以降から、世間には不気味な噂が流れ始めた。

だが、その噂も大して広まっているものではない。

社会は今日も変わらない日常を送っている。

それは、ここ文月学園も同じ。

「——そのため、ここの回答はこうなる。……今の説明で分からないやつは居るか？」

「「「……………(スツ)」「」」」

「ほぼ全員分からんか……………これは補習だな」

「「「ふざけんな鉄人!!」「」」」

「いい加減西村先生と呼べ!!」

時刻は昼前、今は昼休み直前の授業中だ。

鉄人こと西村先生が問題の説明をしていたのだが、アホばかりが集まるFクラスの知能では、いかにせん理解が及ばなかったようだ。

それに呆れた鉄人が、僕らFクラスに補習を課そうとしたので、クラス一丸となって

阻止しようとしているのが現在の状況である。

ギヤーギヤーと騒いでいるうちに授業終了のチャイムが鳴る。

必死の抵抗も虚しく、結局補習は放課後行うことで確定した。

そして、夕方まで時間は過ぎる。

時刻は18時、部活を終えた学生達がそれぞれ帰宅する時間帯だ。

そして部活もしていないのに、そんな時間まで補習で残っていたFクラスのメンバー。

やっと地獄のような時間が過ぎ去った……。

荷物を通学バッグに詰め込み、さっさとこのささくれ立った畳の教室からおさらばしよう。

よっこらせ、とオヤジ臭い掛け声を口に出しながら立つ。

それが目に映った僕の友人達が、帰りの挨拶を掛けてくれた。

「お、帰るのか明久。また明日な」

「気を付けて帰るんじゃないぞい」

「……最近は何物騒。寄り道はしない方が良い」

「うん？　何が物騒なの？」

ムツツリーニがいつになく真面目な顔で忠告をしてきた。



僕、そんな話初めて聞いたけど。

彼は人差し指をピンと伸ばし、言い聞かせるように話し始める。

「……あくまで噂なんだが、ここ数日で、変な言葉を話す化け物が何度か目撃されてるらしい」

「変な言葉を話す化け物？」

宇宙人か何か？」

「……その説もある。ただ、問題はそこじゃない」

「勿体ぶつてないで教えてよ」

「……その化け物が目撃され始めてから、殺人事件が数件立て続けに起こっている。それも、そのほとんどが妙な死に方で」

「妙な……死に方？」

思ったよりもヘビーな話だった。

思う事はあるけど、まだ続きがあるみたいだし、とりあえず聞こう。

「……死亡した被害者の大半が、蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされてから、のどを一突きにされていたらしい」

蜘蛛の糸？

ぐるぐる巻き？

「じゃあ犯人は巨大蜘蛛って事？」

「……それは分からない。ただ、化け物を見たって人は皆、口を揃えて人型の蜘蛛だった

と言つたらしい。恐らく殺人事件と関わつてるとは思うが……」

「ふーん……確かに物騒だね。分かった、しばらくは寄り道せずに帰るよ」

「……そうした方が良い。俺も早めに帰る」

そう言つてムツツリーニも帰る支度を始めた。

今の話を聞いてた雄二と秀吉、更にその周りのクラスメイトも支度を始める。

正直、蜘蛛の話うんぬんは余り信じてない。

ただ、殺人事件が起きてるのは事実だから、事件に巻き込まれないようすぐに帰る事にした。

——この頃の僕は、まだ他人事だと思つていたんだと思う。

これは、他人事と聞き流してはいけなかった。

もつと、深刻に捉えるべきだった。

じやなきや……あそこで寄り道したりしなかった。

これが——地獄のような日々の、始まりだった。

△▼△△▼▼

現在、僕は学校を出て自宅へと向かつて歩いている。

周囲には肉屋や八百屋といった店が建ち並んでいる……俗に言う商店街だ。

今は夕方、この時間帯は主婦の方が大勢集まっている。

どうにか値切りをしようとするおばさん達の大きい声と、それに負けない位張り上げた店番のおじさんの声。

うるさくはあるが、それは活気に満ちているという事。

今日もこの辺は平和だ。

さてと、さつさとここを抜けて家に帰ろう。

商店街を見るのもそこそこにして、歩を進める。

すると、反対方向から聞いた声が掛けられた。

「あ、アキじゃない。やつほー」

「こんな所で偶然ですね、明久君」

「美波と姫路さんじゃないか。2人してどうしたの？」

声を掛けて来たのは、我らがFクラスに2人しか存在しない女子である島田

美波

と姫路 瑞希さんだ。

島田 美波の特徴と言えば、まずはポニーテールが挙げられるだろう。

そして忘れてはいけないのが、絶望的に無い胸だ。

本人に言うのと殺されるので、絶対に声には出さないが。

そして、姫路 瑞希さん。

彼女の特徴は、毛先にウェーブが掛かったピンク色の長髪だ。

もつと言うなら、たわわに実ったメロンの様な胸もある。

……さつきから胸の事しか語ってないような気がする。

それはともかくとして、こんな所でこの2人に会うのは珍しい。

2人して下校ついでに夕飯の買い物でもしに来たのだろうか？

「アキは今帰り？」

「うん。2人は夕飯の買い物？」

「そんな所ね。瑞希は文房具の買い足しだけど」

「へえ、流石に勉強熱心だね。……所で、2人は最近の不穏な噂、知ってる？」

「ううん、知らないわね。瑞希は？」

「私も知りません。何かあったんですか？」

「どうやら2人は知らないみたいだ。」

「僕も今日知ったばかりだけど。」

物騒な噂があるし、女の子2人だけで歩くのは危険だから教えとこう。

「……1週間で、殺人事件が立て続けに何件も起きてるんだって。しかも、そのほとんどが蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされて死んでるとか。嘘か本当か分からないけど、化け物の姿も目撃されてるみたいだし」

「嘘、殺人事件？ 知らなかったわ……」

「それに、何か不気味ですね……」

殺人事件と聞いて、彼女達は怯えた様子を見せる。

「だから、出来るだけ寄り道はしない方が良いつてき。2人とも買物物は済んだの？」

「うん……」

「済みましたけど……」

「だったらすぐに帰った方が良いね。そうだ、家まで送るよ」

「え、流石に悪いわよ」

「それじゃ明久君が寄り道になってしまいますよ」

「そうだけど……もし2人に何かあったら僕が嫌だからさ。男なら女の子を守らないとね」

遠慮されたけど、僕もここは譲れない所。

食い下がると、2人は諦めたように頷いた。

「はあ……こういう事に関しては、アキは言い出したら聞かないもんね。正直怖かったし、お願いするわ」

「すみません、よろしくお願いしますね。明久君も、私達を送ったら真っ直ぐ帰って下さいね。私達も明久君に何かあったら嫌ですから」

「了解」

なるほど、確かにそうだね。

2人が嫌な思いをしないように、僕も無事に帰らないと。

「それじゃ、遅くならない内に帰ろうか。美波と姫路さん、どっちが先に帰る？」

「ここからなら瑞希の家の方が近いわ。先に瑞希を送ってあげて」

「ええっ？　　そんな、美波ちゃんに悪いですよ」

美波の提案に、姫路さんは首を振って遠慮する。

「良いのよ。ほら、ウチの家から行くとアキが遠回りじゃない？」

それはアキに

悪いから」

「う……分かりました。じゃあ、すみませんが私からお願いします」

「うん。僕としても早く帰れるのは助かるよ。じゃ、行こうか」

僕の言葉に彼女達は頷くと、家まで案内を始めた。

歩き出した2人に着いて行こうと1歩足を踏み出し——そこで足を止める。

「？」

ふと、視線を感じた気がするからだ。

誰だろうと周囲を見回すが、目に映るのは、夕食の材料を品定めする奥様ばかり。

誰1人として僕達を見ていない。

唐突に足を止めた僕を不思議に思ったのか、美波と姫路さんが声を掛けて来た。

「アキ? 何ボーツとしてるの。行くわよ」

「遅くなるといけないと言ったのは明久君ですよ」

「ああ、うん。ごめんごめん。今行くよ」

2人に急かされ、小走りに追いかける。

もう視線は感じなかった。

「何だったんだろう」

気のせいかも知れないけど、物騒な噂もあるし、一応周りを警戒しておこうかな。

そして僕らは、人々の喧騒の中を歩いて渡って行った。

△▼△▼△▼△▼

——少し歩いた時だった。

「それですね、お母さんだったらコンセントを刺さずに掃除機を——……?」 何

でしょう、あ……あれ……っ」

他愛もない話題に花を咲かせ、開いた花のような笑顔を見せる姫路さんの顔が、凍りついたのは。

「姫路さん?」

「ひ……と、が——」

「人？　——姫路さん!？」

何かを見つけた姫路さんは、顔を蒼白く染めてへたり込んだ。

一体何を見たのかと、彼女の視線をなぞると——

「ま……まさ、か……」

視線の先には、細い路地裏があつた。

日が暮れてきた事もあり、薄暗いその場所には——白い何かで包まれた……いや、白い糸のような物でぐるぐる巻きにされた、成人男性程の大きさの『何か』が転がっていた。

急速に口が渴いていくのを自覚しながら、ゆっくり……ゆっくりと近寄る。

段々見えてきた、この瞳に映るのは——

「き……きやあああああつ!!」

——鮮やかな赤と、人だった肉の塊だ。

「殺、人……事件?」

そして僕は、殴られたかのようなショックのせいで、気づくのが遅れた。

——暗がりから姿を現した、人の形を取った、化け物に。

その化け物は——8つの瞳で僕を捉え、茶色の皮膚に覆われた指で指差し、蜘蛛を連想させる黒い牙の生えた口で、こう言った。



『ズギザ・ゴラエザ……』

不思議と、化け物が笑ったような気がした。

## 希望

——そして化け物は、こう喋った。

『ズギザ・ゴラエザ……』

8つの瞳に見つめられ、指さされ……狙われたと察した。

「ひっ……」

得体の知れないものを見た恐怖に、思わず叫びながら逃げ出したくなるが、持てる理性全てを注ぎ込んで踏み留まる。

僕の後ろには、腰を抜かして震える、姫路さんがいるからだ。

美波は、顔色は真っ青だが腰は抜けていないようだ。

「クソツ……美波！　姫路さんを連れて逃げて！」

「アキは？」

「僕もすぐに逃げるから！」

「でも——危ないアキっ！」

僕を置いて行けないと続けたかったのだろう。

しかしその言葉は、化け物が腕を振りかぶった事で中断を余儀なくされた。

「くっ!？」

とつきに体をひねる。

すると、空を裂き、唸る拳が耳のすぐ横をかすめていった。

運良く間一髪の所で避けたが、化け物は舌打ちをすると、再び腕を振り上げてきた。

今度はそれから目を離さずに、2人に叫ぶ。

「良いから逃げて!」 2人が逃げないと僕も逃げられない!」

「……分かったわ。瑞希を逃がした後、助けを呼ぶから!」 絶対に死ぬんじゃないわ

よ!」

「そうしてくれるとっ!」 くうっ……!」 助かるっ、かなっ!」

会話してる間にも、容赦なく振られる拳。

両手の甲からは2本つつ鉤爪が生えているうえに、唸りをあげながら振られる拳は、当たれば致命傷になる事を雄弁に物語っていた。

「待ってなさいよ!」 行くわよ瑞希」

「ひ……嫌、嫌あ……!」

「瑞希!」 しょうがない、後で文句言わないでねっ」

「ひゃっ」

そう言っつて姫路さんを無理矢理抱えて走り去る美波。

その際に周囲に目を向ける。

周りを気にする余裕などなかったので気づかなかつたが、周囲の人々は化け物を見てパニックになっていた。

パニックのせいで、助けが遅くなるのでは、という思考が脳をよぎる。

「これ……助けが来るまで生きてられるのかなあ——危なっ！」

耳の側で唸る風切り音。

油断した為に、危うく大変な事になる所だった。

今の所何とか避けているが、パンチしか放つて来ない所を見るに、化け物が本気でな  
いのは明白だ。

遊んでいるのか、慢心しているのか。

理由は分からないが、これなら何とか助けが来るまで持つのではないだろうか。

……と思つたのは、少しばかり都合が良すぎたようだ。

『アズビザ・ゴワリザ・ゾソゾソギベ』

再び化け物が、聞いた事の無い言語で話し掛けて来た。

意味は全く分からないが、先程までとの雰囲気の違いは感じ取れる。

直感的に、本気で殺しに掛かるつもりだと悟つた僕は、いつでも攻撃を避けられるように腰を深く落としておく。

しかし、僕は1つ重要な情報を失念していた。

そう、それは——亡くなっていた男性が、何でぐるぐる巻きにされていたのか、だ。死に対する恐怖で、そのことまで考えが及ばなかった。

『ヨベスバヨ！』

「うわっ!!?　しまった、蜘蛛の糸……!」

化け物の口にあたる部分から吐き出された、糸。

その、透き通るほどに白い、粘着性を持った糸に腕を絡め取られた。

『ガガ・ポチチビボギ』

「ぐ……うう……!　このままじゃ……殺される……っ!」

口から吐き出した糸を、緩慢な動作で引き寄せる化け物。

1手繰り……また1手繰り……。

僕と化け物を繋ぐ糸が短くなるたび、言い知れぬ恐怖が湧いて出た。

もはや外間など気にする余裕など無くなった。

叫び、嘆き、情けなくも勝手に命乞いを発する口。

絡め取られている自分の腕すら引き千切らんとばかりに全身で踏ん張るが、この身1つ分も引き戻す事は敵わなかった。

たかが男子高校生の腕力とは言え、全力での抵抗を歯牙にも掛けない程の、圧倒的な

力の差。

絶望するには、充分だった。

『ゴドバギブ・バダダバ・ガガギベ』

「ひい！　嫌だ、死にたくない！　やめて！　殺さないで！」

『ググガギ・ボレデ・ザラレ』

化け物は何事か喋ると、自身の顔の前で右の拳を握りしめた。

すると、右腕に生えている2本の鉤爪が、易々と胴体を貫ける程までに伸びた。

（ああ、なるほど。今までの被害者ののどに穴を開けたのは、この鉤爪だな？）

次に風穴が開くのは自分ののだと言うのに、酷く他人事を感じた。

——振り上げられた鉤爪。

このまま突き込まれれば、僕は確実に命を落とすだろう。

そう思うと……無性に、虚しくなった。

無性に……謝りたくなった。

——生きるって約束を、守れそうになかったから。

「ごめん、美波……姫路さん……父さん……母さん……姉さん……皆……。僕……ごめん——さようなら」

『ギン』

迫る。

死が、迫る。

せめて穏やかに瞳を閉じて……。

そして――

「――諦めるな！」

――間に合わないと思っていた希望の声と共に、頼もしいとすら感じる轟音が鳴り響いた。

助けが、来たのだ。

「もう大丈夫だ！　　私は刑事だ！」

「う……刑事、さん？」

絶望に閉じた瞳を、今度は希望でもって開ける。

その瞳に映るのは――煙が立ち上る拳銃を構えた、20半ばの男性だった。

ふと鉤爪が自身を貫いていない事に気付き、一体なぜと、化け物の方を向く。

すると、鉤爪は銃弾で弾かれたのか、首筋の僅か数センチ横で空を切っていた。

「凄い、こんなに正確に撃ち抜くなんて……」

『リントゴドビグ・ジャデデ・ブセダバ！』

化け物と言うと、自慢の鉤爪を撃たれて怒り心頭と言った様子だ。

僕を拘束していた糸はまだ離していなかったのだが、刑事さんへの怒りで僕に対する興味を失ったのか、糸を放り出した。

化け物はそのまま、刑事さんに向かって一直線に歩き出す。

それを見た刑事さんは、僕に向かって叫ぶ。

「君、逃げなさい！　ここは私に任せて、早く！」

「は、はいっ」

叫びつつも拳銃を撃ち、化け物を攻撃する刑事さん。

僕はその言葉に従い、後ろを振り返る事なく、一目散に逃げた。

「——何っ!?　銃弾が、効かない!?!」

そんな——不安になるような言葉を聞きながらも、逃げた。

自分が助かる事だけを考えて、全てを初対面の刑事さんに、押し付けるように。

△▼△▼△▼△▼

「——はあっ、はあっ、はあっ……!」

僕は、逃げた。

足がどうしようもなく笑ってしまう程に。

僕は、逃げた。

あの刑事さんを生け贄にするかのように。



僕の心は、今……罪悪感で満ちていた。

「僕……僕は……最低だ……っ！　助けてくれたあの人を、見殺しにするような事を……っ！」

去り際に聞こえた、刑事さんの驚愕の声。

銃弾が効かない――。

つまりは、刑事さんもまた、化け物に対抗する術を持たないと言うことだ。

そんな状態で1対1で戦えばどうなるか……それは、身を以て体験したではないか。

「今からでも助けに――助……け、に……」

助けに行つて、どうすれば良いのだろうか。

あの化け物は、銃弾すら効かないと言うのに。

助けに行きたいけど、どうする事も出来ない。

そんな葛藤が、僕を苦しめていた。

――そんな時だ。

「力が欲しいか？」

「っ!？」

――白いドレスに身を包んだ妖艶な女性が、僕の前に表れたのは。

その女性は、もう一度僕に問い掛けた。

「力が、欲しくないか？」

「……欲しいさ」

「それはなぜだ？」

「……刑事さんを、助けたい」

どうして急に表れた女性がこんな質問をしたのか、分からない。

だけど、どうしてだろうか。

何となく、答えなきやいけない気がしたんだ。

「そうか」

女性はそう言うと、僕にとある物を見せて来た。

それは——石のベルトのような物だった。

「それは——ぐっ?! うう……!」

不可思議な現象が起こった。

石のベルトが、突然光ったのだ。

その瞬間、鈍い頭痛と共に、妙なイメージが脳をよぎった。

——赤い装甲を身に纏った、徒手空拳の戦士。

——青い装甲を身に纏った、棒を持った戦士。

——緑の装甲を身に纏った、銃を持った戦士。

——銀と紫の装甲を身に纏った、剣を持った戦士。

これらのイメージが何なのかは分からない。

……いや、1つだけ分かる事はある。

それは、これらが力になるという事だ。

僕は、石のベルトを見つめる。

「これが欲しいなら、くれてやろう」

視線がどこに向けられているか気付いたのか、女性は石のベルトを掲げながら、僕に譲ると言ってきた。

「え、でも……」

「迷っている時間があるのか？」

「っ……」

確かに、迷っている時間はない。

もしかしたら、今この瞬間にも刑事さんは危機を迎えているかも知れない。

それは……それは嫌だ。

こんな見殺しにした形で、命の恩人と別れなんてしたくない。

せめて、あの人の名前を聞いて……そして、ちゃんとお礼を言うんだ。

……なら、やれるだけやってみよう。

「僕は——」

せつかく助かった命だけど……また殺されそうに——いや、今度こそ殺されるかも知れないけれど。

僕は、僕を助けてくれた刑事さんを、助けるんだ。

「僕は——戦います。そのベルトを……力を、僕に下さい」

力強く、言い切る。

そして、頭を下げる。

女性は——

「良いだろう。これはお前の物だ」

妖艶な笑みを見せながら、力をくれた。

それを受け取り、そして——腰に、装着する。

すると、石で出来たベルトは、僕の意思に呼応するかののように、光り輝き始めた。

「待って下さい、刑事さん。今——助けに行きますから！」

やがて、光が全身を包み——。

——瞬きの間に、弾けた。

そこには、吉井 明久という少年の姿はなく。

白い——純白の戦士の姿が、希望の光と共に、在った。

戦士は——駆ける。

## 大人

——白い戦士は、駆けた。

陸上競技における100メートル走のアスリート選手にはやや劣るが、それでも充分速い速度で、己の今出せる全力を以て商店街を走り抜ける。

△▼△△▼▼△△▼▼

やがて、刑事さんに助けられた場所にたどり着くと……。

「ぐっ……うう……！」

「刑事さん!?!」

刑事さんは、化け物に片手で持ち上げられ、今にも鉤爪で刺し貫かれそうになっていた。

当然、そんな事はさせない。

「やめろお!」

『バビ!?!　　グガ!』

走る勢いそのままに、身体全体を使ったタックルを叩き込む。

逃げる前は全力で引っ張っても微動だにしなかった化け物だが、どうだろう。

その実、僕のタックルを受けた化け物は、車に轢かれたかの如く跳ね飛んだ。

必然的に、化け物に掴まれていた刑事さんも化け物と共に跳んでいく訳だが……。

どうやら、運良く擦り傷程度で済んだようだ。

「ぐ……み、未確認生命体が、2体……第2号!」

「え?」

未確認生命体?

一体それは何だろう。

それに、刑事さんは僕が分からないのだろうか。

まるであの化け物と同じものを見るような目で僕を——

「あ……そうか、今の僕は人間じゃないんだ……」

「未確認生命体が喋った!」

あの蜘蛛の化け物と同じように見られている事に、もの悲しさを感じる。

ここに向かう途中で、一度鏡に写った自分の姿を見た。

胸部から背中にかけて覆う、白い装甲——というより、鎧。

胸部の物と同色の、前腕部（肘から手首にかけて）と下腿（膝から足首にかけて）を包む、前腕当てとすね当て。

手の甲を覆う手甲。

身体全体の皮膚は、黒く硬く変質している。

そして、まるでフルフェイスの仮面のような物で頭部は覆われている。

その仮面の目の部位には、昆虫を思わせる大きなオレンジ色の複眼がある。

そして腰部には、オレンジ色の宝玉が埋め込まれた鉄色のベルトが巻かれていた。

そう、あの石のベルトが変化した物だ。

この身体を見て、人間だと思う人はいないだろう。

『ギラボパ・ギダバ・ダダゾ』

……つと、今の中に蜘蛛の化け物が体勢を整えてしまった。

僕は刑事さんと化け物の間に割り込む形で、化け物と相対する。

『ジャデデ・ブセダバ・クウガ・バブゴギソ』

「くっ!?!」

化け物は拳を握りしめ、振りかぶった。

激しい恨みが込められ、しかしどこか楽しそうに殴り掛かって来る。

その妙な剣幕に思わず一歩引いてしまうが、背後の刑事さんを思い出し、踏み留まって迎撃する。

「はあっ!」



やはり、この身体になった事で、強くなっている。

生身のままの時は1度でも喰らったら致命傷になっていただろうが、この姿でなら何とか受けている。

決定打を与えられない事に苛立ったのか、化け物は大振りのパンチを繰り出して来た。

大振りになった事で出来た僅かな隙。

それを見逃さず、今度はこちらから殴りつけた。

「おりゃあー！」

『グガー！』

怯む化け物。

そのまま追撃として蹴りを叩き込む。

『グガ……ジャスバ・クウガ・バサボセ・パゾグザ』

「しまった、蜘蛛の糸っ!？」

更に追撃を仕掛けようとして、糸のカウンターを貰ってしまった。

とっさに身をひねったが、避けることは叶わず腕ごと胴体を絡め取られてしまう。

「く、くそっ……動けない」

『ジヨギダ・ギョビガンバ・ギギデジャス』

「うわあっ!?!」

動けないのを良い事に、糸を引っ張って、僕ごと近くのマンションに登る化け物。蜘蛛の化け物だけあって、壁を登るのもお手のものの様だ。やがて戦いの場は、マンションの屋上に移る。

△▼△△▼△▼△▼

場所は10階建てのマンション。

その屋上。

この高さから落下すれば、ただでは済まないのは明白だ。

屋上の床に叩きつけられた僕は、糸から脱する事が出来ないでいた。

その大きな隙を逃がす程、相手は甘くないだろう。

ゆっくりと、しかし確かにこちらに近づいて来る足音。

「このままじゃマズい……何とかして糸を外さない」と

だが糸は、いくら力を込めても千切れる気配がない。

人間の時と比べて遥かに上がった腕力を以てしても、この糸を千切る事は叶わない様だ。

『ブサゲ!』

「ぐっ!」

倒れたままの僕に、馬乗りになる化け物。

僕ののどを掴んで、伸ばした鉤爪で貫こうとしてくる。

幸いにも顔を狙った攻撃だったので、大きく首をひねって避ける事が出来た。

しかしこのままでは、いつかやられてしまう。

それは御免なので、フリーになっている足で化け物の背中を蹴ってやると、体勢を崩せた。

糸は今だほじけないが、この隙に馬乗りから逃れる事に成功した。

とは言っても、とりあえずの危機を脱しただけだ。

この糸をどうにかしない限り、僕が劣勢なのは変わらない。

「糸さえどうにか出来れば……」

さてどうしたものか、と考えた矢先の事だった。

甲高い、火薬の破裂した音が鳴り響いたのは。

「刑事さん!？」

そう、今の音は刑事さんが撃った拳銃の発砲音だったのだ。

放たれた鉛玉は見事化け物の側頭部に直撃した。

……が、驚くべき事に、銃弾が一人でに傷口からこぼれ落ち、あまつさえ瞬く間に傷が塞がっていくではないか。

これが刑事さんの言っていた、銃弾が効かないと言う事か。なるほど、確かに堪えた様子は見られない。

だがしかし、ダメージはなくても注意は引けた様だ。

その証拠に化け物は糸を手放し、刑事さんに向かって跳び掛かる。

「危ない、逃げて下さい！」

「なっ!？」

『ギベー!』

化け物が糸を放したので、何とか糸をほどく事が出来た。

その化け物と言うと、刑事さんに掴み掛かっている。

慌てて化け物を彼から引き剥がし、顔面を数度に渡って殴る。

殴る、殴る、殴る。

無我夢中で殴り続けて、気づけば屋上の端まで来ていた。

このまま突き落とせば大きなダメージになるだろう。

そう思い、僕は渾身の蹴りを放つ。

「これで、落ちろお!!」

『グガガ!　　ブゴ!　　クウガアアア!』

果たして目論見通り、胴体を打ち抜いた強烈な蹴りが、化け物を屋上から突き落とし

た。

何事か叫びながら落下していった化け物は、倉庫らしき建物の屋根を突き破って、そのまま姿を消した。

△▼△△▼△▼△▼

「……ふう。何とか追い払えたみたい」

「生まれ、未確認生命体第2号。お前はなぜ日本語が話せる。そしてなぜ俺を助けた」

「あ……その未確認何とか2号って、僕の事ですか？」

「そうだ。質問に答えろ」

「えーと……とりあえず、その拳銃を下ろしてくれませんか？」

安心したのも束の間。

刑事さんが次に狙ったのは僕だった。

まあ、今の僕の姿は人間じゃないとは言え、やっぱり化け物扱いされるのは少し悲しいな……。

それに、拳銃を下ろしてと頼んだにも関わらず、下ろしてくれない。

警戒されてるなあ……。

せめてこの姿が元に戻れば、弁明のしようもあるのだけれど。

そう思ったと同時に、僕の身体全体が光った。

光はすぐに収まり、自分の身体を見下ろすと、なんと元の人間の姿に戻っていた。刑事さんは心底驚いている。

これならいけるかも知れない。

「君は……未確認生命体第1号に襲われていた少年か。どういう事だ。君が未確認生命体第2号なのか？」

「えっと、その未確認生命体ってのがよく分からないですけど、たぶんそうです。でも、僕は人間です、信じて下さい」

「……本当に人間だと言うのなら、証拠を見せろ」

「証拠……学生証なんかどうでしょう？　僕は文月学園2年Fクラスの吉井 明久です。この学生証にも同じ事が書いているはずですよ」

「……確かに、この学生証は本物だな。君が人間である事は確かな様だ」

僕が人間だと分かると、刑事さんの物腰が少し柔らかくなった。

「しかし、それではなぜあんな姿に？」

「それは……」

僕は妙な女性からベルトを受け取った事を話す。

その話を聞いた刑事さんは、怪訝な顔をする。

「妙な女？　知り合いだったのかい？」

「いいえ、初対面でした」

「そうか……その女、怪しいな」

刑事さんはあごに手を添え、何やら考え込んでいる様子だ。

少しの間そのまましていると、不意に顔を上げて話し始める。

「分かった。今日の所はもう帰りなさい。これが私の電話番号だから、明日の空いている時間に掛けなさい。それと、こちらが私の信頼している医者が勤める病院の番号だ。1度、身体を検査して貰いなさい。医者は椿という名前だ」

「は、はい。あの……刑事さんのお名前は……」

「ああ、まだ自己紹介をしていなかったね。私は一条 薫。すでに話したが、刑事だ」

「一条さん……。その、先程は助けて頂いてありがとうございます！ お陰で、今生

きています」

「礼を言うのはこちらの方だよ。私も君に助けられた」

そう言い合うと、お互いに礼をし合う。

刑事さん改め一条さんは、まだ蜘蛛の化け物がいるかも知れないとの事で、僕を家まで送ると切り出してきた。

「大丈夫ですよ。もしまた襲われたら、あの姿になって戦いますから」

——しかし、僕がそう言った途端、急に表情が険しくなった。

そして強く僕の肩を掴み、こう言う。

「君が力を手にいれたと思うのは勝手だ。だがあの化け物——未確認生命体と戦うのは我々警察の仕事だ。守るべき一般市民……ましてや、未成年で学生の君が戦うべきではない！」

「で、ですが、拳銃だって効かなかったじゃないですか。それなら僕が戦った方が……」  
良いじゃないですか、と最後まで言えなかった。

一条さんが、とても悲しそうな顔をしていたからだ。  
思わず息を呑んでしまう。

「……そんなに、身体が震えているのに戦えるのかい？ ——姿が戻ってから、ずっと震えているよ」

「っ……………」  
気づかなかった。

僕の身体は、確かに震えていた。

止めようとしても、一向に止まる気配がない。

「あ、あれ？ おかしいな。なんで止まらないんだろう」  
「……………」

そんな僕の様子を見て、一条さんは益々悲しそうに顔を歪めた。



彼は再度肩に手を、しかし、今度は優しく置いた。

「……君が、戦う必要なんてないんだ。……怖かっただろう。もう大丈夫だ、後は我々大人に——警察に任せなさい。これからは、中途半端に関わってはいけないよ」

もう駄目だった。

溢れ出る涙が止まらない。

僕は——怖かったんだ。

一条さんを助けるって思いで誤魔化していただけで、本当はどうしようもなく、怖かったんだ。

そして、優しい言葉を掛けてくれた一条さんへの感謝で、恐怖とは違った意味での涙が止まらない。

「一条……さん……っ！　怖かった……怖かったです……っ！」

「良く頑張った。君のお陰で私も生きています。だから、後は任せるんだ」

一条さんは、泣きじやくる僕の頭を強めに撫でた。

髪の毛がぐしゃぐしゃになってしまいが、今はその温かく大きな手が、とても安心した。

「さあ、そろそろ泣き止めよ。家まで送ろう」

「……はいっ！」

## 束間

一条さんに家まで送ってもらい、その日は何事もなく夜が明けた。

そして朝は、色々なことがあった為に遅くまで寝付けず、少し寝不足気味だ。

今日も学校があるので制服に着替え、寝癖を解いて歯を磨き準備を整えた。

家を出ていつもの通学路を歩き、相変わらずボロつちい我らがFクラスに遅刻ギリギリで滑り込む。

「おはようなのじゃ明久。……？」 お主、何か浮かない顔をしておるのう」

僕の姿を見た秀吉が挨拶をしたが、心配そうに顔を覗き込んできた。

昨日の未確認生命体の件のせいで晴れない僕の心を見透かされる気がして、既に人間ではなくなっていることがバレるのではと、ついドキリとしてしまった。

「明久？」

「い、いや！ 何もないよ。それよりそろそろ鉄人が来ちゃうから、席に座ろう」

「何も無いのなら良いのじゃが……。何か相談があれば乗るからの」

「ありがとう、秀吉」

話が終わると同時、ガラリとドアを開けて鉄人が入ってきた。

鉄人の姿を見て、Fクラスの皆は席に着く。

「おはよう諸君。点呼を取るぞ」

そう言つて鉄人は出席を確認する。

やがて全員の名を呼び終えた。

「島田と姫路は休みだ。休みの理由については後ほど説明する。……それと吉井、朝礼が終つたら少し来てくれ」

「え、はい」

そうか、美波と姫路さんは休んだか……。

無理もないか、本物の死体と化け物——未確認生命体を見たんだから。

『また何かやらかしたか吉井?』

「……違うよ」

『ホントかよ? またバカなことしたんじゃねーのか?』

クラスメイトの数名が茶化してきたけど、無神経なその言葉に少しイラ立った。

……けど、クラスメイトは昨日の未確認生命体のことを知らないから、ここで僕が怒つても仕方ない。

僕がこれ以上何も言わないでいると、鉄人が助け船を出してくれた。

「滅多なことを言うな!」

吉井は今回、断じて悪いことはしていない。これ以上

何か言うようなら生徒指導部まで来てもらうぞ」

『す、すみません……』

「反省したなら良い。さて、朝礼を続けるぞ」

それからは滞りなく朝礼が終わり、鉄人に言われた通り彼の元へと行った。

「吉井、少し場所を変えるぞ」

「はい」

僕らは教室から出て、近くの空き教室に入った。

「……さて吉井。まず最初に聞くぞ。怪我は、ないか？」

「怪我、ですか？　ありませんけど」

「そうか……安心したぞ……」

「あ、あの。どうしたんですか？」

心底安心したと言わんばかりに額を拭う鉄人に、疑問を投げ掛ける。

「いや、吉井と姫路と島田の3人が殺人事件に巻き込まれたと、警察の方に聞いてな。無事とは聞いていたが、どうしても心配だな……気が気じゃなかったんだ」

「警察の方ですか。もしかして、一条さんという男性でした？」

「そうだ。しかし、姫路と島田は精神的ショックが大きかったようだな……。一条警部補からは酷く怯えた様子だったと聞いている。……まだ若いというのに、可哀想に

……」

拳を固く結んでそう言う鉄人の表情は、とても悔しそうに歪められていた。

生徒想いで正義感の強いこの人のことだ、自らの生徒の危機に駆けつけられずに悔しい思いをしたのだろう。

少しの間、言葉もなく時間が過ぎ去る。

やがて鉄人は顔を上げ、僕に声を掛けた。

感情を飲み込んだのか、その顔からは悔しさが消えている。

「見苦しい所を見せた。ひとまずは3人が怪我なく無事で良かったということにしよう。時間を貰ってすまなかったな、辛いことがあればいつでも相談してくれ。全力で力になろう」

「ごちらうござい心配お掛けしました。お気遣い、ありがとうございます。それでは授業に戻りますね」

「ああ」

そして鉄人と別れ、僕は教室に戻った。

△▼△△▼△▼△▼

P M 1 : 3 4

警視庁内部

その中で一条と数名の警察官が会議をしていた。

「——では、未確認生命体のことを公表されるのですかね？」

一条が上司にあたる男性に確認を取る。

「そうだ。一条警部補、君が直接戦って脅威を知っているだろう。もはや我々が秘密裏に駆除するのは難しい。市民に呼び掛けて、出来る限り外を出歩かないなどをしてもらわないと、被害が広がるばかりだ」

「そうですか……混乱は避けられないでしょうね」

「それは承知の上だ。我々警視庁から呼び掛けて、出来る限り混乱を抑えるなどの対処を行う」

上司の言葉に、一条は一つ頷いた。

「分かりました。……では、未確認生命体第1号の行方を追うので、私はこれで」

「ああ、お疲れさん。既に何人も警察官がやられてるんだ、一条も気をつけろよ」

「はい」

一条は一礼をすると、会議室を後にした。

「やれやれ、あいつは堅物ですからね。俺たちが無茶させないようにしないといけませんね、松倉警備部長」

「そうだな。その時は頼むぞ、杉田刑事」

「ええ」

その場に残った、50代頃の初老の男性と、少し髪の毛が後退した30後半頃の男性が、見守るような目でそう言った。

△▼△△▼△▼△▼

PM 4:00

文月学園Fクラス内

1つの携帯電話に複数の学生が群がり、皆ニュースを見ていた。

その内容とは、警視庁からの未確認生命体の公表であった。

ニュースキャスターが、流暢にニュースを伝えてゆく。

『——警視庁本部は、人型の化け物——未確認生命体について発表をしました。現在、未確認生命体第1号と呼ばれる化け物は県内に潜んでおり、行方をくまっています。凶暴性が強く、既に多数の犠牲者が出ている為、市民の皆様は極力外出は避けるようにと警視庁本部はコメントしています』

「……未確認生命体、物騒」

「ああ、ヤバいな」

ニュースを聞いていた者の1人であるムツツリーニと雄二が、率直な感想を口にした。

(あの化け物、まだ退治されていないのか……)

未確認生命体第1号がいまだに近くに潜んでいることに、思わず身震いしてしまう。それはすなわち、更なる犠牲者が出る可能性があるということだった。

「明久? やっぱり朝から様子がおかしいのじゃ。顔が真っ青じゃぞ。保健室に行つた方が良いのではないか?」

「いや……大丈夫、だよ」

「いいや、尋常ではないのじゃ。やはり保健室に……」

「本当に大丈夫だから。保健室に行くほどではないよ」

「そうかのう……明久がそこまで言うのなら……。じゃが、変だと思つたらすぐに保健室に行くんじゃぞ」

「うん」

いけない。

未確認生命体のことを考えると、どうも顔色が悪くなってしまう。あまり皆に心配は掛けたくないんだけど……。

——あ。

保健室で思い出した。

一条さんから病院に行くように言われてたんだつた。



確か、椿さんという名前のお医者さんを訪ねればいいはずだ。

外出は避けるようにつて警視庁は言っていたし、未確認生命体は怖いけど……。

僕の身体がどうなっているのか気になるし、1度行ってみよう。

そう思い、一言断つてから離れ、一条さんから貰ったメモを見て病院に電話を掛けた。

そして少し話して、病院に訪問する日程が明日の昼過ぎに決まった。

学校があるけど、警察官に身体検査を受けるよう言われたと言えば、事情を知っている鉄人なら分かってくれるだろう。

……さつき心配ないって言つといて病院に行ったら、やっぱり秀吉たちに心配掛けちゃうよね。

ただの風邪だつて言えばそこまで心配掛けないだろうから、そう言つて誤魔化そう。

——さてと。

遅くなるといけないから、こちら辺で帰るとしよう。

……もうあんな化け物には会いたくないから。

そうして僕は帰路に着き、何事もなく無事に家へと帰り着いた。

## 絶望

A M 12:47

関東医大病院

「——君が、吉井 明久君だな？」

「はい」

胸に椿と書かれたネームプレートを掛けた、黒髪を短く切り揃えた清潔感溢れる男性が、僕の名前を確かめた。

それに対し、肯定の意を返す。

現在僕は一条さんに連れられて、関東医大病院に検診に来ている。

なぜ一条さんがいるのかと言うと、あまり病院に掛かったことがなく、手続きの仕方が分からない僕をサポートする為、付き添いに来たからだ。

「初めまして。一条から話は聞いている。私は君の担当医の、椿 秀一（つばき しゅういち）だ。よろしく」

「はい。よろしくお願ひします」

僕の身体の話は、すでに一条さんから話して貰っている。

「樫さんは信用出来る医者だということなので、スムーズに話を進める為にも先に知っておいて貰った。」

「さて、こちらが先ほど撮らして貰ったCT画像だが……君の身体には通常あり得ないことが起こっている。ヘソの辺りから四肢にかけて、体内で触手状に神経組織が伸びているんだ」

「ハ、これは……」

僕の検診結果であるその画像には、樫さんの言う通り、腹部の石のような核を中心として、触手のようなものが全身に伸びていた。

腹部の石は、恐らくベルトが関係しているだろう。

触手は見る限り細かったが、こんなものが身体にあるのを見ると、気味が悪くなる。

「あの、樫さん。これは一体何なんですか？」

僕の問題に、樫さんは難しい顔をして、頭を掻きながら答える。

「正直、良く分からんというのが率直な意見だ。だが……そうだな。これが君を未確認生命体に似た姿へと変えているのだろう、というのとは分かる」

「やっぱり……そうですか」

「そこで一つ、ある仮説が立ったんだが……この仮説は吉井君にとって、とても辛いものになる。——それでも聞くか？」

「……………」

真剣な表情で、真っ直ぐにそう言われる。

きつと、良くないことなのだろうと分かった。

正直聞きたくない。

どんだん身体が自分のものじゃなくなっていくようで、恐くてたまらない。

でも……。

「…………聞かせて下さい。僕は、僕の身体を知る必要がある……と思うんです」

「…………分かった」

椿さんは一度うつむき、決意を固めたように顔を上げた。

「吉井君。重ねて言うが、これは仮説だ。この仮説が絶対ではないことは、よく覚えてい

て欲しい」

「…………はい」

「…………この神経組織だが、これが君の身体を変質——つまり、戦闘用の身体に作り変えていると考えられる」

「その戦闘用の身体が、あの未確認生命体の身体……」

「そうだ。そしてその神経組織は、今はまだ細く弱いものだが……もし今後成長し、脳に

まで達した場合——」

嫌な予感に、冷や汗が額から流れ落ちる。

椿さんの唇の動きが、妙にゆっくりに感じた。

「——君は、理性を失い……ただひたすら殺しを繰り返す、殺戮マシンと化すかも知れない。——未確認生命体のように」

「そ……そんな——」

そう言うのと、彼は目を伏せた。

絶句。

そう表現するのが正しいだろうか。

そのあまりの仮説に、目の前が真っ暗になってゆくのを感じた。

「君の気持ち、察するに余りある……。だが吉井君、聞いてくれ。これも仮説なのだが、姿を変えることさえしなければ、神経組織の成長は無いだろう。つまり、戦わなければ普通の人として生活を送れるということなんだ。だから、希望を持って欲しい」

「本当ですか？　その……神経組織を手術で取る、ということは出来るんでしょ

うか。これさえ無ければ僕は普通の人間なんですよね」

そう問い掛けると……椿さんは、ゆっくりと首を横に振った。

「残念ながら、神経組織の摘出は出来ない……。身体と融合してしまっていて、とても取り出せるような状態じゃないんだ。……だから、出来ることは戦わないということだけ

だ」

「……う、嘘だ——こんなことなら、ベルトを受け取らなければ……最初から戦わなければ……あつ」

そこまで言つて、一条さんが居ることを思い出した。

僕があの時戦わなければ、一条さんは死んでいたかも知れない。

つまり、戦わなければ良かったと言うことは、一条さんが死ねば良かったと言つてい  
るようなものだ。

「い、一条さん。僕、その……そんなつもりじゃ……」

成り行きを見守っていた一条さんは、優しく僕の肩に手を置いて……しかし、非常に  
悔しそうな表情で言う。

「私を気にしなくて良いんだ吉井君。私が不甲斐なかったから、こんなことになつてし  
まつて……私は恨まれても仕方ないんだ。いや、私を恨んでくれ、吉井君。君がこんな  
目に遭つてしまったのは、私のせいなんだ」

「そんなこと……出来ませんよ……。命の恩人を恨むなんて……」

戦わなければ一条さんが死んでいた。

戦つた結果、本当の意味で人ではなくなるかも知れなくなつた。

命の恩人を見捨てることなんて出来なかつた。

普通の人間でいたかった。

——そうした、相反し矛盾してしまう想いが、ぐるぐると頭の中を回り続ける。

「う、ううう——」

延々と廻るその想いに板挟みにされ、どうすれば良かったのか答えも出ず。

ついには訳が分からなくなり、ただただ悲しいという感情だけが、頭の中を支配し出した。

今の僕にはもう、頭を抱えて泣き叫ぶことしか出来なかった。

「うわあああああああ!!」

あああああああ!!

あああああああ……

ぐうつ、えぐつ……ううう……」

狂ったように……いや、僕は今、狂っているのだろう。

泣き叫び崩れ落ちる僕を見て、悔しそうに……悲しそうに……悲痛な面持ちで拳を強く握る大人2人。

病院内に、絶望した少年の泣き声が響き渡った。

△▼△▼△▼△▼

P M 3 : 19

あれからたっぷり1時間は泣き続け、まぶたを赤く腫らしながら、病院を後にした。

一条さんに学校まで送って貰ったが、どうにも授業を受ける気にならず、鉄人に連絡

して今日は休むことにした。

今は、昼の帰宅路を歩いて帰っている途中。

「……………」

その道すがらふと、とある家が目に留まった。

忌中、と書かれた札が玄関先に貼られてあった。

——誰かの、お通夜だ。

失礼になるけど、少しだけその家を見ていると、小学生ぐらいの女の子が家から飛び出して来た。

その顔は涙と鼻水で、酷い有り様だ。

その女の子は泣きじゃくりながら、叫んだ。

『パパあ！』

何で未確認生命体はパパを殺したの!?

何でパパが死なな

きやいけないの!?

こんなのあんまりだよ……誰かパパの仇を討つてよ、未確認

生命体を倒してよお！

うわああああああ!!』

「あの子、もしかして未確認生命体の犠牲者の……」

あんな小学生の子供が、突然父親を喪つて……堪えられるはずがない。

……いや、小学生だなんて関係ない。

子供だろうが大人だろうが、突然親しい人を奪われたら、誰だつて受け入れられない



に決まってる。

あんな子供が憎しみに心を染め、仇を討って欲しいと願うのは仕方のないことかも知れない。

そして――

「僕には、未確認生命体と戦う力がある……」

両の手のひらを開いて、眺める。

この手には、未確認生命体を殺しうる力が秘められている。

あの子の……犠牲者たちの願いを、この手で叶えることが出来るかも知れない。

「だけど……この力を使ったら、僕は――」

人ではなくなるかも知れない。

この力を使い続けられれば、いずれ未確認生命体と同じように、殺戮を繰り返すだけのマシーンと化してしまう可能性がある。

それは絶対に嫌だし、人でなくなることが何より怖い。

そのまま僕は、この場から逃げないように家へと帰った。

「何してるんだ、僕は……っ！」

父親を喪って悲しんでいる子供が目の前にいたというのに、自己保身のことばかり考えてしまう自分自身に、無性に腹が立った。

## 決意

あれから逃げるように帰った後、僕はすぐに泥のように眠った。

自分の今後に絶望して泣き散らして、全力疾走で走り帰って、おまけに前日はあまり眠っていなかったからだろう。

様々な疲労が溜まっていたはずだ。

寝入ったのは午後4時半頃だったはずだが、もう朝の6時だ。

普段ならこんな早朝に起きることは滅多にないのだが、14時間近くも眠れば起きるのも当たり前だろう。

今日は学校に行くつもりだが、こんな時間に行った所でやることなんて特にない。暇を潰すにしても、ゲームをするような気分ではない。

何かやることはないかと考えると、宿題があつたことを思い出した。

宿題は嫌いだ、これ以外にやることもなく、何より気が紛れるので、することにした。

いざ宿題に取り掛かると、気分もあつてか、思いの外集中することが出来た。



A M 7 : 3 0

「ふう……終わつた。——つて、もうこんな時間か」

集中し過ぎた為、気が付けばいつも起きる時間だ。

いつも遅刻ギリギリなことを考えれば、この時間がマズいことはすぐに分かる。

急いで仕度をして、いつものようにドタバタしながら家を出た。

そして、いつものように遅刻ギリギリで登校し、雄二にそのことをからかわれる。

昨日、色々あつたけど、今日はいつも通りの日常だ。

変わらぬ日常に、少しだけほっと安心する。

「……今日も姫路さんと美波は来てない、か」

いや、やっぱり訂正する。

彼女たちがいないこの状況は、いつも通りの日常ではない。

その事実は僕に、否応なしに未確認生命体の事件を思い出させた。

途端に気が滅入り、顔を伏せがちになってしまう。

——それから今日1日、落ち込んだままで授業を受けた。

上の空になってしまうことも多く、度々先生に注意を受けた。

このままは良くないと、何とか気分を上げようとするのだが、やはり落ち込んだ気分は晴れなかった。

その状態の僕を見かねたのか、雄二や秀吉、ムツツリー二といった友人たちが話し掛けて来る。

「おい、明久。どうしたんだ一体」

「二昨日から様子がおかしいのじや。昨日も病院に行つたと聞くし……いい加減、辛いことがあるなら相談して欲しいのじや」

「……やはり、未確認生命体関係か？」

やっぱり、友人たちに心配を掛けてしまっていた。

ちなみに、僕と姫路さんと美波が未確認生命体に襲われたことは、既に鉄人から皆に話しがあつた。

正確にはこの学園の生徒が襲われた、とだけ話があり、襲われた生徒の名前は出してないのだが……姫路さんと美波が連日学校を休み、僕がこんな様子なので周りはとつとく察しているだろう。

さて、雄二たちに心配されている訳だが……彼らには悪いけど、詳しいことは話す気になれない。

ましてや、僕が未確認生命体第2号であることなんて。

——もし、このことがバレたら……。

きつと、皆は僕を拒絶するだろう。

気味悪がるだろう。

恐怖されるだろう。

この、特に親しい友人たち……親友と言っても良いこの3人に拒絶されたら——きつと、僕は堪えられない。

だから……僕は黙っていることを選択した。

「……ごめん、何でもないから」

ようやく絞り出したその言葉に、雄二たちは怒りをあらわにする。

「何でもないって……明らかに落ち込んでんのに、そんな訳ねえだろ！」

なんで

何も言わねえんだ！」

「なぜ頼ってくれないのじゃ！」

そんなにワシらは頼りにならんか!?

こ

んな時に助けを求めるのが友達というものじゃろう!？」

「……言ってくれなくては、何も分からない。どうして良いかも。だから教えてくれな  
いか、明久」

僕の為を想って、本気で怒ってくれていることに、思わず心が暖かくなった。

……でも。

それでも、これだけは話せない。

この繋がりを保っていたいから。

「心配してくれてありがとう……でも、どうしても話せないよ。大丈夫、時間さえあれば気持ちの整理が付くはずだから」

「明久……」

雄二たちが、少し悲しげな顔になった。

雄二が言葉を紡ごうと口を開くが、それはクラスメイトの焦った大声によって上書きされた。

『おいつ、未確認生命体の速報だ！』

未確認生命体第3号が新たに出現、うちの女

子生徒を襲って逃走したってよ！』

「っ!？」

その言葉に、思わず驚きを隠せなかった。

そう——クラスメイトの彼はこう言ったのだ。

……未確認生命体、《第3号》と。

「第………3号？」

まだ、あんなのがいるって言うのか……!？」

しかも聞き流せないのが、うちの女子生徒が襲われたということだ。

昨日の被害者の遺族である女の子が、頭の中をよぎった。

気付けば僕は、速報を伝えたクラスメイトに掴み掛かる勢いで迫っていた。

「その女子生徒は無事なの!？」

その生徒の名前は!？」

『お、おい落ち着けて！　　女子生徒は……命は助かったみたいだが、顔を何針

も縫うような大怪我を負ったらしい……』

「生きてはいる……けど、女の子なのに顔を……」

その女子生徒は、女の命でもある顔を失ったも同然じゃないか……。

きっと酷い傷跡が残るだろう……。

「その、女子生徒の名前は……？」

『……………』

名前を問うと、なぜかクラスメイトは黙り込んでしまった。

視線を反らし、とても言いにくそうにしている。

その様子に、嫌な予感をひしひしと感じた。

「ね、ねえ——」

『……………島田』

「……………え？」

『……………島田　美波。うちのクラスの、島田　美波が被害者だ』

瞬間、クラス内からは音が消えた。

僕は——気付けば、走り出していた。

「お、おい明久！」

雄二の制止も聞かず、教室から飛び出した。

途中、先生らしき人影とぶつかったが、そんなこと気にしている余裕はなかった。

ポケットから携帯電話を取り出し、一条さんの電話にコールを掛ける。

一条さんはすぐに出てくれた。

「一条さん!？」 未確認生命体第3号に襲われた女子生徒——島田 美波がどこ

の病院にいるか教えて下さい!!」

あまりの剣幕に驚いていたようだが、クラスメイトだと説明すると、一条さんは美波の救急搬送された病院を教えてくれた。

「美波、美波——美波!」

全力を超えた凄まじい勢いで走り、学校を抜け出した。

教えて貰った病院を一直線に目指して。

△▼△▼△▼△▼

PM 2:41

病院内・病室前

「ゼエ……ゼエ……げほっ……み、美波……!」

ようやく美波の病室にまでたどり着いた。

ひたすら走り続けて汗だくになっており、シャツはびしょ濡れだ。



だけど、そんなことには構わず病室のドアに手を掛ける。

ノックすらも忘れ、僕はドアを開け放った。

そこには――

「あ……アキ……」

「み――な、み……」

顔半分をガーゼで覆い、瞳から光が失われてしまった美波がいた。

いつものような明るさなど、どこにも……欠片すらなく。

彼女は、ただひたすら無機質な瞳のまま、力なく顔を隠した。

「いや……見ないで……。こんな顔なんて……ウチ、アキに見せたくない……」

「あ、ああ……美波……そんな……」

なんて、残酷なんだろうか。

彼女は……島田　美波は、女としての命である顔を、奪われてしまった。

……唐突に。

未確認生命体によって。

「お願い、アキ……。ウチを……見ないで……！　　ひっ……うっ……」

「……………」

感情の抜け落ちた美波の表情だったが、やっと一つだけ感情が戻った。

——それは、悲しみという感情だ。

今の彼女の表情は、悲しみの結晶である涙で1色に塗り潰されていた。

それは——数日前に見た、被害者の遺族である女の子が流したものと、同じだった。

「……美波、またお見舞いに来るから……」

「うっ……ひぐっ……」

これ以上ここに居ても美波を傷付けるだけだと思い、病室を後にする。

そのまま病院の建物から出て、玄関先で崩れ落ちてしまった。

「ちくしょう……ちくしょう！」

あまりの悔しさに、大粒の涙を流しながら、人目もはばからず、アスファルトの地面を殴りつけて八つ当たる。

「僕が戦わなかったから……力があつたのに、戦うことを恐がつたから！ その間

に何人も死んで、美波が傷付いた！」

力一杯殴りつけて、拳の皮膚が破れ、血が流れる。

「僕のせいじゃないか！ 僕が戦つてさえいれば、美波は傷付かずに済んだかも

知れなかつたじゃないか！ バカ野郎！ このバカ野郎!!」

自分の顔を思いつきり殴る。

口が切れて血の味がした。

「迷わない！　　もう恐がらない！」

もう、未確認生命体なんかの為に誰か

が傷付くのを見たくない！

誰かの涙を見たくない！！

僕の身体がどう

なろうと、もう知ったことか！！」

血まみれの手で、拳を握り込む。

「僕は——戦う！！」

涙と鼻水で濡れた顔を上げ、青空を睨んだ。

それは——僕が、戦いという名の地獄に立ち向かう決意をした、瞬間だった。

## 変身

P M 10:13

某公園内

薄らと街頭が闇を照らすそこには、一条と杉田が駆けつけていた。

「——これで第3号の被害者が8人目か……くそっ」

公園の真ん中で倒れ付している、成人女性だった死体の首筋には、コウモリに噛まれたような痕があった。

やるせない、というように悪態を吐く杉田。

杉田は、未確認生命体の事件を追う一条のパートナーとして捜査に当たっている。

30代も中頃の彼であるが、今なお現役で捜査に当たれるほどには身体を鍛えている。

そして、警視庁でも一目置かれるほど優秀な警察官である。

そんな杉田に、一条は気付いたことを告げた。

「杉田さん。第3号の被害者が襲われた場所に地図で印を付けたのですが、奴の拠点が分かりそうです」

「何、本当か」

「ええ」

一条は地図をライトで照らし、印を指差してゆく。

「襲われた場所、これらはある区域を中心として、円状に位置しています。その中心とは……」

一条は地図の上で指を滑らせる。

そしてある一点で指を止めた。

「——ここ。この街の教会です。恐らく第3号はここにいますか」と

「よし、ナイスだ一条！　ここは鑑識を呼んで任せろぞ。鑑識が来るまで待機だ」

「了解です」

鑑識官が現場に到着すると、一条と杉田は後を引き継いで第3号の捜索に向かう。

2人は覆面パトカーに乗り込むと、すぐさま発進する。

覆面パトカーの赤色ランプが夜の街に赤い線を引き、サイレンが暗闇に溶けていった。

——その2人の姿をじつと見つめる双眼が、1つ。

怪しげな人影が、2人の行方を追いかけてゆく。



PM 10:41

## 教会

「……配置に着いたぞ一条。いつでも行ける」

「……了解です。合図で突入しましょう」

「……分かった」

街頭すらない真つ暗闇の中。

その中で一条と杉田は散弾銃を構え、未確認生命体第3号のアジトと思われる教会に突入しようとしていた。

突入箇所は正面の扉。

普通は夜遅くには閉まっているはずだが、不自然に鍵が開いていた。

そのことから、第3号がいるのでは……という推測に拍車が掛かってゆく。

第3号に存在を悟られない為、2人は会話は必然的に声を抑えながらになっている。

2人は散弾銃に弾丸（ショットシェル）が込められていることを確認し、お互いに頷き合う。

「……行きますー！」

「……ああー！」

激しく軋むほどの音を立てて両の扉を開き、素早く散弾銃を構える。

お互いの死角をカバーし合えるように、左右を警戒した。

「……クリア」

「こつちもクリアだ」

勢い強く突入したが、中には誰もいない。

しかし誰もいないにも関わらず、教会内はロウソクで不気味に照らされていた。

そのことから、決して2人は油断することはなかった。

「気を付けろ一条。何かおかしいぞ」

「ええ。俺も、どこか不気味で——」

——ガチャ、と奥の部屋から、物音。

「誰だー」

緊張から出る、神速の反射神経で散弾銃を構える一条。

果たして気のせい、ということもなく、人が歩いてくるような足音が近づいて来た。

その足音の主が、姿を表す。

「……こちらの教会の神父の方、ですか？」

「……………」

奥の部屋から出て来たのは、漆黒という表現が合うような、黒い神父服を着込んだ男性だった。

顔色はすこぶる悪く、青白い。

ロウソクの灯火に照らし出されて、より一層不気味さが増していた。

一条と杉田は、どこか様子のおかしい彼に対し、警戒を解けないでいた。

——不意に、その神父が口を開く。

「リント・ン・ラギセ・ボンザバ」

「っ!？」

「おい一条、こいつまさか!」

猛烈に嫌な予感を感じた2人は散弾銃を神父に向け、動くなど勧告を促す。

しかし神父は一切動じることなく、妙にとがった犬歯を見せつけながら、三日月状に

口を裂いた。

そして——神父の身体は、人型の異形へと変化した。

頭部は、目が細くなり、口が大きく裂け歯の全てが鋭くどがり、耳が大きく広がった。

皮膚が赤茶けた色に変色し、腕にコウモリのような皮膜が生えてゆく。

全身をコウモリを思わせる姿に変えた、神父だった異形——未確認生命体第3号が、

一条と杉田の前に立ちはだかった。

第3号は、大きな耳に開けられたピアスを軽く触ると、鋭い牙だらけになった口を、再

び開く。



『ゴラゲダチ・ロジヨグデビ・ビギデジャス』

「くっ……来るぞー！」

「くそっ」

第3号は、2人に襲い掛かった。

△▼△△▼▼△▼△▼

「ぐああっ！」

「杉田さん！ うぐっ!?!」

『リント・ン・ツビ・ロボデギ・ドバ』

この場は、未確認生命体第3号の独壇場だった。

警視庁から借り受けた散弾銃は全く効果がなく、一条と杉田はただ蹂躪されているだけだった。

強さの差は、火を見るよりも明らか。

やられるのは時間の問題だ。

第3号が振るった腕に杉田が吹き飛ばされ、一条も軽くあしらわれた。

吹き飛ばされた杉田はロウソクを倒しながら無様に床に転がる。

倒れたロウソクの灯火がカーテンに燃え移り、あつという間に業火へと成長した。

倒れた際に頭でも打ったのか、杉田は気を失ってしまっている。

「す、杉田さん……大丈夫ですか!? ——くそつ、反応がない」

『ブサベ!』

「うわっ!」

第3号の攻撃を間一髪の所で避けた一条だが、大きく体勢を崩してしまった。

苦し紛れに散弾銃を撃つが、全く堪えた様子がない。

万事休すか、と一条が諦めかけた——その時。

「うおおおおお!!」

『バジ!?!』

「なっ!?!」

教会の扉を突き破って、新たな人物がこの場に現れた。

その人物とは——戦う覚悟を決めた、吉井 明久だった。

「吉井君!?! なぜこんな所に!」

「一条さんの車を追って来ました。僕も戦う為に!」

一条の覆面。パトカーを見つめていた怪しい人物とは、吉井 明久のことである。

彼は未確認生命体を撃破する為に、パトカーを追っていたのだ。

だが、戦う度にキルマシーンに近付くと聞いている一条は、当然明久を止めた。

「何を言ってるんだ吉井君!?! 君は戦えば戦うほど、人間とはかけ離れてゆくんだぞ!」

「構いません！ それでも僕は戦います!!」

一条は止めたが、しかし。

覚悟を決めた明久が、その程度の説得で止まるはずもなかった。

明久が突入したことに對する驚きに、一条への攻撃を中断した第3号だったが、ただのリンクト——人間の子供だと判断すると、再び一条に攻撃を仕掛けようとした。

もちろん、明久はそんなことは許さない。

第3号にタツクルをかまして、強制的に距離を取らせた。

自分を犠牲にするかのような発言をする明久に、一条は怒りをあらわにして怒鳴る。

「なぜそんなことを！」

「こんな奴らの為に!!」

「っ!?!」

だが明久は臆さない。

怒鳴る一条に負けじと、彼を超える声量で怒鳴り返す。

そして、己の中に燃え盛る熱い思いをぶちまけるように、声が枯れるほど、叫ぶ。

「これ以上、誰かが傷付くのを見たくない! 誰かの涙を見たくない!!」

第3号に振り払われ、殴りつけられるが、明久は両手で受け流す。

「黙って見ているのは、もう嫌なんです!!」

「吉井君……」

一条は、明久の心の底からの叫びに、言葉を失った。

明久の必死さの中に、強い怒りと、悲しみと——覚悟を見つけてしまったから。

その間に第3号が動いた。

明久は第3号が振り回した腕を、腹と手で受け止めるが、そのまま掴まれ一条のそばへと投げ飛ばされてしまう。

だが転がりながらも、すぐさま第3号の方へと向き直り、膝を立てた。

「だから見ててくださいい!!」

戦うという決意を、胸に宿し。

「僕の!!」

枯れつつある声で、闘志の咆哮を上げる!

「変身!!」

そして立ち上がり——両腕を広げた。

すると、決意がベルトという形になって現れた。

ベルトの宝玉の色は——燃え盛る炎のような、赤。

ベルトに手をかざし。

右手を左前方に突き出し、左手は宝玉に添えた。

右手を右前方にスライドさせ、左手は左腰にもってゆき。

左腰の辺りにあるベルトのスイッチを、右手で勢いよく——押し込む！

「うりゃあ！ はっ！」

第3号を、助走をつけて右手で殴る。

もう一度殴る。

『ギギー！』

「ふっ、はっ！ だあっ！」

反撃に顔を狙われたが、腕で受け止めて顔面を2発殴ってやる。

「おりゃあ！」

怯んだ所に、わき腹に蹴りを叩き込む。

更に大きな隙が出来たので、もう2発拳を叩きつける。

「うおおおおお!!」

拳を突き出したまま、投げ飛ばさんと全身に力を込めた。

すると、ベルトの宝玉が回転を始め、更に赤く光り輝き始めた。

そして——明久の身体は装甲に包まれ変化してゆき——

完全に戦闘用の身体に作り変えられると、一気に力が上がり、第3号を持ち上げ投げ飛ばした。

「おりやあああああ!!」

その姿は——赤。

最初に変身した時は白かった装甲が、今は烈火のような赤に染まっていた。短かった頭部の2本角も、雄々しく伸びている。

そして何より——その姿は、力強かった。

吹き飛ばされた第3号が起き上がり、変身した明久を見て眩いた。

『バゼ・ゴラゲ・グビ・クウガ?』

「クウガ……? そうか、僕の名前はクウガか!」

戦いの姿の自らの名前を知り、納得した明久——いや、クウガ。

クウガは第3号に向けて構えを取り、戦闘を続行した。

「はあああああ!!」

拳を握りしめ——全力で、腕を引き絞った。

## 決着

明久——いや、クウガは拳を握り、未確認生命体第3号の顔面に強烈な殴打を見舞った。

「はあああああ!!」

『ギブアゲー!』

綺麗にキマリ、数メートルも吹き飛ぶ第3号。

教会の内部がロウソクの火で燃え広がってゆく中で、筋肉質な肉体を思わせる赤い装甲を纏ったクウガが、油断なく構える。

第3号は、並列に並べられた長椅子を破壊しながら倒れ付し、痛そうにうめいていた。第3号が倒れている隙に、明久はチラリと赤い複眼を一条たちに向ける。

もはや火の海になろうとしている教会の中で座り込む一条と、気絶している杉田。

彼らを救出することが先だと判断すると、一条を立てさせて杉田を担ぎ、火に包まれた教会から脱出した。

「大丈夫ですか、一条さん」

「あ、ああ。杉田さん——君が担いでいる男性は無事か？」

「……大丈夫です。息はあります」

「そうか……良かった」

ひとまず生きていてだけでも良しと、胸を撫で下ろす一条。

だが第3号は、そう長くは安堵する時間を与えてくれなかった。

立ち上る火の中から、皮膜を広げた第3号が飛び出して来た。

第3号は真つ直ぐクウガに向かって飛ぶと、がっしりと組み付いた。

『ジョブロ・ジャデデ・ブセダバ！』

「うわっ!？」

『ザザザ！ ゴサ・ン・ダジザ！』

そして脚で器用にクウガを掴まえ、そのままクウガごと炎で照らされた夜空へと飛び立ってしまった。

「この、放せー!」

このまま高度が上がってゆけば、落とされた時にただでは済まないと察した明久。

そうなつては堪らないと無茶苦茶に拳を振り回すと、ラツキーパンチが顔面に直撃した。

『ギデ——ギラダダ!?!』



「うわあああああ!?!」

パンチの直撃を顔面で受けた第3号は空中でバランスを崩し、失速してクウガと共に地上へと真つ逆さまに転落する。

あわや転落死か……と落下するクウガを慌てて目で追った一条であったが、偶然落ちた場所に木があつた為、運良く生き延びた。

今度は怪我はないだろうかと心配し始めた一条であったが、彼の心配を一笑に付すかのように、クウガはムクリと起き上がった。

……それと、第3号も同様に起き上がる。

軽く20メートルはある位置から落ちたはずだが、2人……いや、2体はほぼ無傷であった。

そのまま何事もなかったかのように殴り合いを再開するクウガと第3号。

そこで、気絶していた杉田が目覚めた。

杉田は戦い合うクウガと第3号を視認すると——特にクウガを見て、目を見開いて驚きをあらわにした。

「うおっ!?! 新たな未確認生命体!?! 第4号かよ!」

「杉田さん、目が覚めたんですね! 無事ですか!?!」

「あ……ああ。身体中が痛い、何とか動ける。それより、どういう状況だこりゃ」

「これは、ですな……」

まさか、高校生が未確認生命体に変身して自分たちの代わりに戦っている……とは言えず、クウガの正体を隠して状況を説明した。

「第4号が俺たちを助けた……ねえ。正直信じられんが」

「しかし事実です。その証拠に4号は気絶している杉田さんを担ぎ上げて、燃えている教会からこの場所まで運んでくれました」

「おいおい、俺は未確認生命体に担がれたのか。……しかし、一条がそう言うんなら本当なんだろうな。分かった、とりあえず信じる」

そう一条たちが会話している間にも、クウガと第3号の戦闘は熾烈を極めていった。

何十と殴り殴られ、蹴り蹴られを繰り返し、互いにある程度体力を消耗した頃、事態は急に動いた。

『ゴセ・ロ・ジャス!』

「ぐあつ! 第1号!?!」

『グムン! ギジョジョギ・ジャスバ!?!』

『ギギゾ!』

行方をくらましていた、クモの化け物である第1号が、ここに来て姿を現したのだ。

第1号（クモ）と第3号（コウモリ）は領き合い共闘する姿勢を見せると、2体揃っ

てクウガに襲い掛かった。

「くそ、このままじゃ……!」

2体同じの猛攻に、防御に徹しざるを得ないクウガ。

数の差による苦戦を強いられている。

このままでは殺られると焦りだしたクウガを助けたのは——一条の拳銃による射撃だった。

見事第1号の頭部へと命中した弾丸により、第1号と第3号の意識がわずかに一条へと逸れた。

一条の作り出したわずかな隙を、クウガは逃さない。

「今だあ!!」

『ギラダダ!?!』

『グムン!』

全速力と全体重を乗せて、第1号に肩タツクルを食らわせる。

まともに食らった為受け身を取ることすら敵わず、第1号はトラックに轢かれたかのように跳ね飛んでゆく。

吹き飛ぶ仲間を見て、第3号は慌ててクウガに攻撃しようとした。

『ジャダダバ!』

「だああ!!」

『グゲゲ!?!』

しかし、クウガは渾身の回し蹴りで第1号も蹴り飛ばした。

「良し……まずは第1号から!」

クウガは狙いを第1号に絞ると……右足を引き、右手を突き出して左手を腹部のベルトにかざした。

すると——クウガは自身の右足が、燃えるかのように熱くなるのを感じた。

ベルトの宝玉が、赤く……強く輝きを放ち始める。

第1号がフラつき頭を振りながら起き上がる頃には、宝玉の輝きは最高潮に達していた。

「——行くぞ!」

意を決し、クウガは第1号に向かって走り出した。

右足を踏みしめる度に、右の足底に火がついたかのような錯覚を感じる。

第1号がクウガの接近に気づいた時には、もう遅い。

クウガの持てる全てが注ぎ込まれたキックが、第1号の腹部に鋭く突き込まれた。

「おりゃあああああ!!」

『グガ——!?!』

先ほどのタツクルよりも激しく吹き飛び、もがき苦しみ始めた第1号。

その腹部には——明久や一条が見たことのない、不思議な文字が浮かび上がっていた。

ひとしきり苦しむと謎の文字から亀裂のようなものが伸び、第1号と第3号に共通して下腹部にある、バツクルのようなものに到達した。

するとそのバツクルが音を立てて割れ——第1号の全身が、爆発した。

「っ—」

『グ……グムン……!?!』

飛び散る第1号の肉片から顔を守るクウガ。

第3号は仲間の死に、動揺を隠せないでいた。

「ついに……殺した」

クウガは勝利を確めるように手のひらをきつく握り、煙を上げる己の足にチラリと目を向けた。

そして——ゆっくりと、第3号の方に振り向いた。

「次は——お前だ」

『ジギ?!』

クウガから発せられる得体の知れない恐怖を感じ取った第3号が、思わず後退りし

た。

第3号の身体が恐怖からか小刻みに揺れている。

しかしよく見ると、クウガの身体も小刻みに揺れていた。

クウガはまるで石のように固く握られた拳を震わせ、小さく……しかし妙に響く声で  
呟く。

「美波の痛みを——思い知れ……っ！」

クウガは——怒りに震えていた。

未確認生命体の1体を殺したことで精神的に余裕が生まれ、第3号が島田 美波に  
したことを思い出してしまったのだ。

さらに、未確認生命体とは言え生物を殺したことにより、精神が昂っていた。

そのため、複眼に似た瞳には、先ほどまでは見られなかった復讐心と殺意が見て取れ  
た。

「——死ね」

『ギ——!?!』

クウガは先ほどまでとは比較にならないほどの速度で第3号に詰め寄り、喉仏をひっ  
掴んだ。

万力のような力で首を絞め……そのまま、第3号の頬に拳をぶち込んだ。

鋭く尖った歯が数本宙を舞い、噴水のような勢いで真つ赤な鮮血が飛び散る。

普通の人間なら顔を青ざめさせる光景だが、クウガは殴ることを止めない。

むしろ、殴る度により激しさが増していった。

1 発――

2 発――

3 発――

4 発――

――5 発！

こんなものでは済まされず、散々殴られた第3号の大きく裂けた口にはもう、折れる歯が残っていないかった。

もはや虫の息と化した第3号が、自慢の歯が全て折られた口で弱々しく喋る。

『口……ログ・ジャレデブセ……』

「死ね」

恐らく命乞いを口にしたであろう第3号だったが、クウガは容赦なく同じ箇所を殴った。

鮮血と悲鳴が飛び出る。

「死ね……」

クウガは、狂ったように同じ箇所を殴る。

「死ね、死ね、死ね、死ね、死ねえ！」

いつしか真っ赤に染まったその手が、怨嗟の呪文が吐かれる中で、今までで最も強く握られた。

そして——何かが折れる鈍い音が、教会の燃える音に混じって、静かに鳴り響いた。

——ドサリ、とコウモリの特徴を持った肉体が、崩れ落ちる。

『ヒュ……ヒュ……』

ビクリ、ビクリと痙攣を起こしながらも、かろうじて生きている第3号。

しかし、放って置けばすぐに力尽きるだろう。

クウガは、そんな状態の第3号を見下ろすと——馬乗りになり、更に殴り始めた。

尋常ではない様子のクウガに、一条と杉田は言い知れぬ恐怖を抱いていた。

「……酷すぎる。やはり未確認生命体は未確認生命体だったか」

「(イ)……(レ)れは……」

クウガの正体——吉井 明久を知っている一条は、ただひたすら困惑していた。

あの正義感が強く優しい少年の面影が、一切感じれなかった。

(吉井君、一体どうしてしまったんだ!?)

そんな一条の困惑になど気づかず、クウガ——明久は、ひたすら第3号だった肉の塊



を殴り続けていた。

「ああああああ!!」

彼の赤い身体とベルトには、時折不気味な電流が走り。

……その複眼に似た瞳は――

――黒に、染まっていた。

## 正気

——クウガは……吉井　　明久は、正気を失いかけていた。

今、彼は視界に入るものが全てが憎く感じている。

この瞬間も殴り続けている、コウモリ男だった肉塊はもちろんのこと。

土が……路肩の小石が……小さく顔を咲かせる花すらも、憎悪の対象だった。

「あああああ!!」

どうやら黒く染まった複眼には、この世界が酷く映るようだ。

より一層激しさを増す暴力に、杉田はおろか一条までも身の危険を感じていた。

(まさか吉井君……キルマシーンに、未確認生命体と同じ存在になってしまったのか!?)

一条のその心配は、当たらずとも遠からず……と言った所だろうか。

確かに、今のクウガは誰にでも襲い掛かりそうではある。

だが、良く目を凝らして彼の複眼を見ると……ほんの少し——ほんの一部分だけ、確かに赤色が伺えた。

そして——一瞬だけだが、一条はクウガの拳の勢いが鈍ったのを、確かに捉えた。

「――!」

それは、彼の中に残った僅かな理性を表しているようだった。

(吉井君はまだ完全に理性を失っていない! 声を掛ければ、あるいは正気に戻るかも知れない!)

即座にそう判断した一条は、一步前に出てクウガに呼び掛ける。

「吉井君! もう止めるんだ!」

「一条!?!」

一条の声に反応して、クウガの拳がピタリと止まった。

突然クウガ——未確認生命体第4号に話し掛けた同僚に、杉田は肝を冷やす。

だが一条はそんなことなどお構いなしに、彼の中に残っているだろう理性に呼び掛け続けた。

「このまま怒りに身を任せてしまつたら、君は未確認生命体と何も変わらなくなつてしまふ! それを一番恐れていたのは、君自身だろう!?!」

一条の必死の呼び掛けが聴こえたのか、クウガはゆっくりと拳を下ろした。

一条は更に続ける。

「君はこんな暴力の為にその力を手にしたのか?! 違うだろう! もう誰かが傷つくのを見たくないから、戦う決意をしたんだろう!?!」

クウガは、先ほどまでの荒々しきの鳴りを潜め、じつと自らの鮮血に染まった拳を見つめ始めた。

果たして、一条の呼び掛けは彼の心に届いたのだろうか。

——答えは、黒く染まったままの複眼が、如実に語っていた。

クウガは、血飛沫を浴びた顔で一条の方を振り返る。

「……………」

そのまま一条を見つめると——

「イチ、ジヨ……………う……………さん……………?」

彼は確かに今、片言ながらも一条の名を呼んだ。

そのことから、一条はクウガ——明久にまだ理性が残っていることを確信した。

「吉井君! 正気に戻るんだ!」

「シヨ……………き……………?」

「そうだ! このまま理性を失えば、君自身が君の大切な人を傷つけるかも知れないんだぞ!」

「タ……………イ、せ……………ツな、ひト……………」

クウガは再度、両の手を眺めた。

その様子から、一条はもう一押しでいけそうだと考える。

「思い出すんだ！ クラスメイトの島田君を！ 彼女が今の君を見て、喜ぶと思うか!?」  
「み——ナ、ミン?」

その名は良く覚えていたのだろう。

はつとした様子を見せると、クウガは慌てて自らの血染めの手を見張った。

そして、顔を手で覆い——

「ボク、ハ——僕は、一体何を……?」

「戻ったのか、吉井君!」

しつかりとした日本語で、呆然と呟いた。

その複眼には、理性の赤が戻ってきているのが伺えた。

クウガは、第3号の死体と血みどろの自らの身体を交互に見やると、自分の仕出かしたことに気が付いてしまった。

「僕は……暴走してしまったのか……!」

あれだけ大口を叩いておきながら、みすみす力を暴走させてしまったことに、恥を感じると同時に怒りを覚えた。

ただ、後悔と恐怖だけはしないように努めた。

もう迷わず、怖がらないと決めたから。

クウガは一度深呼吸をしてから、一条に向き直り頭を下げる。

「すみません、一条さん。声を掛けてくれなければ、僕は取り返しのつかないことをする所でした」

「どうやら正気に戻れたようだな。ひとまずは安心したよ……。しかし、今回暴走したことを考えると、今後君を戦わせる訳にはいかないぞ」

「う……。ですよね……」

一条はクウガ……。明久が理性を取り戻せたことに安心の溜め息を吐き、緊張から溢れた額の汗を拭った。

しかし、一条の言うように、今後クウガを戦わせる訳にはいかないだろう。

当然のことだが、一度暴走したことにより、クウガへの信頼というものは薄くなってしまう。

一度暴走した者に、もう一度戦いを任せるとするのは、厳しいと言わざるを得ない。

一条の心情としては、心配ゆえにもう明久に戦って欲しくないというのが一番の理由だが。

——所で、一条は忘れている。

同僚の杉田には、クウガの正体を隠していたことを。

「おい、一条。お前第4号と当たり前に話しているが、どういふことか説明しろ」

「あ……」

あれだけ正体を知っていることを伺わせる発言をしていたのだ。バレルのも当然である。

もはや言い逃れは出来ないと悟り、一条はクウガの正体と経緯を包み隠さず話し始めた。

△▼△▼△▼△▼

「はあ……話しは分かった。君が人間で、文月学園の生徒であることも」

杉田は難しい顔をしながら、眉間を揉む。

今しがた一条が経緯をまとめてから話し、明久が時折補足して説明を終えた。

すでに明久は変身を解いており、人の姿に戻っている。

変身を解いても血が着いたままだったので一悶着あったが、今は水道で洗い流して取り敢えずは綺麗になっている。

そんなびしょ濡れの明久に対し、杉田は目を見てはつきりと告げる。

「しかし、吉井君だったか。すまないが、俺は君のことを上に報告しなきゃならん」

「え……つまり、僕の正体が公開されるってことですか？」

「君が言っているのは一般市民に公開されるということだろうが、それはまだ分からん。俺が言っているのは、警視庁本部の偉いさんに話すってことだ」

「? どう違うんですか？」

明久は疑問符を頭に浮かべる。

「取り敢えずは警察の上層部だけが知るつてことだ。そこから警察全体に話しが通るのか、一般市民に公表されるのか。そこは上が決めることだ。まあ、吉井君は人間である証拠があるし、個人情報保護の観点から名前や顔と言った本人が特定されるような情報は公表されることはないと思うが」

「そうですね……」

明久は安心と不安が混ざったような、複雑な顔をしていた。

知り合いにクウガ——未確認生命体第4号であることを知られることは防げそうだが、最低でも警察の上層部の人間が自分の正体を知ることになる。

警察なので悪用することはないだろうけど……と、明久は内心溜め息を吐く。

それでも自分の重要なことを知られるというのは、例え相手が警察でも不安になるというものだ。

「あの……僕らだけの秘密にしてもらうことは……？」

「残念だが、それは無理だ。知った以上、俺には報告の義務がある。……そういうことから、このことを隠そうとした一条の姿勢は頂けないな」

「やっぱり駄目ですか……」

明久は少しだけ期待して聞いたが、社会の義務というものは残念だが甘くない。



ガツクリとうなだれる明久をよそに、杉田は一条をジロリと睨んだ。

睨まれた一条はというと、悪いことをしていたと反省し、素直に頭を下げた。

「……すみませんでした」

「ああ。処分は覚悟しておけよ」

真面目な一条としては今回のように筋の通らないことをするのは稀なのだが、情に厚い性格ゆえ、自分を曲げてでも明久に普通の高校生でいて欲しかったのだ。

その結果、明久のことを隠そうとしたのだが……やはり社会人として許されることではなかった。

「全く……帰ったらちゃんと報告書上げろよ?」

「はい。ご迷惑お掛けします」

「やっちゃまったことは仕方ねえさ。反省して処分を受けりやそれで良い。今度焼き肉おごってやるから、元気出せ」

「……ありがとうございます」

困ったように溜め息を吐く杉田。

しかしその顔は決して迷惑そうにはしておらず、口元には手の掛かる後輩を見守るような苦笑が浮かべられていた。

その様子を見ていた明久は、一条と杉田にはパートナーとして確かな絆があるのだな

と感じた。

一条との話しが終わり、杉田は明久に向き直ると一つ謝った。

「すまないな、吉井君。俺個人としては一条と同じく、学生として幸せに過ごして欲しいんだが……」

「いえ、仕方のないことなのは分かりましたから。辛くない……つて言えば、嘘になっちゃいますけど」

「そう言ってくれると有難い」

杉田はそう言うと、場を締めるように一つ手を叩いた。

パンツ、という乾いた音が辺りに響く。

「——さて、もう夜も遅いし、一条は吉井君を家まで送ってやってくれ」

「分かりました。杉田さんは？」

「俺は第3号の死体を回収せにやならんから、回収班が来るまでここで待機する。あと、教会の火事も消防隊を呼ばないとな」

「了解です。それじゃあ、帰ろうか吉井君」

「えつと……毎度毎度送って貰ってすみません」

そう言いながら、2人は一条の覆面パトカーに乗り込んだ。

帰り際、最後に杉田が明久に一言告げる。

「そのうち事情聴取をするから、覚えておいてくれ。学校帰りに警視庁に寄ってくれれば良いから」

「分かりました」

「おう。それじゃあな」

「はい」

そう言つて杉田は軽く手を振つて2人を見送つた。

これで、明久の長い1日がやっと終わった。

## 警察

P M 4 : 0 0

文月学園校門前

「さてと……学校も終わつたし、警視庁に行こうかな」

学園の校門前で、明久は独り呟く。

昨日、帰る前に杉田から警視庁に来るようにと言われていたので、今から向かう所である。

徒歩以外の交通手段を持たない明久にとって幸いなことに、警視庁は学園からそう遠くはない。

その為、多少時間は掛かるが歩いて警視庁に向かうことにした。

通学鞆を手に掛けて背負いながら、ブラブラと歩いてゆく。

その道中、明久は昨日の戦闘に関することを考えていた。

(昨日僕と未確認生命体が戦ったこと、もう噂になつて……)

今日1日学校にいて頻繁に彼の耳に聞こえて来たのは、炎上した教会での未確認生命体同士の戦闘だった。

高く炎が立ち上っていたので、近隣住民には嫌でも目についただろう。

誰かがクウガと未確認が戦っている所を見ていてもおかしくはないはずである。

ただ、明久にとって良かったのは、クウガの正体が噂に上がっていないことだろう。

偶然見られなかったただけなのかは明久には分からないが、とりあえずは一安心と言った所だろうか。

(でも、これからは変身するにも元の姿に戻るにも、人の目を気にしないといけないな……。次に変身する機会があるかは分からないけど)

そう心の中で呟くと、それきり明久は考えることを止めて黙々と歩いた。

△▼△▼△▼△▼

PM 4 : 34

警視庁本部

警視庁の入り口で、明久は軽く足首を回しながら溜め息を吐いていた。

「やつと着いた。地味に遠かったなあ……」

普段は30分以上も歩くことはないので少々くたびれながら、それなりに背の高い警視庁の建物を見上げる。

武骨で飾り気のない窓ガラス張りの建築物と、所々に配置されているパトカーが威圧的だ。

(うーん。いぎここに来ると不安になるね……。未確認生命体第4号の正体が僕だつて知った人は、一体どんな反応をするんだろう……)

そう。

第4号の正体は杉田に知られ、その杉田は警視庁上層部に第4号の正体をすでに報告しているのだ。

したがって、警視庁上層部の人間は明久が何なのかを知っている。

それは明久にとつて、知らない誰かに心臓を掴まれていることと同じようなものであった。

「……さてと。このまま立ちぼうけていても仕方ないし、行くか」

不安はあれど、しかし。

この場から動かなければ一向に事態は進まないと理解はしているので、言うことを聞きたがらない両足を無理やり動かして警視庁の玄関をくぐった。

そして入った中で受けた歓迎の挨拶は、複数の視線、視線、視線。

高校生と言えども、しょせんは子供。

一体系子供が何の用だろうか、警視庁で働く警官達は疑問と興味を視線に乗せて向けていた。

「う……」

その向けられた視線に思わず明久は、一步後ずさつてしまふ。しかし、それは仕方のないことである。

複数の警察官に一齐に視線を向けられて怯まぬ子供が、一体どれほど居ようか。だがどれだけ怯もうと、ここまで来てしまったのだから引き返すことは出来ない。そう自分に言い聞かせ、明久は受付に行き用件を伝えに行く。

「あの、すみません。杉田さんという方は居ますか？」

「杉田……と言いますと、どちらの杉田でしょうか？」

そこで明久は気づく。

杉田のフルネームや所属を知らないことに。

仕方がないので、一条ならフルネームを知っている為、彼を呼ぶことにした。

「えっと……すみません、杉田さんのフルネームを知らないのです……。では、一条

警部補は居ますか？」

「一条 薫警部補ですね？ 少々お待ち下さい」

受付の警官が内線を使って一条を呼び出す。

少しして、一条が杉田を連れて受付までやって来た。

「こんにちは吉井君。体調は変わりないか？」

「はい。一条さん達は怪我の方は……」

「心配ないよ。私も杉田さんも軽い怪我だ」

「そうですか……安心しました」

一条と杉田は、昨日の第3号との戦闘で怪我をしていた。

本人達は軽い怪我だと言っているが、実はあばら骨が折れていたり結構な怪我である。

それを隠すのは、つまりは大人の意地と言うやつだ。

得てして大人は、子供に情けない姿を見せたくないものなのである。

そんな意地をチラリとも見せることなく、杉田は明久に声を掛ける。

「さて、吉井君。早速だが付いてきてくれ。上の人間が君を連れて来るように言っているんだ」

「分かりました。ちなみにどんなことをするか聞いても良いですか?」

「それは俺にも分からない。上には連れて来いと言われただけ言われてるからな。まあ問答無用で攻撃とかはないと思うから、大丈夫だ」

明久は杉田の物騒な物言いに、思わずギョツとする。

「問答無用はないってことは……状況によつては攻撃される可能性もあるってことじゃ……?」

「その時は俺と一条が守るさ」



「は、はあ……。ありがとうございます」

杉田は明久の疑問を否定はしなかった。

そのことから明久は、猛烈に嫌な予感を感じ始める。

(大丈夫かなあ……)

決して小さくない不安を抱えながら、明久は杉田と一条の後を付いて行った。

△▼△▼△▼△▼

「さあ、着いたぞ」

警視庁内を歩くこと数分。

杉田一行は、今回の話し合いの場として使う会議室の前で立ち止まった。

「……………」

明久はと言えば、流石に緊張しているのか生唾を飲むばかりで口を開かない。

それもそうだろう。

正に今回の話し合いは、彼の今後を決める重要な出来事なのだから。

そんな明久を尻目に、杉田はドアをノックする。

すぐの中から入室の許可が聞こえ、ドアノブに手を掛けた。

「失礼します」

「失礼します」

「し、失礼します……」

明久達は、警視庁の建物と同様に飾り気のない武骨なドアをくぐる。すると中には壮年の男性が1人と、20代ほどの若い男性が5人いた。

壮年の男性は座椅子に腰掛けており、若い男性達はその彼を守るかのように背後に仁王立ちしている。

いや、彼ら若い男性達は実際に壮年の男性を守る為にこの場にいるのだ。

吉井 明久と言う名の未確認生命体第4号が、殺戮を始めた時の為にやけにピリピリとした緊張感の中、おもむろに壮年の男性が口を開く。

「初めまして、だね。私はこの警視庁の警視総監だ。よろしく、吉井 明久君」

「は、はいっ！ よろしくお願いします！」

まるで面接を受ける受験生かのように、背筋をピンと伸ばす明久。

そんな様子の彼を見て、総監は目を細めた。

「良い返事だね。——さて、早速だが質問をさせてもらおうよ」

「は、はい」

急に見定めるような鋭い目が変わった総監に、明久は思わず気圧される。

総監は鋭い視線のまま、核心を突く質問を投げ掛けた。

「君は——未確認生命体第4号と、そう呼ばれているかい？」

「——っ。……はい」

肯定。

それをした瞬間、警護をしている男性達が、総監を鍛え上げられたその肉体で隠すように立ち塞がった。

明らかに化け物扱いされていることに、明久は胸がチクチクと痛むのを自覚する。

化け物扱いされることは予想し理解もしていたのだが、いざそう扱われると心に刺さるものがあつた。

そんな明久に助け船を出したのは、意外にも総監である。

「君達、まあ落ち着きなさい。吉井君が我々に危害を加えるつもりがないのは明らかじゃないか。ならば、そう威圧的になる必要はあるまい」

「はっ。失礼しました」

そう言つて警護の男性達は1歩下がった。

がしかし、挙動の一つも見逃すまいと言わんばかりに、ジツと明久を見続けるのは止めなかつた。

その男性達の様子を横目に、総監は一つ明久に謝罪をする。

「すまないね。彼らも仕事なんだ、分かつて欲しい」

「ええ……その、仕方ないですよ。僕は第4号なんですから……」

「そう言ってもらえると助かるよ。……さてと、ここからが本題なんだがね」  
総監は一拍置いてから、再び口を開く。

「——未確認生命体第1号、第3号への暴行、殺害の罪及び、未確認生命体第4号である疑いの為、身柄を拘束させてもらう」

「なっ——!?!」

優しげな微笑みを顔に貼り付けながら、総監はそう明久に告げた。

明久は逮捕と来たかとの心の中で悪態を吐きつつ、咄嗟に身構える。

一条と杉田も驚きを隠せていない様子な為、何も聞かされていなかったのだろう。

2人は総監に抗議の意思を訴えた。

総監はと言うと——ニヤリと口を歪めてから、ゆっくりと唇を動かした。

「——なんて、冗談だよ。逮捕なんてしないから安心しなさい」

「え……冗談だったんですか!?!」

「ユーモアは必要だろうか? なに、緊張をほぐしたいだけさ」

「ええ……」

むしろ緊張しました、とは流石に言わない明久。

警視庁の一番偉い人間に向かって軽々しくツッコミなど入れれるはずもない。

しかし表情に気持ちが悪く出ており、苦虫を噛み潰したかのように眉根を寄せてい

る。

そんな明久を、総監は笑い飛ばした。

「ハツハツハ。すまない、機嫌を悪くしたかな？ まあ、オジサンの戯れ言だと許してくれ」

「いえ……大丈夫です。——所で、本当の本题ってなんですか？」

「本当の本题かい？ そうだね、その前にいくつか質問させてもらうよ」

総監は机に肘を寄せ、口元で指を組む。

そしてそのまま明久に質問を投げ掛けた。

「君は未確認生命体第4号の力を、どう使うかな？」

「どう使う……ですか」

明久は彼の質問を受け、ほんの少しの間だけ目を閉じる。

その間、まぶたの裏に浮かび上がったのは——父親を殺されて泣き叫んでいた少女と、顔に大怪我を負って瞳から光を失った島田 美波だった。

自然、両手に力が籠る。

もう誰かが悲しむ所を見たくないと思いつつ、明久はゆっくりと瞳を開けた。

「——僕は……もう、未確認生命体なんかの為に誰かが悲しむのを見たくありません。」

あいつらから皆を守る為に、僕は戦うことを決めたんです。だから……第4号の力は、未確認生命体と戦う為に使います」

「戦うたびに、キラーマシーンに近づく可能性があるとしてもかい？　話しは聞いていますよ」

「……それでも、です」

「そうか。なるほど、決意は固いと見た」

総監は口元から手を離し、机に腕を乗せた。

「では、もう一つ質問だ。——もし我々警察が君に未確認生命体と戦って欲しいと言ったら、君は戦ってくれるかな？」

総監がそう言うと、この会議室にいる全員が息を呑んだ。

まさか、第4号になったとは言え、元は一般市民で学生だった明久に戦わせようとするとは誰も思わなかったからだ。

そして彼の言葉にいち早く反応したのは、一条。

「待って下さい長官！　吉井君はまだ学生なんですよ!!　それに一度力を暴走させていますし、私は彼に戦ってもらうのは反対です！」

「そうは言うがね一条君。事実として銃弾が効かないそうじゃないか。我々が未確認生命体に有効な武器を持たない現状で、彼を頼る以外にどんな選択肢があると言うのだね

「？」

「ぐつ、それは……しかし！」

苦々しい顔をする一条。

明久に戦つて欲しくないという気持ちの下、なお反論を続けようと声をあげる。  
しかしそれは、他ならぬ明久によって遮られた。

「戦います、僕」

「吉井君?!」

「僕は、力を手に入れた以上……皆を守らないといけないと思ふんです」

「それは君の思い上がりだ！ 君が危険を冒す必要はどこにもないんだ！」

一条が明久の肩を強く掴み、揺さぶりながら説得する。

明久は揺さぶられながらうつむき、しかしそれでも戦うことを訂正しない。

「確かに僕が戦う必要はないのかも知れませんが。でも……それでも未確認生命体を殺せる力があるから、守れるだけの力があるから……だから戦おうって思つたんです。――

僕自身が、もう二度と後悔しないように」

「吉井君……」

彼の心中を察してしまった一条は、彼に掛ける言葉を見失つてしまった。

明久は、独白に近い状態で続きを話す。

「戦うことが怖くないと言えば、それは嘘になるかも知れません。この手で何かを傷付けること、この手で命を奪うことの気持ちの悪さを、味わってしまったから」

なおも、彼の独白は続く。

「……でも、それでも僕は戦います。僕が戦うことを怖がらなければ、迷わなければ、助けられる命があることも思い知りましたから」

そこまで言い切つて、ようやく明久は顔を上げた。

その顔つきは、睨み付けるほど真剣なものであった。

一条はその表情に一瞬呑まれ、思わず言葉を失った。

明久の思いを聞いた総監は、満足いく回答だとばかりに頷いている。

「素晴らしい。君のその正義感は尊敬に値するよ。うちの警官達にも見習わせたいくらいだ」

パチパチと拍手も交えながら、彼は明久を称賛する。

そして、一番の目的であろうことを伝える。

「では、明久君……ひいては、未確認生命体第4号は、第4号以外の未確認生命体の討伐を我々警察と共同で行う……ということが良いかな？」

「——はい。ぜひ戦わせて下さい」

「分かった。——これより我々警視庁は、未確認生命体第4号及び吉井

明久を同志



とし、全面協力を行うものとする。これは決定事項とする」

急に話が進み、誰も異を唱えることが出来ない内に方針が決まってしまふ。

トップが第4号と協力して戦うことを決めてしまった為、一職員でしかない一条はこれ以上何も言うことが出来なくなつてしまった。

つまりは、上には従うのみということだ。

一条は再び明久を戦わせてしまうことに不甲斐なさや悔しさを感じて、奥歯が裂けそうなほどに歯を食い縛る。

しかし目上の立場の人間が出した決定に、あからさまに不満を顔に出す訳にも行かず、本心と社会人としての立場のせめぎあいの末に仕方なく従うことにした。

それはどうやら、杉田にも同じことが言えるようだ。

彼も同様に歯を食い縛り、スーツのズボンを握り締めていた。

そんな様子の一条と杉田に、総監は命令を下す。

「一条君と杉田君には、吉井君の担当者になつてもらうよ。多少はお互いを知っている君達が適任だろう。これからは吉井君の心と身体を鍛えてあげて欲しい。良いね？」

「は………」

「分かり、ました………」

当然、断れるはずもない。

絞り出すように返事を返した2人に対し、総監は1つ頷く。

そして明久に顔を向けると、握手を求めた。

「これから大変になるだろうけど、よろしく頼むよ」

「はい、こちらこそよろしくお願いします！」

「良い返事だね」

握手を求められた明久は、総監の分厚い手を力強く握り返した。

そして手を離してから、総監はこの場にいる全員へと話し掛ける。

「さて、話し合いはこれで終わりだ。各自解散して本来の持ち場に戻るように。吉井君も今日は帰って大丈夫だよ」

「はい。じゃあ、僕はこれで失礼しますね。一条さんも杉田さんも、お疲れ様でした。これからよろしくお願いしますね」

明久は総監と一条と杉田に一礼して会議室を後にする。

一条と杉田は、当たり障りのない言葉で明久に返事をし、総監に一礼をしてから持ち場へと戻った。

後に残ったのは警護に当たっていた男性警察官5人だ。

「君達ももう持ち場に戻ってくれ。忙しいのにすまなかつたね、ご苦労様」

その警察官達も帰り、会議室には総監唯一人だけが残った。

会議室の中央でポツンと座る彼は——1つ、呟く。

「——よろしく、未確認生命体第4号君。君のことは最大限に利用させてもらおうよ」

——その顔からは先ほどまでの微笑みが消えており、鉄で出来た仮面でも被っているかのように……無表情であった。

## 訓練

P M 6 : 3 9

警視庁武道館内

「正拳突きは腰を入れて打つ！ 体幹を意識するんだ」

「は、はい！ せあつ！」

「違う、もつとこう——」

あれから数日、明久は放課後の時間を使って一条から格闘技の基本を教わっていた。

一条にも仕事の都合があるので毎日という訳には行かないが、なるだけ時間を作って教えるようにしていた。

「……………」

……教えている間で時折見せる、痛ましげな表情から、彼の心境がどんなものかは推し量れるだろう。

「ふう……………今日はこの辺りにしておこう。少しは様になって来たな」

「はあ……………はあ……………ありがとうございます」

「この調子で行けば、すぐにでも上達するはずだ。君は中々運動神経が良いからね」

「がんばります」

たった数日間とはいえ、基本のみをひたすらに繰り返していれば多少は形になると言うもの。

加えて、明久自身がやる気に満ちていることで、更に覚えは早くなっていた。

今日はもう終いということで、暴れる心臓を落ち着かせていると、一条が「そうだ」と明久に呼び掛けた。

「はい、どうしました？」

「君に紹介したい人がいるんだ。考古学者の女性で、沢渡さんと言う方だ」

「考古学者……そんな人が僕と何か関係があるんですか？」

明久は首をかしげ、不思議そうに訊ねる。

つい最近までは一介の高校生にしか過ぎなかった彼が、考古学者などという大層な肩書きを持つ人物と関わるとは考えられなかった為である。

頭に疑問符を浮かべる明久に分かるよう、一条は苦笑を交えながら補足を入れてゆく。

「4号に関係するかも知れないことを研究している人なんだ。彼女は私の知り合いなんだが、研究している文明の文字と4号の身体に刻まれている模様が似ていると思ってね」

そこで一旦言葉を区切る。

明久は、確かにベルトや生体装甲のあちらこちらに、文字らしき模様が刻まれていたなど思い出す。

「先方にすでに話はしてあつて、後は日程を決めるだけだ。……勝手に話を進めていて申し訳ないと思つているが、向こうがどうしても君に会いたがつてね。すまないが、良い日を見繕つて一度だけでも会つてはくれないか？」

困つたように頼み込む一条に、明久は特に悩むこともなく頷く。

己の秘密を知れるかもというチャンスなのだ。

明久に断るといふ選択肢は浮かばなかつた。

「良いですよ。そうですね……3日後から学園の強化合宿があるので、明日か明後日なら大丈夫です」

「明日か明後日か……少し電話して聞いてみよう」

そう言つて一条は席を外し、沢渡という女性に連絡を取り始めた。

数分ほど待つと、彼が電話を懐に仕舞いながら帰つて来た。

「明日の夕方に来て欲しいそうだ。夕方ならいつでも問題ないそうだから、細かい時間は気にしなくてよさそうだよ」

「夕方ですね。所で、場所はどこになるんですか？」

「城南大学だ。明日の夕方は丁度予定が空いているから、私が送ろう」

「いつも送って貰ってすみません」

「良いさ。君は交通手段を持っていないからね」

と、そう言った所で一条はふと疑問を抱く。

「そういえば、バイクの免許は持っているのか？　もう中型免許なら所得出来る年齢だろう」

「いえ、免許は持っていません。中型二輪はもう取れる歳ですけど……学園には徒歩で通うので、必要なくって」

「そうか……」

一条はあごに手をやると、幾秒か目を閉じた。

そしてすぐに手を離し、明久に提案を投げ掛ける。

「この先、未確認がいつ出没するとも限らない。そしていつでも私が君を送れる訳でもない。そんな時、君がすぐに現場へ駆け付けける為にバイクは持っていた方が良いだろう」

しかしその提案に、明久は難色を示した。

「うーん……。理由は納得出来るんですが、お金の問題が……」

「お金……当然その問題は出て来るか」

一条は早速ぶつかった壁に、眉間にシワを寄せる。

警察側の都合で免許を取ってくれと言っているのだから、やはり警察側が資金の工面はするべきかと、悩んだ。

しかし一般人の明久にそんな金を出せば、下手を打てば資金の横領になりかねない。金額も金額だ、中型二輪の免許を所得するまでに、おおよそ20万程度掛かる。

だが、悩んでばかりでは話が進まない。

まずは一度、上に掛け合ってみないことには始まらないだろうと考え、一条は上司に相談してみることにした。

「費用なら、警察側でどうにか出来るかも知れない」

「えっ、でも……流石にそれは申し訳ないですよ」

「こちらの都合で取ってくれと言っているんだ、費用はこちらが負担するのが筋だろう。……もつとも、上が許可を出せばの話だが」

「良いんでしょうか……こんなにしてもらって」

恐縮したように畏まる明久。

彼は独り暮らしの貧乏学生というやつなので（と言っても、その貧乏の理由はゲームの買いきすぎという自業自得なものだが）、うん十万もの金額を立て替えてもらえることに人一倍気が引けているのだ。



そんな明久を説得するように、一条は言葉を重ねる。

「普通なら絶対にこんなことはしないさ。ただ、私達の行動には人命が掛かっているからな。一人でも多く救うには、移動手段は必須だろう」

「それは……分かりますけど……」

「恐縮する気持ちは分かるよ。だが、もし上の許可が降りたら、その時は頼む」

そして、頭を下げた。

歳上にそこまでされては嫌とは言えず、明久は申し訳なさそうに頷く。

話がある程度ついた所で、本日は解散となった。

明久は自宅に帰り、一条は上司に免許の件を相談しに行った。

上からの許可は、意外なほど簡単に降りた。

そのことについて一条は、恐らく警視庁長官が許可を出すよう言ったのだろうと考えている。

（全面協力を行う、と言っていたからな）

実際の所は一条には知り得ないが、それでもなければこんな無茶苦茶な予算の捻出はしないだろう……と、彼は心の中で一旦の結論を出した。

（それにしても）

と、彼はずっと頭から離れない感情に、我慢の限界を迎え、ついに頭を抱えてしまった。

(俺は吉井君を戦わせまいとしていたのに……気付けば戦い方を教え、より効率よく戦う提案までしている始末だ。なぜ、こんなことに……情けない……っ!!)

その感情とは、羞恥と怒りと自責の念が混じり合った、複雑なものであった。

しかし、いくら現状が嫌であろうとも彼は一警察官に過ぎず、黙って従うしかないのである。

キリキリと痛み始めた己のみぞおちを押さえながら、一条は夜の闇が落ちた街道を自動車で走り、落ち込んだ気分そのまま帰宅するのであった。



PM 12:27

文月学園Fクラス

そして翌日。

明久は現在、友人達と昼食を食べている。

そのメンバーはいつものメンツだ。

高身長で逆立てた赤茶毛の髪が野性味を感じさせる男、坂本 雄二。

女と見紛うほど愛らしい容姿を持った、特徴的なジジイ言葉遣う男、木下 秀吉。

寡黙かつ大人しげな印象を感じさせつつも、その実相当なムッツリスケベである男、

土屋 康太ことムッツリーニ。

普段は他にも、未確認に襲われた島田 美波や、姫路 瑞希がいるのだが。

美波は入院中で、瑞希は未確認と遭遇した際の精神的ショックのあまり外に出ることが恐ろしくなり、現在は不登校となっているのだ。

美波は入院中なので仕方ないにしても、高熱が出て登校するほど真面目な瑞希が不登校ということは、よほど未確認が恐ろしかったに違いない。

さて、数名欠けてはいるものの、努めていつも通りに振る舞うメンバー達。

食事中の話題は、2日後に行われる強化合宿についてだ。

最初に話を切り出したのは、雄二。

「さて、強化合宿という名の勉強地獄まで、残すはあと2日となった訳だが……お前らは何を持って行く？」

ニヤリ、とイタズラを仕掛けた時のような笑みを浮かべ、他のメンバーに問う。

それに対し、秀吉、ムッツリーニ、明久は思い思いの答えを返す。

「トランプじゃな」

「……高性能カメラとボイスレコーダー」

「僕はダンベルと筋トレ用アंकレットかな」

「ムツツリーニはいつも通りとして、明久は何か違うねえか？」

筋トレする気マンマンである。

その横ではムツツリーニが首をブンブン振って否定している。

「いやあ、最近筋トレとかするようになってさ」

「へえ、珍しいな。アドバイスだが、筋トレは続けることが大切ぞ」

「うん。三日坊主で終わらせるつもりはないから」

そう、明久は一条との訓練を開始してからは、空いた時間を使って格闘技の型の自主訓練や筋力トレーニングをしているのである。

少しでも早く、強くなるために……という切実な思いから、自ずから始めたのだ。

明久は、その心内から知らずの内に、昼食のパンを強く握り締めていた。

普段と少し様子が違う明久に、雄二達は心配げな視線を向ける。

だが、以前は心の内を明かさなかったことを踏まえ、いつか話してくれるまで待とう

……と、彼らは黙って話題を変えることにした。

「そーいや合宿場までの送迎でよ、Aクラスが何で送られるか聞いたか？」

その分かりやすい話題転換だが、明久は特に違和感を覚えることもなく返事をする。

「いや、知らないけど。バスじゃないの?」

「バスなんだけどよ。スゲーんだわこれが」

「?」

疑問符を浮かべる明久に、雄二に取って代わって秀吉が答える。

「ただのバスではない、高級バスじゃよ。シートはふつかふかで、一人ひとりのスペースがこれでもかと言うほど広いのじゃ」

「秀吉は知ってたか。Aクラスにいる双子の姉から聞いたのか?」

「ご名答じゃ。姉上がこれでもかと言わんばかりに自慢してきたの……腹が立つのじゃ」

頬をリスのように膨らませて、怒ってますとアピールをする秀吉。

ちなみに彼にはAクラス所属の双子の姉がおり、その容姿は同じ服を着たらどちらか分からなくなるほど似ている。

そんな秀吉をきいて置いて、明久は素直に感嘆した。

「へえ、流石はAクラスだね。良いなあ……」

「気になるのはFクラスの送迎だのう。一体どんなオンボロが来るのじゃろうか?」

そう、ここ文月学園では学力が高い者順にA、B、C、Dに掛けてクラスを別けており、成績上位のクラスほど良い設備が与えられる。

逆に、成績が底辺のFクラスには、勉強機の代わりに壊れたちやぶ台を用意されるほど設備の差があるのだ。

つまり、Fクラスには相当なオンボロ車が来ると予想されている。

「うーん、せめてマトモに動く車が良いよね」

「……全くだ」

明久の困ったような言葉に、ムツツリーニが同意して頷いている。

やはり彼もオンボロは勘弁、という気持ちなのだろう。

そのまま談笑しながら食事を済ませ、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った頃。

チャイムとほぼ同時にFクラス担任の西村教諭が入室した。

彼は授業の開始を告げると、まずは生徒達の注目を集めた。

「えー、明後日の強化合宿の送迎の件についてだが」

「！」

来たか、と生徒一同は身構える。

一体どんな車を寄越すと言うのか……と、覚悟を決めて心も構えた。

西村教諭は言う。

「現地集合だ」

『案内すらないのかよ!?!』

Fクラス生徒一同、魂の叫びがシンクロした。

「——つと、本来ならその予定だったのだが」

「——?」

「最近は無確認生命体の事件があったのでな。安全面を考えて、Fクラスにもバスを用意することが急ぎよ決まった」

『よっしやあ!!』

全員でガッツポーズを取る生徒一同。

やはり多少はマトモな扱いをしてもらえて嬉しいのである。

そんな中で、西村教諭は淡々と更に言葉を続ける。

「ちなみに、とても古い車らしく時速20kmしか出ないそうなので、全員当日は5時集合だ」

「その車はもう壊れてるって言って良いんじゃないかな? 道路交通法にも違反してると思うんだ」

「……以上が連絡事項だ。授業を開始する」

明久のツツコミを素知らぬ顔で無視し、授業を始める西村教諭。

そんな彼を見て生徒達は、どういふことを察して叫んだ。

『やっぱりこんな扱いかよおおおおお!!』

Fクラスのこの扱いは、今に始まったことではない。

強化合宿まで、あと2日。



# 桜子

P M 5 : 4 6

城南大学

「――初めまして、私が沢渡 桜子です。よろしくお願いします」

「初めまして。僕が4号こと吉井 明久です。こちらこそよろしくお願いします」

学校も終わり、放課後。

明久は一条に送ってもらい、城南大学まで来ていた。

ソファ―に腰掛ける明久の対面に座るのは、城南大学の学生で考古学を学んでいる沢

渡 桜子。

ぜひと4号に会いたいという彼女の要望に答え、明久はここにいる。

だが、ただ単に会うのではない。

彼女は考古学を学ぶ者。

彼女が今研究している古代文明に使われていた文字と、4号の身体に刻まれていた紋様……これらが似ていると一条が気付いた為、同じ文明文字なのか確かめる為に会っているのだ。

「いきなりで悪いんだけど、これを見て欲しいの。今日貴方に来てもらったのは、この文字についてに他ならないわ」

早速、桜子は文明文字の資料を取り出し、明久と一条に提示する。

出されたコピー用紙に塗られたインクは、明久や一条が知る限りどの言語にも当てはまらない、未知の文字を描いていた。

だが、2人はこの文字に既視感を覚えている。

そう、やはり4号——クウガの身体に刻まれているものと似ている……そう感じたのだ。

「うーん……確かに一条さんの言う通り、4号の身体の模様と似てますね」

「ああ、やはり気のせいではなかった」

「本当っ!?!」

「うわっ」

ダンツ、と机を両の手で平打ちし、勢い良く身体を乗り出させる桜子。

その顔は、伝説のお宝を見つけた時のように輝いていた。

「ほ、本当に気のせいじゃないのよね? 間違いないのよね!?!」

「たぶんそうです……って、ちょ、落ち着いて下さい近い近い!」

思わずといった様子で明久に詰め寄る桜子。

その顔はやはり輝いていた。

彼女は、興奮冷めやらぬとばかりに言葉を次々と飛ばす。

「これが落ちて着いていられますか！ 古代文明の生きた証が目の前にいるのかも知れないのよ!! 考古学を学ぶ者として、これ以上幸せなことはないわ!」

「え、ええ……? ……とりあえず釘を刺しておきますけど、たぶん同じ文字って程度で——」

明久がそこまで言った所で、クワツと目を見開いて言葉をさえぎり、言う。

「たぶん!? たぶんじゃ分からないわ! そうね……なら、今から調べるわ!」

「今から、ですか?」

「ええ——」

そして、明久の肩をがっしり掴み——

「変身してちょうだい!」

「ええ……」

突飛なことを言い出した。

明久は初め、桜子に対して大人しそうな人だな、という印象を持っていたのだが……どうやらそんなことは無さそうだと、思い直す。

そして、初対面の人の前で変身することに抵抗があつた明久だが、結局彼女の熱意に

根負けし、他の人に見られないようカーテンや入口のドアの施錠を徹底してから変身することにした。

「じゃあ、いきますよ」

「ええー」

「……………」

キラキラと瞳を輝かせながら食い入るように見つめてくる桜子に、明久はやりにくそうにしながら構えを取った。

しかしそんなやりにくさなど、深呼吸と集中によって心から追いやる。

すると、腹部にベルトが出現した。

集中が最高潮にまで尖らせ、目を見開きワードを口にする。

「——変身！」

そのワードを口にした瞬間、ベルトの宝玉が赤く光り始める。

瞬く間に身体が戦闘用のものに作り替えられ、その姿は人ならざる者へと変化した。

「これが、4号……………！ すげい……………」

「えつと……………僕はどうすれば良いですか？」

「あつ、そのままが良いわ。資料用に写真撮らせてもらえるかしら？」

「写真ですか？ ……まあ、僕だと分からないようにだけしてもらえれば、構わないですけど……」

「ええ、分かったわ。それじゃあ撮るわね」

カシヤリ、カシヤリと様々な角度から写真を撮られる4号——及び、クウガ。

ひとしきり写真を撮られた後は、もう元に戻って良いと告げられたので直ぐに変身を解いた。

元の人の姿に戻った明久と成り行きを見守っていた一条に、桜子は席を奨め直して追加の資料を取り出した。

その資料にもやはり、古代文字が写されている。

ただ先ほど出された資料と違う所は、一つ一つの文字に日本語が振ってあることか。全部で2行に分けられた古代文字を見て、明久は桜子に質問する。

「これは？」

「私がこの古代文字を解読した物よ。一つ一つ説明していくわね」

桜子は一番上の行の古代文字から指を差し、日本語が振られたそれを人指し指でなぞりながら音読していく。

「まずはこれ。——『心清く体健やかなる者にこれを身に付けよ。さらば戦士クウガとならん。ひとたび身に付ければ、永遠に汝と共にありてその力となるべし』」

「戦士……クウガ」

明久は反芻するようにそう呟く。

『クウガ』——それは、未確認生命体と交戦した際に知った、戦士としての自分の名だ。その名が桜子の読み解いた古代文字に出たということとは、『クウガ』は恐らく彼女の研究している古代文明の戦士に違いないだろう。

思い詰めた表情の明久には気付かず、桜子は説明……というより、独白をこぼす。

「この『戦士クウガ』が何なのか分からないのよね。恐らく吉井君が変身した4号の姿を指すとは思うのだけれど……まだ確証はないわ。それに、心清く体健やかなる者にこれを身に付けよ——『これ』って一体何なのかしら？」

ひとりで考え込み始めた桜子。

そんな彼女に明久は、

「その答えを知っているかも知れません」

と、そう声を掛けた。

当然、桜子は驚いて明久を見る。

「本当なの？」

「ええ。まず、『戦士クウガ』が誰を指すのか……それは、やっぱり僕——4号のことだと思えます」

「その根拠は？」

そう聞かれて、未確認との戦闘中のことを思い浮かべる。

「僕が未確認生命体第3号と戦った時です。3号は、確かに僕——4号を指差して、『クウガ』と言ったんです」

「3号が……ということは、未確認生命体達も同じ文明に生きていたということ——彼らが『グロンギ』かしら？」

何やら別の方向に話が反れそうなので、明久は続きを切り出す。

「続けます。——もう一つの根拠は、『これ』を指す物……このベルトの存在です」

そう言つて明久は、ベルトを出現させて見せた。

ベルトをコンコンと軽く叩きつつ、話を続ける。

「このベルトを手に入れて装着したら、僕は『クウガ』に変身しました。そして変身する時はこのベルトを出現させる必要があります。つまり、ベルトこそが力の源だと思えます」

桜子は口元に手をやり、「なるほど……」とこぼす。

そして結論を出した。

「……うん。状況から見て4号が『戦士クウガ』で間違いなさそうね」

うんうんと頷きながら、桜子はそう結論付ける。

そして「これからは4号Ⅱ戦士クウガで話を進めるわね」と言い、再度資料を指差し次の説明に移ろうとする。

移ろうとして、はたと指を止めた。

「そういえば、そのベルトはどうやって手に入れたの？」

そう問われて、明久はベルトを手に入れた経緯を説明する。

謎の女性に手渡された、と言うと桜子は難しい顔をした。

「……その女の人、凄まじく怪しいわね」

「ですよー」

「とりあえず、その女の人には気を付けた方が良いわね」

「そうします」

そこでその話題は一旦終了し、再度説明の続きに入る。

残る下の行を指差し、なぞっていく。

「あともう1つ解読した物があるわ。——『邪悪なる者あらば、希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり』。これは吉井君が変身した姿を見て、何となく分かったわ」

「え、そうなんですか？」

今度は明久が驚く番である。



彼女は一体何を理解したのかと、明久は言葉の続きが気になった。

「希望の霊石は恐らくベルトのこと。そして炎……炎と言えば赤を連想するわ。そして赤い姿をした戦士と言えば——」

「——クウガ」

「そうね。私が解読した文は2つ共『戦士クウガ』に関するものだったようね。これが分かっただけでも大きな収穫だわ」

と、そこで桜子は腕を頭上に上げて伸びをする。

そして目頭を揉んで目の閉じ開きを繰り返した。

「大丈夫ですか？」

「ああ、ごめんなさい。ついみつともない所を……。大丈夫よ、私徹夜が趣味でね」

「徹夜が趣味……？」

何とも変な趣味だと明久は思うが、言葉には出さず心の内で留めておいた。

ついでに追及も止めておく。

「え、ええと。大丈夫なら良いです。他には何か分かってることはないですか？」

「細々としたことは多少分かってるけど、まだまとめないのよ。分かりやすくまとめから、また教えるわね」

「そうですか……分かりました」

そう言つて明久はカーテンの掛かった窓に顔を向ける。

カーテンの隙間から覗く空は、鮮やかな朱色から深い蒼へと変わる途中であつた。

「もう良い時間ね。そろそろ解散にしましょうか」

「そうですね。今日はありがとうございました」

「いいいえ、私の方こそありがとうございました。無理を言つて会つて貰つて、ごめんな

さいね」

「僕は僕のことを知りたかつたんです、無理ではありませんよ。むしろ、色々知れて良かったです。これからもよろしくお願いしますね」

「こちらこそ」

互いに何度も礼を言い、部屋を後にする。

明久はその後、一条に送つて貰つて自宅へと帰宅した。



数日前

都内某廃屋

そこには、女と数人の男女がいた。

彼女らは総じて、ウエディングドレスや包帯だらけのミイラ、ひと昔前のデスメタルなトゲ付き服といった奇抜な格好をしている。

女は額に薔薇のタトゥーを入れており、周囲の男女達と何やら話している。

その言語は、日本語ではない不気味な言葉であった。

『ズ』の男が2人、勝手に「ゲゲル」を開始したらしい』

その女の通達に、周囲の男女達は様々な反応を返した。

驚く者、頭を抱える者、怒る者。

その内の1人が、女に問いを投げ掛ける。

『バルバ、そいつらはどうなったんだ。まさか「ゲゲル」を成功させたのか?』

バルバと呼ばれた女は、その問いを予想していたのかすぐに答えた。

『失敗した。「クウガ」に殺されてな』

『なっ!? 「クウガ」だっ!?』

周囲の男女達は誰ひとり余さずに驚愕した。

そして、誰ひとり余さず、ニヤリと好戦的な笑みを浮かべた。

『面白い! この俺が「クウガ」を倒してやる!』

『いや、「クウガ」を倒すのは私だ!』

『焦るな。その内順番が来る』

『……………』

バルバはざわめき立つ男女を一言で黙らせる。

そして彼らを1つ見据えてから、もう1つの連絡事項を口にした。

『ダグバからのお達しだ。【ベ】の【ゲゲル】を繰り越し、【ズ】の【ゲゲル】から開始せよ……………とな』

『はあ?!』

バルバの通達に、一部の者達から悲鳴のような声上がる。

その者達は、バルバに食って掛かった。

『おい! どういうことだ!』

だがバルバは、必死の形相で迫る彼らに表情ひとつ変えず、淡々と答える。

『言つただろう、ダグバからのお達しだと。大方、長くは待てないのだろうよ』

バルバの返しに食って掛かった者達は『そんな……』とへたり込んだ。

バルバはそんな彼らに目もくれず、ひとりの女を指差して宣言する。

『これより5日後、準備が済み次第【ゲゲル】を開始する。最初の【ムセギジャジャ】は

——ズ・メビオ・ダ』

『私か!』

ズ・メビオ・ダと呼ばれた女は歓喜し、狂喜に笑った。

そして——人ならざる姿へと、変化した。

鋭い爪、発達した脚部。

そしてその黒い皮膚に覆われた、どこかヒョウを連想させる顔面には、やはり好戦的な笑みが浮かんでいた。

『待っている……【リント】共!!』

5日後、事態は動き始める。

## 女豹

『ゲゲル・ゾ・ザジレス！』

その女——ズ・メビオ・ダは、声高に宣言した。

鋭い爪、発達した脚部、黒い皮膚に覆われたヒョウを思わせる顔面。

そしてキラリと光る、真つ赤な眼球。

誰が見ても化け物と言う風貌のズ・メビオ・ダは、高速道路の真ん中で佇んでいる。

ズ・メビオ・ダの正面から走行してくる車に乗った人間が、彼女を見てギョツとした。

ニヤリと口元を歪めると、その人間をターゲットに定め——フロントガラスすら貫い

て、のどを綺麗に切り裂いた。

運転手が動かなくなつた車は制御を失い、隣の路線を走っていた車を巻き込んで横転

した。

何転もした上で更に後続の車に突つ込まれた者は、恐らく生きては居まい。

悲惨な事故現場と化したこの場を樂しそうに眺めると、ズ・メビオ・ダは次のターゲット

トを探しに駆け出した。



ズ・メビオ・ダが事件を起こしてから少しして、警察車両が現場に駆けつけた。車両から出て来たのは一条と杉田だ。

「こりゃ酷いな。一体何台横転してるんだ？」

「分かりませんが、まずは救助に回しましょう。救急車はすでに手配しているので、我々でも助け出せる人を先に救助しておきましょう」

「そうだな」

2人は横転した車に残された人々の救助に入った。

少しして救急隊が到着してからは、救助が一気に進んだ。

救助を進めて行くと、不自然な遺体を見つけた。

「一条、この遺体の傷を見てみる。のどがパッキリ切り裂かれてやがる」

「ガラスで切った……訳ではなさそうですね。それにしても傷が深い」

その遺体は、もう少しで首が離れるほどにのどを切り裂かれていた。

ガラスで切ったならば、もっと傷は浅いはずである。

「何か気になるな。まさか未確認の仕業か？」

「とりあえずは生存者に事情を聞いてみましょう。何か有力な情報を聞けるかも知れません」

そして話を聞いて回った所、核心的な情報を聞くことに成功した。

車よりも早く走る化け物が、攻撃を仕掛けて来たと言うのだ。

「おい、一条」

「ええ、恐らく未確認の犯行ですね」

「だったらこうしちゃ居られねえ、未確認を探すぞ。次の犯行が行われてるかも知れん」

「はい。本部には連絡しておきます」

後は救急隊と応援の警官達に任せて、一条と杉田は未確認の捜査に踏み出した。



AM11:26

文月学園Fクラス

「——ここはこう解くのだが、実は応用が使える。詳しく解説すると——」

明久は今、平和な日常を過ごしている。

ただの授業で、しかも本来勉強は嫌いであるのだが、未確認との出会いからはそれす



らも愛しい。

だがその平和な時間も、携帯電話が電波を受信したことで終わりを告げた。

「電話……一条さんから？」

マナーモードにしているので音が出ておらず、西村教諭には気づかれていない。

だが、流石に教室で電話に出ることは出来ないのです、トイレと偽って出ることにした。

「先生、お腹が痛いのでトイレに行っても良いですか？」

「む？ 吉井が体調を崩すのは珍しいな。出来るだけ早く戻るんだぞ」

「はい」

さっと教室を出てトイレの個室に入ってから、電話に応じた。

すると、幾分か焦ったような声で一条が話し出した。

『吉井君、大変だ！』

「どうしたんですか？」

『未確認生命体第5号が現れた！』

「――！」

やはり未確認はまだいたか、と苦い顔をする。

しかしそれも一瞬のこと。

次の瞬間にはもう、戦意に満ちた顔になっていた。

「それで、5号はどこに?」

『都内の高速道路だが、君は移動手段がないだろう。今から迎えに行く。学校には捜査協力を求めると連絡しておくから、勝手に抜け出すことにはならないはずだ』

「分かりました」

伝えることは伝えたのか、それから一条は電話を切った。

明久も通話が終了したことを確認した後、ポケットに携帯を仕舞って教室に戻った。しばらくして、教室に男性教諭が訪問した。

その教諭は西村教諭と2、3ほど言葉を交わすと、明久を呼んだ。

「吉井君、お客さんだよ。君を呼んでいるんだ」

「分かりました。……西村先生」

「ああ、行つてこい」

西村教諭とクラスメイト達に見送られ、男性教諭に連れられて行く。連れられた先で待っていたのは、当然一条だった。

一条が教諭といくらか話してから、覆面パトカーに乗り込んだ。

移動中、明久は第5号の情報を聞いた。

「第5号って、どんな奴なんですか?」

「奴はとにかく速い。目撃証言によれば、車をも追い抜くそうだ」

「他には？」

「そうだな……それほどの速度で走るなら、強力な脚力を持っていると考えられる。奴の蹴りには注意だ」

「分かりました」

それからは被害者数や目撃場所等の情報を聞いていく。

そのまましばらく走っていると、車両に警察無線が入った。

一条は即座に反応する。

『こちら警視庁本部。未確認生命体第5号の所在を特定しました。付近の警察車両は現場に急行して下さい。場所は都内高速道路の——』

第5号の居場所が判明したとたん、一条はサイレンを鳴らして文字通り現場に急行した。

もうすぐ始まる戦闘を前に、明久は汗に湿った手をグツと握りしめた。



『パダギ・パ・ザジャギ！』

都内のある高速道路で、ヒョウを思わせる化け物——ズ・メビオ・ダが佇んでいた。

彼女は前方から自分を追い抜いた車を猛然と追い掛ける。

あつという間に追い付くと、ナイフのように鋭い爪の生えた手を振り上げ——  
ザシュツ。

運転席に座る女性ののどを深く切り裂いてしまった。

噴水のように吹き出る血と制御を失った車から、女性の命がないことはよく分かった。

やはり横転した車を眺めながら、ズ・メビオ・ダは爪に付着した血液を楽しそうに舐め取った。

次のターゲットを探す為にこの場を後にしようとする身と身を翻した所で、やかましい電子音が近づいて来ることに気がつく。

それはすぐにやって来た。

黒塗りの車——覆面。パトカーがズ・メビオ・ダのすぐ前方で停車する。

その車のドアが開き出て来たのは、明久と一条。

2人は多量の血溜まりの上で大破し横転した車を横目で見ると、険しい表情でズ・メビオ・ダを睨み付けた。

「お前が第5号……！」

「吉井君、油断するなよ。私も全力で援護する」

「はい！」

ズ・メビオ・ダは彼らを怪訝そうに見ると、日本語ではない言語で話し掛ける。

『バンザ・ゴラゲサ？』

「何だ？ 何て言ってる？」

「……分かりません」

当然明久達には通じないのだが、お構いなしに彼女は話し掛け続ける。

獰猛な笑みを携えながら。

『ン・ゲゲル・ジヨグデビ・ビ・ギデジャス！』

そしてナイフのような爪を構え、2人に襲い掛かった。

「くっ!? はあ！」

明久は一条を後ろに押し退け、ズ・メビオ・ダの迫る勢いを利用して蹴り飛ばした。

ズ・メビオ・ダはそのままバランスを崩し、転倒する。

転がっている間に、明久は腹部に手を添え、ベルトを出現させる。

中央の宝玉は燃え上がる炎のような赤。

そして左手を腰に、右手を左から右へと水平に切ってから、左腰のスイッチを押し込

んだ。

「変身！」

今度は明久が攻める番だ。

「はっ！ やあ！」

右の拳で殴り、左の脚で蹴る。

その度に身体は戦闘用のそれに作り替えられてゆく。

「だあっ！」

最後に頭部が作り替えられる。

昆虫の複眼と同じ且つ真つ赤な眼が、しつかりとズ・メビオ・ダを捉えていた。

変身した明久——クウガの姿を見て、ズ・メビオ・ダは驚愕をあらわにする。

『クウガ……!?!』

何故ここに、とでも言いたげな雰囲気だが、それは隙にしかならない。

先手必勝、クウガは思いきり腹部に拳を打ち込んだ。

『カハッ——』

一条達からの格闘技の教えが活きているようで、ズ・メビオ・ダは痛そうにうずくまる。

クウガはこのまま畳み掛けようとするが、流石にそう上手くは行かない。

ズ・メビオ・ダは持ち前の脚で機敏に動き、攻撃のことごとくを避ける。

「クソツ、当たらない……！」

『ゴゴギー!』

攻撃が当たらないことに焦りが募ってゆく。

やがてそれは大きな隙を生み出し、ズ・メビオ・ダに反撃の機会を与える結果となった。

クウガの腹部に彼女の痛烈な蹴りが突き刺さる。

「ゴフツ!!」

あまりの痛みに、今度はクウガが地に膝をついた。

ズ・メビオ・ダはうずくまるクウガの顔面を、音速に近いと感じる速度で蹴り飛ばす。為す術もなく吹き飛ばされたクウガに、更に追い討ちの蹴りを放った。

「ぐあああ!!」

空恐ろしい暴力に晒されているクウガ。

そんな彼を援護するべく、一条は支給された拳銃でズ・メビオ・ダの顔面に鉛玉をぶち込みに出る。

「今助ける!」

パアン、パアン、パアン!

硝煙とともに打ち出された弾丸は、見事ズ・メビオ・ダの顔面に吸い込まれていった。すると偶然にも、撃った玉の内一つが、彼女の右目を貫いた。

『ガアアアアアアア!?!』

流星の彼女もこれにはたまらず、目を押さえてのけ反る。

その隙にクウガは痛みを無視して気合いで起き上がり、トドメの蹴りを打った。

だが、ズ・メビオ・ダは紙一重でそれを避けると、一気に後方へと下がった。

そして忌々しそうに一条を睨み付ける。

『リント・レ……ジュスガンゾ!!』

今にも一条に飛び掛かりそうな雰囲気だが、クウガが間に割って入ったことでその気配も薄まった。

『クウガ……!』

流星に手負いの状態でクウガに勝てるとは思わなかったようで、ズ・メビオ・ダは非常に悔しそうに身を翻した。

どうやら、逃げるつもりらしい。

彼女はそのまま圧倒的な速度で走り去って行った。

「待て!」

クウガは逃がしてなるものかと全力で追うが、彼我の距離は縮まることはなかった。

結局、クウガ達はズ・メビオ・ダ——第5号を逃がしてしまった。

完全に逃げられたことを理解して、クウガは変身を解き明久の姿へと戻った。



そして悔しそうに拳を握りしめる。

「逃がした……っ。僕がもつと強けれ……ば——」  
 ばかり。

「お、おい吉井君!?! しっかりしろ!」

明久は地面にうつ伏せに倒れてしまった。

一条が怪我を確かめる為に服をめくると、身体のあちらこちら……特に腹部に酷いアザが出来ていた。

「これは酷い……すぐに救急車を呼ばなくては!」

一条は携帯を取り出し、救急車を呼ぶ。

すぐに救急車が来て明久を最寄りの病院へと運んで行った。



「う……っ」

第5号との戦闘から3時間後、明久は目を覚ました。

むくりと上体を起こすと、彼の視界に映るのは清潔なベッドとバイタルを測定する機械。

明久は、自分が今どこにいるのかを理解した。

「病院……そうか、僕は気絶しちゃったのか」

そして第5号にやられた腹部を擦る。

すると違和感を感じた。

「痛く……ない？」

うずくまるほど痛かった腹部は、何故か擦っても全くと言って良いほど痛みを感じなかった。

不思議に思い病着の前を開いて自分の身体を見てみると――

「嘘でしょ……？　何ともないなんて……」

アザだらけだったはずの身体は、傷一つない綺麗な状態に元通り戻っていた。

そこから考えられることは――

「まさか、治ったの？　たった数時間で!？」

明久は時計と今日の日付を見て、戦闘からどれほど時間が経っているのかを理解し、驚いた。

いや、気味の悪さを感じた、と言った方が正しいか。

確実に人間から離れて行っていることを自覚し、明久は何とも言えない複雑な気分になった。

苦虫を噛み潰したような顔をしている所で、病室のドアが開けられ人が入って来た。

その人物とは、明久の担当医——椿 秀一である。

遅れて一条も入って来た。

そう、ここは椿の勤める病院である。

近くの病院が偶然ここだったのである。

椿は目覚めている明久を見て、もう起きたのかと驚いていた。

そして明久に話し掛ける。

「よう、どうだ気分は？ 吐き気とかおかしな所はないか？」

「椿さん。はい、何ともないです。……何ともなさ過ぎますけど」

「ん？ どういうことだ？」

「これを見て下さい」

そう言つて明久は病着の前を開く。

椿と一条はその傷一つない身体を見て、心底驚いた。

「おいおい嘘だろ？ どんな再生力してんだ」

「椿、やはり例の神経組織が関係しているんじゃないか……」

「多分そうだろうな。やれやれ、こいつは検査し直さなくちゃな」

椿は明久のバイタルを確認し、身体に異常がないか簡単に触診等をしてから病室を出

て行った。

後には明久と一条だけが残る。

一条は明久に向き直ると、頭を下げた。

「すまなかつた、吉井君」

「え!? ちょよ、ちょつと一条さん、顔を上げて下さい!」

「いや、もう治つたとは言え、君が怪我をしたのは私が満足に援護出来なかつたからだ。本当にすまない」

「そんな! 一条さんが5号の目を撃つてくれなかつたら、もつと酷い怪我をしてたに違いありません。一条さんは悪くありませんよ! 僕が弱かつただけなんです!」

「しかし——」

と、何度かこのやり取りを繰り返す。

数回繰り返し返した所で、話が終わらないと切り上げることにした。

そして、一条は本題を切り出す。

「吉井君、第5号への対抗手段を用意したんだ」

「対抗手段……ですか?」

「ああ。奴は恐ろしく脚が速い。次にまた追い詰めても、何も対策を打たなければ先ほどのように逃げられてしまうだろう。だからだ」

「なるほど……それで、その対抗手段と言うのは？」

そう問われ、一条はバッグから一枚の資料を取り出した。

明久はそれを受け取り目を通すと、その資料には1台のバイクの写真とスペック情報が記されていた。

正直な所、明久はスペック情報は難しい言葉ばかりで全く理解出来ない。

明久はバイクの写真を指さし、一条に訊ねる。

「これが対抗手段、ですか？」

「そうだ。これに乗って奴を追い詰めるんだ」

「でも僕、バイクの免許を持ってないですよ？」

「それに関しては問題ない。上層部からの伝達でな。未確認との戦闘に限り、運転を許可する方針だそうだ」

「はあ……」

まさか無免許運転を許可されるとは、と明久は呆け気味に返す。

その様子を流して、一条は言葉を続ける。

「もちろん、近い内に免許は取って貰うさ。費用に関しては警察側で出すことで許可が降りている。……ちゃんと勉強するんだぞ？」

「うへえ、勉強ですかあ……。でも、人の命が掛かってるんだから、嫌だなんて言つたら

れないな」

「その意気だ」

意気込む明久だが、そこで素朴な疑問を抱いた。

「所で、このバイクは本当に第5号に追い付けるんですか？」

「何だ、それなら安心すると良い——」

一条は至極真面目な顔でバイクの写真を軽く叩き、根拠を言う。

「——このバイクは、最高時速が300kmだ」

「3びや……!?!」

明久は想像を超える速度に、思わず仰天する。

確かに、その速度ならば追い付く所か追い越すことが可能であろう。

見えてきた勝機に、自然と布団を握る手に力がこもった。

その様子を見て、一条は一瞬、少し悲しいような情けないような、そんな複雑な表情を浮かべた。

だがそれもすぐに収めると、再度写真を軽く叩き、この対第5号への切り札となるバイクの名を口にする。

「こいつの名前は《トライチエイサー》。正真正銘の、モンスターマシンだ」

## 疾走

満月の月明かりが、ぼんやりと夜の大地を照らしている。

とある川辺で、化け物が川を覗いていた。

いや、正確には川に映る自らの顔を見ていた。

その化け物——第5号、あるいはズ・メビオ・ダが、血に染まり穴の空いた己の右目をじつと見つめると……指先から生えた鋭く長い爪を、ゆっくりと差し込んだ。

当然、考えることも憚られる激痛が走っているだろう。

だが彼女は胆力のみでその痛みを耐えた。

そして右目の奥に埋まっている目的の物を摘まむと、一気に引き抜いた。

『ガアアアアア!!』

ぶしゆり、と真つ赤な血液が吹き出す。

肩で呼吸をしながら、取り出した物——潰れた弾丸を忌々しそうに見つめ、そして握り潰した。

『リント・レ……ゴバジ・ギダリ・ゾ・ガジガパ・ゲテ・ジャス……!』

そう呪詛を唱えるような憎々しい表情で、遠くを厳しく睨み付ける。ひとしきり睨み付けた後、彼女は夜の闇に消えて行った。



AM 8:50

文月学園Fクラス

相も変わらずボロっちな教室で、筋骨隆々の男性教諭——西村教諭が生徒達の点呼を取り終えていた。

「ふむ、吉井以外は来ているな」

そう、明久はこの教室にいない。

まだ来ていないのだ。

不在の理由を知らない生徒達を代表して、赤茶色の髪を逆立てた男子生徒——雄二が質問する。

「鉄人、明久が来ていないのは単に遅刻しただけなのか？」

「西村先生と呼べ。吉井は体調が優れないそうなので、後から来るそうだ」

「明久が？ 珍しいな」



意外そうにしながらも、一応は納得した雄二。

西村教諭はもう質問は出ないと判断し、続きを話し始める。

「さて、知つての通り本来は5時集合だったが、安全を取って全員同じ集合時間にし、且つバスも普通のもので変更した。未確認生命体第5号が現れたからな」

本来はボロっちいバスに乗る予定で午前5時集合だったのだが、未確認生命体第5号の出現が報道された為に変更したのだ。

また、移動ルートも変わっている。

元々は高速道路を利用する予定だったのだが、第5号の犯行場所は高速道路。

そんな危険なルートを通る訳にはいかず、時間は掛かるが、学園側は一般道路を経由することに決定したのだ。

「——さて、これで朝礼を終わる。9時10分に校門前に集合なので、各自遅れないように」

西村教諭は出席簿を閉じると、教室から退室して行った。

生徒達も集合場所に向かう為、各々が席を立ててゆく。

その中で、雄二と秀吉、ムツツリーニは、一ヶ所に集まって話し合いをしていた。

「明久が体調を崩すなど、本当に珍しいのう」

「全くだ。だが、この間から様子がおかしかったからな」

「……メールで無事か聞く？」

「そうすつか」

彼らは明久を心配し、メールで安否を確認することにした。

全員が一斉に送信しても迷惑なので、代表して雄二が送った。

送信されたことを確認すると、彼らも集合場所である校門前へと向かった。

やがて時間になると、教職員からの挨拶や注意事項等を受けた後にバスへと乗り込んだ。

Fクラスの生徒達の中には、まともなバスに乗れることに、感激のあまり涙している者もいた。

学園に残る教職員達に見送られ、文月学園2年生達は出発する。

合宿と言っても、友達とお泊まりするのはやはり楽しみになるもの。

大半の生徒は浮かれてはしゃいでいた。

だが、一部の生徒達は不安を抱えていた。

第5号が襲って来ないかという不安だ。

雄二達も、その一部の生徒である。

秀吉が、不安そうにそれぞれしながら言う。

「第5号は襲って来ないかのう。今さらじゃが、不安になってしもうた」

秀吉の独白に反応したのはムッツリーニ。

「……大丈夫なはずだ。奴の犯行場所は高速道路のみ。俺達を通る道路は高速道路から離れている」

「じゃが、万が一があれば」

「……通るルートには警察署がいくつがある。万が一襲われても、すぐに警察官が駆けつけてくれる」

「そうじゃと良いがのう……」

ムッツリーニが落ち着かせようとするが、やはり秀吉は不安そうにしている。そうやり取りする2人を余所に、雄二は目を細めて窓の外を眺めていた。



「——うん？」

「どうした、吉井君」

「いえ、携帯がメールを受信しただけです」

「そうか」

現在、明久は一条と共に警視庁本部に居る。

第5号に対抗する為、トライチエイサーの操縦訓練をしているのだ。

真面目に訓練に取り組んでいたので、運転をするだけであれば問題ない程度には上達した。

今は訓練の合間の休憩時間であり、一息入れている最中だ。

明久はスポーツドリリンク片手に携帯を確認すると、雄二達からの心配のメールが送られている事を知った。

(心配掛けちゃってるな……。早く第5号を倒して合宿に合流しないと)

学校には体調不良で遅くなるということを通して通している。

その為、あまり遅くなつては学校側に睨まれ、雄二達に心配を掛けてしまうので明久としては早く第5号を倒したい所だ。

——明久のその願いの一步目は、すぐに叶った。

『全警官に通達』

無線だ。

『第5号が出現。第5号は一般道路にて警官を次々に襲っています。現場に向かう警官は十分に注意して下さい。場所は——』

第5号が姿を現した。

その報せに一条と明久は勢い良く立ち上がる。

そして明久がヒステリック気味に叫んだ。

「一般道路!? そんな、第5号は高速道路でしか犯行を行ってないはずじゃあ!」

雄二達は一般道路を使っている。

彼らが巻き込まれる可能性が高まったことで、不安を掻き立てられた。

「急にやり方を変えてきたか! 急ぐぞ、吉井君!」

「はいっ!」

どうか無事でいてくれと祈りながら、明久はトライチェイサーに跨がる。

一条も覆面パトカーに乗り込むと、明久を先導する形で発進した。

明久は警棒にもなる右ハンドルグリップ型の始動キー——トライアクセラーを見つ

めると、呟く。

「……次は逃がさない」

そして、ハンドルの接続口にトライアクセラーを挿し込み、エンジンを起動した。

アクセルグリップを捻ると、どこか透き通るようで軽快な駆動音が鳴り響く。

それは、トライチェイサーという名のモンスターが産声を上げた瞬間だった。

「吉井 明久、出ます!」

トライチェイサーは雄叫びを上げ、背筋が冷えるほどの加速度で警視庁を飛び出してゆく。

間もなく一条の乗る覆面パトカーに追い付くと、サイレンを鳴らして走る彼の後を追従して行つた。



一方その頃、第5号——ズ・メビオ・ダは次々と警察官を襲っている最中だった。彼女は徹底して警察官達の右目を抉っている。

これは、受けた痛みを返す為の復讐だろうか。

まるで、彼女の右目を撃つた一条と同じ警察官なら誰でも良いとばかりに襲撃を繰り返している。

ズ・メビオ・ダは血に濡れた赤い指を舐めると、更に次の警察官を探しに行こうとした。

だが、復讐に走っている彼女を止める者が現れた。

額にバラの刺青を入れた、妙齢の女だ。

『バルバ』

ズ・メビオ・ダは、バルバとだけ口にした。

そのバルバと呼ばれた女は、はつきりとした日本語でひとつ告げる。

「ゲゲルの対象以外のリントを狩るのはルール違反だ」

『……………』

そう注意勧告を受けた当の本人は、ふいと顔を背けた。

どうやら、無視するようだ。

そんな様子のズ・メビオ・ダをじっと見つめ、ぼそりと呟くバルバ。

「あと少してゲゲルが成功するというのに、何故放棄するのか……」

『っ！』

理解に苦しむといった様子で首を振る彼女を、ズ・メビオ・ダは、はっと正気に戻ったように見返した。

どうやら、復讐に気を取られて重要なことを忘れていたらしい。

「ふん、今さら気付いたようだな。だがもう遅い。お前のゲゲルの参加資格を剥奪する」

そう言ってバルバは、ズ・メビオ・ダの腹部のバックルに手を添えようとした。

しかし、ズ・メビオ・ダはその手を払いのけ、バルバに背を向けて走り去った。

「……やれやれ。言うことを聞かない奴らばかりだ」

もうすでに姿の見えないズ・メビオ・ダだが、バルバはさして重要ではないというように、この場を後にした。

立ち去るバルバの横に、ふと白いローブのような布で身を包んだ男が現れた。

その口元は黒い布で隠されている。

男はバルバに話し掛けた。

「メビオを殺さなくて良いのか？」

「必要ない。ここで殺そうが、ゲゲルを成功させようが、失敗しようが、どの道魔石は爆発する。ルール違反者の爆弾を解除する気はない」

「そうか」

男はそれだけ言うと、ふらりと姿を消した。

バルバも振り向くことはせず、再び歩き始めた。



「——おいっ！　ありや何だ!？」

バスは目的地まであと半分、といった所まで、何事もなく走っていた。

だが、それも終わった。

文月学園の生徒達を乗せたバスを、猛然とした勢いで追う影があった。

男子生徒がそれを最初に見つけ、周囲に訴える。

おしやべりに興じていた数人が彼の示す方を見ると、揃って悲鳴を上げた。



「未確認!？」

「何でこんな所にいるんだよ!? 高速道路にしか出ないんじゃないのかよ!？」

「知るかよっ! 死にたくねえ!」

それらの言葉は周囲にパニックとして伝染し、瞬く間に広がりきつた。

今やバスの中は大パニックだ。

そしてやはり、影の正体は未確認生命体第5号——ズ・メビオ・ダである。

ズ・メビオ・ダは生徒達の乗るバスに、獲物を見る目を向けていた。

他にも生徒の乗るバスはあるのだが、どうやらFクラスの乗るバスをターゲットに定めたようだ。

「クソっ!? アイツこっち見てるぞっ!？」

「……何っ!? 狙われてるのか……!」

「死にたくないのじゃっ! 死にたくないのじゃっ!!」

パニックに支配されているのは、ムツツリーニや秀吉も例外ではなかった。

秀吉に至っては恐怖のあまり、涙を流している。

しかし、周囲がパニックに陥る中で、ほんの数人だけ冷静な人物達がいた。

——西村教諭と雄二、そしてバスの運転手だ。

「落ち着きやがれこのバカ共っ!!」

「坂本の言うとおりだ！ 皆、落ち着いて窓から身体が見えないよう、伏せるのだ!!」  
怒号とも取れるその一喝に、悲鳴はひたと止んだ。

そして西村教諭の指示に即座に従い、全員がその場に伏せた。

西村教諭と雄二はその結果に頷き、同じく伏せた。

「良くやった、坂本」

西村教諭は雄二の頭を乱暴に撫でて褒めた。

乱暴に撫でられた雄二は、何となく惘然とした表情で西村教諭を睨む。

「坂本はこのまま伏せていろ」

「鉄人はどうすんだ」

「西村先生と呼べ。運転手と話して来る」

そう言つて西村教諭は、未確認に狙われていて尚ハンドルを握ることを止めない豪胆

な運転手に近付いた。

そして話し掛ける。

「あの未確認をどうにか振り切れませんか?」

「無理でしょう。私共車乗りのコミュニティからの情報によると、時速150 kmでも簡単に追い抜かれたそうです。この大型バスでその速度を出すのは危険ですので、不可能と言わざるを得ません」

「どうすれば——危ないっ!!」

西村教諭は叫ぶ。

2人が話している間に、ズ・メビオ・ダが急接近してきたのだ。

恐ろしい速度と力で振られた手刀が窓ガラスを割り、運転手へと迫った。

運転手は突然のことで反応出来なかったが、西村教諭が服を引っ張ったことでギリギリで回避出来、鋭い爪は頬を切り裂くだけに留まった。

とつさに避けたことでハンドルがぐらつき、窓の割れた音で生徒達が再び悲鳴を上げたが、西村教諭が一喝し落ち着かせた。

「西村先生、助かりました。痛っ……」

「酷い怪我だ……運転を代わりましょう」

「いえ結構です。乗客を守るのが私の責務ですから。私が、皆様を必ず守ります」  
「何と……」

何と強い責任感だろうか。

何と尊い勇氣だろうか。

西村教諭は、彼に人として尊敬の念を覚えた。

だが、それに浸っている暇はない。

再びズ・メビオ・ダが襲って来ているのだ。

先ほどと同じように手刀を振るいに近付いたズ・メビオ・ダ。今度はそれをしつかりと捉えていた運転手は――

「揺れますよ!!」

鋭いハンドル操作で、バスのボディを彼女に叩きつけた。

予想外の反撃を受けたズ・メビオ・ダは、回避が間に合わずに弾き飛ばされ道路を転がった。

「よしっ! ――しまった!」

上手く弾き飛ばすことは成功したが……彼は運転手にあるまじき失敗をした。ズ・メビオ・ダに集中し過ぎて、前方確認が疎かになっていたのだ。

前方には、信号待ちで停車した車が。

「間に合ええ!!」

運転手は渾身の力でブレーキペダルを踏み込む。

ブレーキが甲高い悲鳴を上げ、急激に速度を打ち消してゆく。

前に押し潰されそうな強烈な慣性を感じる中で、生徒達が悲鳴を上げる。

果たして――

「間に合った……」

ギリギリで、バスは止まった。

「申し訳ない……守ると言っておきながら、このような結果で……」

「いえ、貴方は立派に守ろうとしてくれましたよ。……少々、肝は冷えましたかな」

軽く落ち込んだ様子の運転手に、西村教諭は苦笑混じりに慰める。

あの襲われている場面で止まっても殺されるだけであつたらうと考えると、運転手ばかりを責めることは出来ない和西村教諭は思った。

『ジユスガンゾ……!』

「なっ!？」

そんなやり取りをしている間に、いつの間にか飛ばされていたズ・メビオ・ダがすぐそこまで接近していた。

その恐ろしい顔は、憤怒に塗り潰されている。

「ひあ——」

逃げようにも、運転手の身体はシートベルトで固定されており、とつきには動けない。西村教諭が助けようとするも、間に合いそうにはない。

運転手は死を覚悟した——

……が。

「おりゃあああ!!」

『バビ!? ガ——』

透き通るようなエンジン音と共に、真つ赤な人影がズ・メビオ・ダを吹き飛ばした。間一髪の所で、何者かが彼を救ったのだ。

「おい、あれって……」

「ああ——4号だ」

——未確認生命体第4号、クウガである。

クウガはトライチエイサーによる体当たりを敢行したのだ。

クウガはトライチエイサーから降りると、拳を構えてズ・メビオ・ダに向かって走り寄った。

『クウガ!?!』

体勢を立て直したズ・メビオ・ダが、驚きつつもクウガの殴撃に応戦する。

だが、前回は避けることが出来ていた殴打が、何故か今回はそれが敵わなかった。

「はああ!!」

『グ……!!』

その理由は、クウガの気迫にあった。

前回以上に込められた強い気迫。

それは、クウガ……明久の友が襲われたことによる怒りと、絶対に逃がさぬという決意の現れ。

様子見などせず、最初から決めるつもりで畳み掛けているのだ。

痛烈なボディーブローの連打に、回し蹴りがズ・メビオ・ダの身体に突き刺さる。

その様子を見ていた生徒達は、驚きを口にする。

「すげえ……」

「俺達を助けてくれたのかな？」

クウガに釘付けになっていいる彼らだが、1人だけ面白くなさそうにそれを眺めていた。

——雄二である。

「……バカ言ってるんじゃない。あんな『化け物』が俺らを助けるワケねえよ。現実的に考えるなら、ただの仲間割れとかだろうよ」

彼の呟きは誰に聞こえるではなく、周囲のざわめきに飲まれて消えた。

「だあっ!!」

その間も止まぬ攻撃に、早速ズ・メビオ・ダはグロツキーと化している。

そのままトドメに持ち込もうと、クウガは大きく拳を引き絞った。

だがその大振りの隙を突いてズ・メビオ・ダは蹴りを放ち、距離を取る。

苦し紛れの攻撃だが、恐ろしいまでの脚力から放たれるそれは十分な威力で以てクウ

ガの左脇腹を打ち据えた。

蹴る際に足の爪を立てた為、鋭く尖った爪がズブリと突き刺さる。

「ぐうっ!」

『ジャラ・グスバ! クウガ!』

このまま畳み掛ける……のかと思いきや、ズ・メビオ・ダは後ろに下がって更に距離を取った。

(逃げる気? させないよ!)

彼女の意図を察したクウガが、血の流れる脇腹を押さえながらも、急いでトライチェイサーに乗り直した。

それとほぼ同時に、ズ・メビオ・ダはクウガに背を向けて猛烈な速度で逃げ出した。

クウガはそれを追い掛けるべく、トライチェイサーのスロットルをぐいと捻った。

透き通るような唸り声を上げて、トライチェイサーは加速を始める。

そして——ズ・メビオ・ダに迫る……いや、それ以上の速度であつという間にこの場から離れて行った。

「……行つたな」

「何にせよ、助かつたのう……。4号様々じゃ」

それを見届けたムツツリーニと秀吉が、ほっと安心の溜め息を吐いて身体の力を抜いた。



他の生徒達も同じような反応だ。

だが――

(こいつら、あの「化け物」に好感を抱いてやがる。あんなもん、いつ俺らに牙を剥くか分からねえ。こいつらがあの「化け物」に近付かないよう言い含めておく必要があるな)

雄二は、やはり面白くなさそうに……というより、問題視するように学友達を一步距離を置いて見ていた。

一方で、ズ・メビオ・ダは痛む身体に鞭打って逃げていた。

と言っても、彼女としてはとつくに逃げ切ったと考えているので、そう焦ってはいないのだが。

彼女は自分が最速だと信じてやまない。

当然である、彼女は自らの脚に誇りを持っているからだ。

誰も自分を追い越すことは出来ない。

誰も自分に着いて来れない。

これまでも、これからもそうである――はずであった。

――何かが、後方から過ぎ去った。

理解し難かった。

自分は最速だ。

自分の前を過ぎ去るものなど存在しない。

ならば、今しがた通り過ぎたものは何だ？

恐る恐る視線を向けると、そこには――

「――逃がさないぞ、第5号!」

――赤い、宿敵の姿があつた。

『ダババ……パダギ・ジヨシ・ザジャギ・ザド!』

ズ・メビオ・ダはクウガを追い越さんと限界まで脚を動かすが、一向に距離が縮まらない。

それほどまでに、トライチエイサーは速い。

クウガはトライチエイサーをズ・メビオ・ダの横にまで移動させると――彼女にトライチエイサーごとタツクルを仕掛けた。

『ガガ!』

時速約270 kmもの速度で、彼女は転倒する。

流石の未確認生命体と言えども、そのような高速で転倒すれば、ただでは済まない。

全身がバラバラになりそうな激痛に襲われ、ズ・メビオ・ダはもはや虫の息だ。

それでも闘志だけは失つておらず、戦士としてのプライドだけで彼女は立ち上がった。

その猛威を振るつた脚は生まれたての子鹿のように震えており、立っていることがやっと、といった様子だ。

——好機、である。

クウガは透かさず構え、1歩2歩と助走をつける為に下がった。

そして両の腕を広げ、腰を深く落とす。

その脚に力を溜め——走り出した。

右足が火に包まれていると錯覚するほどに熱くなり、1歩、また1歩と踏みしめる度に、更に熱くなってゆく。

ズ・メビオ・ダの目前にまで差し迫った頃には、熱は最高潮に達していた。

後は——その右足を、がら空きの土手つ腹に叩き込むのみである。

「おおりやああああああ!!」

ズ・メビオ・ダの強烈な蹴りに負けず劣らずの速度とキレで、クウガの蹴りが彼女の腹部に直撃した。

骨が碎ける鈍い、致命的な打撃音が空気を揺らす。

トドメの一撃に相応しい威力でもって放たれた蹴りにより、ズ・メビオ・ダの身体は、

まるで投げ飛ばされた人形のように吹き飛んでゆく。

腹部には刻印のように浮かび上がる古代文字があり、それから亀裂のようなものが彼女の銅色のバツクルへと伸びていった。

すぐに亀裂はバツクルへと到達し――

『ギ……ギビダグ・バ――』

その強靱な脚も、鍛えられた胴体も、ヒョウのように鋭いその顔も……何かにすぎるように伸ばされた手も。

……全てが爆発し、散り散りに四散した。

――クウガの、明久の勝利である。

「倒せた……か。痛っ――」

四散した肉片を確認し、クウガはそう言った。

完全にズ・メビオ・ダが死んだことを悟ると、クウガは残心の構えを解き、痛む脇腹を押さえる。

「……………」

無言でズ・メビオ・ダであったモノを眺めるクウガ。

その手は、嫌な感触を思い出した時のように、開いたり閉じたりしていた。



未確認生命体第5号に襲われた後、文月学園生徒一行は学園へと引き返した。

今回の事件により文月学園は、生徒の親を中心として世間から猛烈なバッシングを受けることとなった。

未確認生命体が出没しているという情報が出回っていたにも関わらず、強化合宿を行った結果、生徒を未確認生命体の脅威に晒してしまったからである。

そのバッシングを受けた文月学園は、会議の末、今年度の強化合宿を筆頭とした、校外に出る行事は全て中止とした。

又、文月学園長の‘藤堂 カヲル’がマスメディアを通じて各方面へと謝罪。文月学園の名は、今回の事件を機に落ちる結果となった。

一方、未確認生命体第4号——クウガが、報道機関によって大々的に報道された。

他の未確認生命体と同じように危険視する声も上がっているが、文月学園生徒を助けるように闘ったことから、大半の人間からは、人の味方ではないかと考えられている。

その、当の未確認生命体第4号は——

「おはよう、皆」

「おう、明久か。お前、合宿の時遅れて良かったな。大変な目に遭ったぜ……」  
「恐かったのじゃ……」

「……未確認生命体、恐ろしい」

何事もなく日常へと戻っていた。

相変わらず遅刻ギリギリで登校してきた明久に、秀吉がどこか興奮した様子で話し掛ける。

「しかし、ワシらは4号のお陰で助かったのじゃ！ 凄かったのう……颯爽とバイクに乗って現れ、怒濤の勢いで5号を打ち倒す！ その姿はまるで——」

「よせ、秀吉」

しかし、それは雄二がやけに冷たい声音で遮った。

「ぬ、雄二……？」

冷たく言われる理由に心当たりのない秀吉は、困惑したように名前を呼んだ。

雄二はその様子の秀吉を尻目に、近くににいる者達に聞こえるように声を張り上げて言う。

「あの赤いやつ……4号だが、奴に好感を抱くな。助けて貰ったなんて思うな。今後、奴を含めた未確認には絶対に近付くな」

雄二のその傍若無人な物言いに、秀吉を始めとした生徒達が反発するように声を上げ

る。

「何故じゃ雄二。4号はワシらを助けにくれたじやろう」

「バカ言え。現実的に考えてみる、何故奴が俺達人間を助ける必要がある？ メリットなんてないはずだ。4号と5号が仲間割れを起こしていたか、俺達という獲物を横取りしようとしてたと考える方が自然だ。違うか？」

「それは……」

雄二の主張に、クラスの者達は黙り込む。

実際は4号の正体は明久なので、人間である明久が人間を守るのはおかしくない。

だが、明久は世間から自身の正体を隠している為、雄二がそう警戒するのも無理はない。

「……………」

しかし、彼のその言葉は、明久の心に折れた木片が突き立ったかのように傷を付けた。だが、そんなことは露知らず、雄二は言葉が続ける。

「反論は無えようだな。良いか、あの赤い奴、4号は——」

——化け物だ。

そう、雄二は口にした。

「っ——！」

その言葉は、最も親しい友から発せられた言葉は、明久の心を鋭いナイフのようにズタズタに引き裂いた。

明久は周囲にバレないように、うつ向き、悲痛に顔を歪める。

その瞳には薄らと涙まで滲んでいた。

しかし、涙は流せない。

何故涙するのかと怪しまれるからだ。

堅く唇を結び、溢れそうになる感情を必死に堪える。

そして思う。

(やっぱり、正体だけはバレたくない。絶対に隠さなきゃ——！)

未確認から守る為に戦わなければ、友を失う。

しかし戦う姿のその正体を知られても、友を失う。

明久はどうしても抱えてしまうジレンマに、仕方ないとは思いつつも、やるせない気持ちを抑えられないのであった。

しかしあまり顔を歪めていても怪しまれてしまうので、どうにか悲痛に歪む顔を元に戻した。

そうした所で、予鈴が鳴った。

何となく張り詰めた空気が、この鐘の音によって霧散する。



気を削がれた雄二が溜め息を吐くと、急に明久と秀吉、ムツツリー二に話し掛けた。

「次の授業は体育だ。さっさと着替えてグラウンドに行こうぜ」

雄二のその言葉に、秀吉とムツツリー二は気まずい顔をしながらも、頷いた。

だが、明久はそれをやんわりと断ることにした。

「ごめん、僕は今日は体育を休むよ。まだ少し気分が悪いんだ」

「ん？ そうか。なら鉄人に言っとけよ。……今日は大人しくして、早く体調を治せよ」

「ありがとう、雄二」

明久は、隠しきれない悲しみが滲む、ぎこちない笑みを浮かべると、教室を出た。

そして少しだけ歩き、周囲に誰もいないことを確認し、呟いた。

「……隠しきれぬ、かなあ」

これから先正体を感じられないか、という不安に押し潰されそうになり、思わず弱音を吐く。

明久の右手は、ズ・メビオ・ダに受けた未だ治りきらぬ左脇腹へと添えられていた。

——添えられた右手は、今の気持ちを表すかのように小さく震えていた。

## 衝動

「美波、入るよ」

『……………うん』

明久は病室のドアをノックすると、少しして返事が返ってきたので入室した。

見舞いの花と、毎回持ってきているフルーツを枕元の台に置く。

今回持ってきたフルーツはリングゴである。

明久は持参したフルーツナイフでリングゴを剥きつつ、彼を見ようとせず顔を背ける美波へと話し掛ける。

「最近、抜き打ちテストがあつただけどき。散々な結果だったよ」

「……………」

明久は美波が入院してから、こうしてほぼ毎日のように顔を出している。

彼女が傷付いた顔を見られたくないと涙したあの日、明久は何となく『これから先彼女の見舞いに行かなければ、何か大切なモノを失う』、そんな思いを抱いた。

それ故明久は敢えて、何度拒絶されようとも顔だけは出しに行つた。

「ホント、鉄人って厳しいよね。一所懸命に回答したのにさ、容赦なく減点するんだも

ん。おまけで1点くらいくれても良いのにね」

「……そうね」

器用に皮を剥きながら明久が話し掛けてゆくが、美波は素っ気ない返事しかしない。その顔は一体どんな表情をしているのか、顔を背けられている明久には分からない。だが、これでも少しは進展したのだ。

最初辺りは病室前で入って良いかと聞いただけで泣かれ、帰つてと言われていたのだ。

それが今では、入室を許されるまでにはなつた。

単に諦められた、という可能性も捨てきれないが。

だから、明久はめげずに話し掛け続けた。

「あ、そう言えばさ——」

「……ねえ、アキ」

「——ん？」

話題を変えようとした所で、美波から話し掛けてきた。

入院してからは、珍しいことである。

「……未確認って、いつか居なくなるのかな？」

「……」

その問い掛けは、明久には咄嗟に答えることが出来なかった。

「……どうやったたら、居なくなるのかな」

「それは……きつと、4号が倒してくれるよ」

気の利いた返しが出来ないなど思いながらも、それだけ言った。

明久のその言葉を聞くと、美波はこの日初めて目を合わせてきた。

「——あの『化け物』が？」

その瞳は——虚ろ。

「っ——」

針でチクリと刺されたように、痛む心。

だが、仕方のないことである。

彼女にとつて未確認とは、等しく憎い存在である。

人間に味方していることは重要ではない、『化け物』かどうかだ。

仮に4号が全ての未確認を倒したとしても、彼女にとつて残った4号も同じ未確認なのだ。

最終的に4号も死ななければ、彼女が安心して過ごすことは出来ないであろう。

……問題は、4号が明久だということだけである。

「——大丈夫、きつと未確認は居なくなるよ」

それでも明久は、言葉が続けた。

困ったように眉をハの字にしながら、笑みを作つて。

「……………」

しかし、美波がそれに対し何か反応を返すことはなかった。

そのまま互いに無言でいて、数分が過ぎた。

明久がリングゴを剥く音だけが病室で鳴り続ける。

何となく気まずい空気をかき消すように、明久が努めて明るく振る舞いながら、切り

終えたりリングゴを差し出した。

「はい、出来たよ美波」

「…………ウサギ」

皿に乗せられた、真っ赤な皮をウサギの耳に似せて切られたリングゴ。

彼女は一つ摘まむと、少しだけ頬を緩めてから頬張った。

咀嚼したものを飲み込むと、美波はかじりかけのリングゴを眺めながら、ポツリと呟く。

「…………アキ」

「ん？」

「…………ありがとう」

「…………うん」

その後、後片付けを済ませてから明久は病室を出た。  
またね、という挨拶を置いて。

美波は、小さく……よく見なければ分からないほど小さく、笑みを浮かべて見送った。



——某廃墟

ここでは、特徴的な服装をした、荒々しい雰囲気を持つ男女がたむろしていた。  
全員、身体はどこかに何かしらをモチーフにした入れ墨が入っている。

その中で、一人のライダースーツを着た痩せ型の男が、バラの入れ墨が入った女——  
バルバに話し掛けていた。

男はモジャリと爆発した頭髪を掻き払い、茶色のマフラーを揺らしながら言う。

「ツギパ・ザセグ・ジャスンザ？」

その男の言葉に、バルバは挑発的な笑みを浮かべて返す。

「ゴラゲグ・ジャシダギン・ザソグ？」

しかしその男は、バルバの挑発的な笑みを受けても、余裕を持って切り返した。

「ズ……ゴセパ・ギツゼロ・ギギゼ」

そして、ニヤリと口を歪めて、言う。

「ゲギボグ・ガゲス・バサバ」

「ダギギダ・ジギン・ザ」

バルバは肩をすくめると、その男に近付き腹部に手を伸ばした。

男はそれに答えるように、身体を戦闘用のものに作り替えていった。

すぐに変化は終わり、男の身体は黄土色の肌をした、どこかバツタを思わせる風貌へと変わった。

男だった怪物の腹部にある赤銅色のバックルに、バルバは鉤爪のような何かを差し込む。

そして、言った。

「バサダ・ツギン・ムセギジャジャパ・ゴラゲザ・バツ」

「ギギザソグ」

カチャリ、と回される鉤爪のようなもの。

それはまるで、何かの鍵を開けたようであった。

男だった怪物は、人間体であった時のように髪を掻き上げる動作をすると、宣言するように声を張り上げた。

「ツギン・ムセギジャジャパ・キヨグギン・ジャンママ・ズ・バツ！・バザ！」



次の日、早朝。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

明久は自宅周辺でランニングしていた。

もちろん、基礎体力を作る為である。

元々体力はある方であったが、それでも未確認と戦うには現状では足りないと感じたのだ。

今では、朝と夜に格闘技の型の素振りとランニングをすることが日課になっている。

「はあ、ふう……こんな、所かな……はあ……」

息を切らせながら、アパートの自宅へと帰宅する。

それから支払い滞納のせいで水しか出ないシャワーを浴びて、汗を落とす。

「冷たい……これからはゲームはやめて、ちゃんと支払いに回そう」

皮肉かな、明久は未確認との闘いに備えての意識改善によって、少しずつだが自堕落な生活から脱却しつつあった。

さて、シャワーを浴びた後は登校する準備に取り掛かる。



未確認の出没に備えてトライチエイサーで登校したい所であるが、まだ運転免許を所得しておらず、加えて警察側からは未確認出没時以外での使用を固く禁じられているので止めておいた。

ついでに、学校側からのバイク通学も許可されていない。

というより、まだバイク通学許可の申請をしていない。

その為、近い内に申請しておかなければならない。

通学の用意が済んだ所で、明久はすぐさま家を出た。

道中、免許所得試験の予習をしながら通学する。

明日の夕方から、遂に教習所でのバイクの講習が始まる。

一発で受かる為にも、事前の予習は必要である。

明久は、以前の自分なら予習や早起きなど有り得ないなと思い、自嘲気味に鼻を鳴らす。

だがその思考もすぐに隅に追いやり、手に持つ教本に視線を落とす。

そしてまた教本を読みつつ、歩き出した。



——試験召喚戦争、というものがある。

それを簡単に説明すると、デフォルメされた自分自身を召喚し、戦わせるというものだ。

ルールは、各々のクラスのクラス長を代表とし、相手クラスの代表を落とせた方の勝ち……これが基本になる。

他にも細かい規定はあるが、普通に戦闘している分にはあまり関係のないことだ。

試験召喚戦争とは、明久の通う文月学園の最大の特徴である。

その特色が、本日行われていた。

試験召喚戦争を起こしたのは、学力上位のBクラス。

そしてそのBクラスからの宣戦布告を叩きつけられたのは、明久の所属するFクラスだ。

成績底辺のFクラスと成績上位のBクラスでは、全く勝負にならない。

そしてBクラスが勝ったとしても、勝者に与えられる権利はクラス設備の交換のみ。

元から十分以上に良い設備から、わざわざちやぶ台と腐りかけの畳に取り換えるなど意味がない。

つまり、BクラスがFクラスに戦争を仕掛けるメリットは全く以てないということだ。

にもかかわらず戦争を仕掛けたのには、理由がある。

その理由を一言で説明するとすれば、報復、であろうか。

実は以前、Fクラスはより良い設備を手に入れるという名目で、様々なクラスに試験召喚戦争を仕掛けていた。

Bクラスへも然り、である。

ただ、Fクラスがまともにやり合つて勝てるはずはないのだが、当時は姫路 瑞希がいた。

彼女は本来学年次席レベルの学力を有しているのだが、クラス振り分け試験当日に高熱を出し、途中退席で零点扱いになり、底辺のFクラス所属となつてしまったのだ。

つまりはダークホース。

Fクラスは底辺クラスでありながら、学年次席という強力無比な戦力を駆使し、二番目に強いBクラスをも討ち破つたのだ。

だがそれも以前の話。

現在、瑞希は未確認への恐怖から不登校となっている。

Bクラスは彼女が不在の隙を突いて報復活動に出た、ということだ。

明久を始めとしたFクラスのメンバーは、ルール上戦争の拒否は出来ない為、勝てないとなつていながらも応戦するしかなかった。

既に戦争開始から数時間が経っているが、未だに勝敗が決していないのは一重に彼らの戦闘経験の豊富さによる所が大きいだろう。

だが、所詮それも付け焼き刃。

いくら戦い方が上手いと言っても、圧倒的なまでに開いた地の戦力差を覆すほどではない。

精々が時間稼ぎにしかならないであろう。

1人、また1人とやられてゆくFクラスメンバー。

そんな中、明久は苦い顔をしながら複数人を相手取っていた。

「く……またやられたか」

『よそ見は厳禁だぜ!』

「おっと。危ないね」

『くそつ、吉井のくせに、ちよこまか避けやがって!』

「簡単にはやられないよ。隙あり!」

『しまっ!?! やられた!』

一瞬の隙を突き、相手召喚獣を叩き伏せる、明久の召喚獣。

基本的にFクラスメンバーが戦っても時間稼ぎにしかならないが、こと明久に限っては違った。

彼は召喚獣を使った雑用を常日頃から教師に頼まれていた為、他の生徒と比べて圧倒的に召喚獣の操作が上手いのだ。

召喚獣の操作というものは、実はとても難しい。

並みの生徒ならば、単に移動して武器を振るうだけで精一杯なのだ。

そんな中、明久だけが複雑な動きを可能とし、アクロバティックで変則的な動きを駆使して戦闘力の差と数の差を覆す事が出来る。

『このお！』

「動きが素直過ぎるよ！」

『キヤア!?』

『攻撃してる今なら……!』

「残念、当たらないよ」

『んなつ……すばしっこ過ぎるだろ!?』

明久の基本戦術はヒット&アウェイ。

素早い身のこなしで攻撃を避け、確実に……可能なら急所に一撃当てる。

防御力と攻撃力がとても低い明久の召喚獣が得意とする……というより、そうせざるを得ない為に習得した戦い方だ。

明久が戦っている区域に関してだけ言えば、善戦していると言って良いだろう。

しかし、これは個人戦ではなく団体戦。代表が討ち取られればそれで終わりだ。

明久は頑張ったが、残念ながら一人で戦況を動かすこと叶わず、先に代表である雄二を討ち取られてしまった。

かくして、FクラスはBクラスの報復活動に屈することとなった。

試験召喚戦争が終わり、戦後。

Bクラス代表の男子生徒、根本 恭二がFクラスへと足を運んでいた。

彼の顔には、ニタニタとした粘着質な嘲笑が浮かんでいる。

対して、雄二や明久などのFクラスメンバーは悔しそうに歯を喰い縛っている。

雄二は根本の癪に障る笑みに苛立ちを込めて睨むと、彼はおどけるように肩をすくめて言った。

「おお怖い。そう睨まないでくれよ。お前らが負けたのは、弱くて頭が足りなかったからだぜ？俺らBクラスが悪いみたいに見えるけど、困るなあ」

「根本、てめえ……」

「何だよ坂本。姫路がないと何にも出来ないポンコツ指揮官が文句を言えるとも思ってるのか？」

「……チツ」

雄二は目を釣り上げつつも、具体的な文句を上げることなく顔を反らした。

「へっ、前は散々やってくれたからな。意趣返しが出来て気分が良いぜ」

根本は心底楽しそうに嗤いながら言う。

ひとしきり嗤った後、彼は雄二達に指を突きつけ、

「じゃあ、ルールに則ってFクラスの設備をランクダウンさせて貰うぜ。テメーらクズ野郎どもにはミカン箱の机とゴザの座布団がお似合いだ」

と言いつつ放った。

勝ったクラスには負けたクラスの設備を入れ換える権利が与えられるが、入れ換えなかった場合はどうなるか。

その場合、負けたクラスへのペナルティという形で、設備のランクダウンとなる。

Fクラスの場合だと、元からちやぶ台に腐った畳という酷い設備が更に酷くなり、ちやぶ台はミカン箱に、腐った畳はゴザに変更となる。

そう、根本は以前負けた意趣返しのために、それ以外メリツトのない試験召喚戦争を仕掛けたのだ。

再び嗤い始めた根本を、明久は顔をしかめながら見つっ、呟く。

「……趣味が悪いね」

「全くじやのう」

明久の独白に同調する形で秀吉が相づちを打つ。

秀吉の顔からも、不快感が見てとれた。

「ははっ！ こりや本当に気分が良いぜ！ また今度戦争仕掛けて設備を下げてやろうかな？」

「調子乗りやがってこの野郎……！」

「んー？ 負け犬の遠吠えが聞こえるなあ」

「んだとツ——」

「雄二、暴力はいかんのじや」

根本がこれでもかと雄二を挑発すると、十分に屈辱を感じていた雄二が拳を振り上げた。

しかし、それはFクラスにとって悪い結果しか招かない為、秀吉が止める。

止められたことで少し頭が冷えたのか、秀吉に小さく謝ると拳を降ろし、睨むだけに留めた。

根本はと言うと、雄二が暴力に訴えようとしたことに驚いたのか、軽く顔を引き吊らせている。

しかしそれもすぐに引つ込め、再び嘲る姿勢に入った。



「ふ、ふん。坂本が暴力を振るつた後のことも考えられないような馬鹿だったとはな。流石の俺も予想外だぜ」

「……ふん」

雄二自身、とつさに暴力を振るおうとしたことに思う所があるのか、言い返すことはしなかった。

それが根本には愉快に映つたのだろう。

すぐにまた上機嫌になり、煽りはエスカレートして行つた。

ここぞとばかりにFクラスを馬鹿にする根本。

その顔は高揚し、愉悦の絶頂と言つた様子だ。

やがて根本の標的はショックによる不登校の瑞希、そして入院中の美波にまで移つた。

「姫路は未確認に襲われて不登校、島田は入院してるんだってな？ ははっ！ 姫路は当然だが、島田も一部の教科は強いからなあ。あいつらが居ないお陰で都合が良いぜ！

次も簡単に勝てるだろうからなあ！」

——そして遂に、根本は越えてはいけな一線を越えてしまった。

「——どうせなら、もう戻つて来なくても良いのにな！」

「——ッ!!」

その発言は当然Fクラスメンバー……そして、明久の怒りを買った。

明久は根本の言った言葉を理解したとたん、鬼のような恐ろしい表情を浮かべ、ずんと近寄って行く。

あわや暴動かと秀吉が慌てて止めようとするが、明久のあまりの剣幕に思わず身をすくめてしまった。

そして雄二の横を通りすぎ、根本の眼前へと歩を進めた。

根本は突然前に出てきた明久に向けて、怪訝な表情を浮かべる。

「ん？ 何だ吉井。……ははーん、さてはお前キレた——」

そこまで言った根本の襟首を、明久は思いきり掴み上げた。

「ぐあつ!？」

「明久!？」

戦士クウガへとなった影響か、はたまた筋力トレーニングの成果が良く出たのか、根本の身体は軽々と宙に浮いた。

その明久の突然の暴挙に、雄二達は驚きの声を上げる。

だが当の明久は、それを無視して根本に言う。

「……謝って」

「は、はあ!？」

「美波と姫路さんに謝れ!!」

「ひっ——!?!」

学校中に響くのでは、というほどに張り詰めた大声で叫んだ明久。

その表情は、憤怒に染まっている。

初めて明久の凄まじい形相を視界に捉えた根本は、豹変した彼の雰囲気呑まれ、思わず悲鳴を挙げてしまった。

明久が言葉が続ける。

「美波と姫路さんがどれだけ怖い思いをしたか知ってるの?! 目の前で人が殺されてて! 自分が殺されそうになって! 運良く生きてても、美波は顔に大怪我を負ったんだよ!?! 女の子なのに!! それがどれだけ怖かったか、どれだけ辛いか、少し考えたら分かるでしょ!!」

怒濤の勢いで紡がれる言葉に、根本は怯みながらもどうにか言葉を返すことが出来た。

だが、その口から出たのは反省でも謝罪でもなく、捻れ曲がった根性と、格下と認識している人間に言い負かされたくないというプライドから来る嫌味だった。

「へっ、俺が知るかよ! 何で優等生の俺が不登校の不良生徒と成績底辺の女を気に掛けなきゃならないんだ。別に来なくても良いだろ。ゴミが学校に来て汚れるだけな

んだからさあ！」

明久は我慢した。

雄二がクラスのを為に暴力を振るわなかった為、自分も暴力を振るつてはならないと。

だが、それも無意味なこととなつてしまった。

自分の言葉が分かつて貰えないことに、そして瑞希と美波をゴミと言われたことに

……明久はついに我慢の限界を迎えた。

「何で——何で人の気持ちに分からないんだあ!!」

「うわっ、やめ——」

拳を固く握り、腕を振り上げ、限界まで引き絞る。

——今まさに明久は、未確認と戦う為の拳を、人に向けようとしていた。

周囲の焦りが含まれた制止の声が、妙にゆっくりと、遠くに聞こえる。

だがそれも間に合いそうにない。

そして——

## 跳躍

——少年が、血に沈んで倒れている。

顔面は青く腫れ上がり、折れた歯が腐った畳の上を転がっている。

鼻はひしやげ、彼の胴体も酷い有り様になっている。

ピクリとも動かさず、力なく横たわるその姿はまるで……未確認生命体第3号、あのコウモリの化け物の最期のように。

「——ッ!？」

——明久は「殴るギリギリの直前」で、そんな幻視をした。

そう、幻視なのだ。

明久の手はまだ振られていないし、根本の血に染まってもいない。

綺麗なままだ。

「明……久？」

拳を振り抜く寸前で固まってしまった明久を不思議に思い、恐る恐ると言った様子で秀吉が名前を呼ぶ。

しかし明久は何も反応を返さなかった。

掴み上げられている根本も、なかなか飛んで来ない拳に怪訝な顔を浮かべている。

「どうしたのじゃ、明——」

秀吉が明久の顔を覗き込みに行くと——

「ハッ……ハッ……ハアッ——」

顔から血の気が失せ、真っ青になりながら過呼吸に陥っていた。

そして掴み上げていた手から根本がズルリと落ち、明久はその場にうずくまってしまった。

「明久!? しつかりするんじゃ明久!」

「おい、どうした! 明久に何があつたんだ!」

「分からぬ……とりあえず、誰か保健室の先生を呼んで欲しいのじゃ!」

周りが慌ただしくなる中、明久はそれらの喧騒の一切が聞こえていなかった。

いや、別のことに集中している為に気付かなかった、という方が正しいか。

明久は独り、思考にふけていた。

(僕は……。同じ間違いを繰り返そうと、したのかな……)

満身に空気を肺に送れず、もうろうとし始めた意識の中で、ぼんやりとそう思った。

そして彼の脳裏に浮かぶのは、自らが怒りに身を任せて殴殺した、未確認生命体第3

号。

それと、第3号の最期に重なるように沸き起こった、殴殺された根本のイメージ。

2つに共通することは、怒りに身を任せたといいこと。

幸いにして根本に関しては未遂で終わったが、少し間違えていたら、彼も第3号と同じように殴り殺していただろう。

今の明久には、それが容易く行えるだけの力がある。

そのことに気付くと、とたんに何かに押し潰されそうになったのだ。

この手で第3号の歯を折り、骨を折り、命を奪ったあの感触。怒りに身を任せ、人の為の拳を人に向けた行為。

罪の意識とも言えるそれらは明久の心を蝕み、過呼吸という形となって表れた。

(このままじゃ、僕は——)

未確認と変わらない——

と、そこまで考えた所で明久の意識は途絶え、力なく横たわった。

「おい明久!? しつかりしろ、おい!」

雄二達が必死に呼び掛けるも、意識のない明久には届かない。

どうしようもなく慌てる彼らの下に養護教諭(保健室の先生)が到着したのは、数分後のことだった。



明久が意識を取り戻したのは、すぐであった。

養護教諭から適切な対応を受け、大事に至ることもなかった。

一応念のため、養護教諭は明久を保健室で休ませることにした。

今は、明久は独りで保健室のベッドに寝転がっている。

体調自体には問題ないが、気持ちの問題で顔色はあまり良くはない。

(皆に迷惑掛けちゃったな……後で謝らないと)

沈んだ気持ちのまま、そう思う。

そして自らの手を握り、拳を作って眺める。

——果たして、この手は人の手か、化け物の手か。

意識を失う直前、明久は自分が未確認と変わらなないと考えていた。

それは第3号を殴殺し、暴走した時に分かっていて。

そうならない為、未確認と似た力を持ちながらも未確認を殺すことで、人間であろう  
としてきた。

自分は未確認とは違うのだ、と。



だがそれもどうだ。

あつさりと力を振るうべき方向を間違え、危うく人を殺しかけたではないか。人ならざる力を以て、人を害する。

そこにクウガと未確認の違いなど、ない。

(違う!!)

そこまで考えて、明久はかぶりを振る。

(僕は化け物なんかじゃない！ 人間だ。人間なんだ!!)

そう自分に言い聞かせるように、心の中で叫ぶ。

(人間……なんだ……)

しかしその叫びとは裏腹に、身体は小さく縮こまってゆく。

人の身体でなくなることを良しとして戦っておきながら、認めたくなかった。

未確認と同化してゆく、この身体を。

抱いたその思いは、矛盾である。

だがしかし、その感情——恐怖は、確かに本物であった。

いつか……美波すらも、友すらもこの手に掛けてしまうのではないか。

そんな恐ろしい想像をしてしまうと、とたんに自らの拳が、身体が恐ろしく思えてしまった。

小刻みに震えだす身体を掻き抱いて、溢れてきた涙を流しながら恐怖に怯える明久。  
——そこで、保健室のドアにノックする者が現れた。

突然の来訪者に、明久はビクリと肩を震わす。

(今、人に会いたくない……)

そんな思いが相手に通じるわけもなく、ドアはあつさりとは開けられない。

入ってきたのは、西村教諭だった。

「倒れたと聞いたが、大丈夫——」

彼は明久の濡れた頬を見ると、一瞬だけ驚いた顔を見せた。

そして、すぐに優しい顔を浮かべ、明久の隣に椅子を置いて腰掛けた。

「吉井。お前は何か、大きな悩みを抱えているようだな」

「え……?」

「その顔を見れば誰でも分かる。ほら、これで顔を拭け」

「あ、ありがとうございます」

西村教諭はハンカチを手渡すと、手の掛かる子供を見るような、それでいて慈しむような顔をする。

明久が涙を拭ったのを確認してから、西村教諭は話を切り出した。

「吉井、お前は元々、暴力を振るうことにあまり抵抗のない子だったな」

「……………」

そう、明久は未確認が出現するまでは、おふぎけで暴力を振るったり喧嘩をしたりと、いわゆる不良に近い生徒であったのだ。

誰彼構わず、というわけではなかったが、暴力のハードルが低かったことには違いない。

それが未確認が出現してからは、めっきり暴力を振るわなくなった。

そして暴力を振るい掛けて、今こうして涙を流している。

はたから見て、明久が何かに悩んでいるのは一目瞭然だった。

「だが、人一倍正義感が強く、優しい子でもある」

そうだ。

おふぎけの暴力は置いておくとして、明久が本気で喧嘩する時は決まって他人の為にあった。今回の根本とのやり取りのように。

彼は本来、他人の為に本気で怒れる心優しい少年なのだ。

「そんなお前のことだ、きつと分かったんだらう。暴力の怖さと、理不尽さが」

「……………」

西村教諭は、明久が未確認の殺人事件に巻き込まれたことで暴力の極地を目の当たりにし、暴力の恐ろしさを学んだのだと認識していた。

実際は少し違うが、あながち大きく間違つてもいなかった。今、明久は暴力の恐ろしさを痛感している。

自分が化け物と化し、親しい者すらも殺してしまうかも知れないという恐怖の中で。未確認に対してとは言え、命を奪うという、究極の暴力を振るつたことで。

それらは、明久へ暴力その物への嫌悪と恐怖を抱かせるのに十分であった。

「先生はよくお前達Fクラス生徒に拳骨したりするが……実を言うとな、本当は先生も怖いんだ。暴力を振るうのが」

「え……鉄人が……？」

「西村先生だ」

暴力の化身が何を、という目で西村教諭を見る明久に、西村教諭は思わず苦笑する。「怖くて当然だろう。何せ、大事な教え子をこの手で傷付けているのだから」

そう言つて自らの手を見つめる西村教諭。

その目は、悲しそうに細められていた。

彼のその顔を見た明久は、返す言葉に詰まる。

西村教諭のその感情が、自分を慰める為だけの嘘ではないと理解したからだ。

「先生はな、教え子が何よりも大切なんだ。なのに……この手で大切な生徒を傷付けてしまう。傷付けてしまえるんだ。先生は、そんな自分が怖いんだ」

「先生……」

それは、自分の悩みと共通した部分があるのではないか。

明久は、そう感じた。

そして同時に、西村教諭なら自分を理解してくれるのではと、ほんの少しだけ希望を抱いた。

だが、やはり全てを話す気にはなれなかった。

大切な生徒を守る為に、明久という未確認生命体を敵視する可能性があったから。

だが、西村教諭が自分に寄り添おうとしてくれていることには、素直に嬉しさを感じた。

西村教諭は話を続ける。

「吉井達を殴るのは、愛あつてのことには違いがない。話を聞かないお前らが道を踏み外した時、その心に響かせるには拳しか知らないからだ」

だが……と言葉を一旦区切り、コツリと己の額をこずく。

「未確認の痛ましい殺人事件を聞いてみると、拳に頼っていることは間違いないのではないか……そう思うようになった。話を聞かないからと暴力で訴えるのは、ただの自己満足ではないのかと」

そして溜め息を一つ吐き、再び拳を見つめて言う。

「結局の所、どんな理由があろうとも暴力は悪なのだろう」

「どんな理由があつても……暴力は、悪……」

「そうだ。そんな簡単なことにも気付けなかつた。……いや、目を逸らしていた。暴力による矯正が手早く、そして楽だからだろうな」

西村教諭は、そう自嘲気味に話す。

しかし、その表情には自棄になつたような陰鬱な色は見えなかつた。

むしろ、柔らかな笑みさえ、浮かんでいた。

彼は言う。

「俺も吉井も、暴力に甘えてばかりいた。それは決して良くないことだろう。……だが」

——ゆつくりと、握りしめられた拳をほどきながら。

「今からでも、遅くはあるまい。暴力ではない、他の手段で心を伝える……その方法を探そう」

西村教諭の拳が、開ききつた。

その瞬間、彼の暴力を振るう為の拳が——

「先生……」

「ん？」

「——ありがとうございます」

「少しでも道しるべになれたのなら、良かった」

手を取り合う為の、誰かの手を優しく包み込む大きなてのひらへと、変わった。

(暴力は、悪。なら僕は……)

変わろうとしている西村教諭を目の当たりにし、明久も何かが変わろうとしていた。明久は、その感覚に言い表せぬ暖かさを感じた。



病院内。

美波の入院する病室に、来訪者がいた。

彼女の妹だ。

「お姉ちゃんっ！ 会いたかったのです！」

「わ……葉月。ひとりでここまで来たの？ また未確認に襲われたら危ないから、ひとりで歩くのは止めなさいって言ったでしょ！」

「ご、ごめんなさい……。でもでも、お姉ちゃんがないと寂しかったのです……」

「まったく、この子ったら……。しょうがないわね、こっちにいらっしやい」

「お姉ちゃんっ！」

この子の名は、島田 葉月。

美波の実妹で、元氣いっぱいの小学5年生だ。

ツインテールが天真爛漫さを表しているようで、よく似合っている。

美波は、葉月の前でだけはいつも通りでいられた。

やはり、家族であり最愛の妹だからだ。

実は葉月は、第3号……あのコウモリの未確認に1度だけ襲われていた。

あわや殺害されるか、といった所で、帰りの遅い葉月を心配した美波がその現場に居合わせた。

美波は路肩の小石や棒で第3号の注意を引き、その隙に葉月の確保に成功した。

……だが、そこまでだった。

非力な女子高生に過ぎない美波では、到底第3号に太刀打ち出来なかった。

それでも抵抗を続けた結果、第3号は怒った。

力任せに爪で切り裂こうとしたのだ。

幸か不幸か、単純な動作だった為、頬を切り裂かれながらも避けることに成功した。

頬の傷はその時に出来たものだ。

だが、ただの高校生にとつては頬を切り裂かれるのは大怪我である。

当然、激痛で動くことは出来なくなった。



葉月が泣き叫びながら第3号の殺害を待つだけ、といった状況で、偶然車が通りかかった。

すでに暗闇が辺りを覆い始めていた為、車は煌々とライトを照らしていた。

それが、彼女達の命運を分けた。

第3号はドラキュラのような特性を持つ。

つまり、強い光に滅法弱いのだ。

日光で消滅するまでとは言わないが、光を浴びればたちまち退散する程度には弱い。

その為、彼女達は命を拾った。

美波は無事に車の運転手によって救急車を呼ばれたが、心に大きな傷を負ってしまった。

そこからは、知つての通りである。

ただ、葉月の心は折れることがなかった。

もちろん未確認に対する恐怖はあるが、子供ゆえの純粹さか、前に向かって歩きだした。

美波を立ち直らせようとしているのだ。

だから、今日のようによく会いに来ている。

「ところで、バカなお兄ちゃんは来たのですか？」

バカなお兄ちゃんとは、明久のことである。

葉月は明久と面識があり、頭の悪い彼をバカなお兄ちゃんと呼び、なついている。その呼び方に他意はない。

小学生らしいストレートな、ただの愛称だ。

葉月の問いに、美波はバツの悪そうな顔で答える。

「来た、けど……」

「……お姉ちゃん、また冷たくしたですね？」

「う……」

美波の答えに、葉月はジトツとした目を向ける。

非難する視線に、美波は居心地悪そうにしている。

「ダメですよ！ せっかくお姉ちゃんを心配して来てくれるのにつ。バカなお兄ちゃんが可哀想ですっ」

「で、でも……」

「でも何もありません。どうして好きな人に優しく出来ないですか」

「ちよっ、葉月っ!？」

美波は思わぬ攻撃に慌てふためく。

「たまたま個室の病室があてがわれたから誰にも聞かれず良かったものを、もし誰かに

聞かかれでもすれば美波は恥ずかしくて仕方なかっただろう。

ちなみに、美波は明久に恋慕を抱いている。

人を好きになることに理由を考えるなど無粋であるが、強いて言うならば、彼の優しさと勇敢さに惚れ込んだ。

ただ、美波は自分の心に素直になれなかった。

こと恋愛に関しては無器用なのだ。

明久に取った態度も、彼を好いているからである。

好意を寄せている相手にこそ、自分の傷ついた姿と、情けなく落ち込んでいる姿を見られたくないのだ。

決して、明久が迷惑な訳ではない。

しかし、やはり彼女は不器用だった。

「……………」。やっぱり、アキにはこんな姿、見られたくないわ。それは今でも変わらないわい」

「お姉ちゃん…………」。でも、せめて優しくしてあげたらどうですか？」

「でも…………」

「むかつ」

いつまでも変わらない態度に、葉月は苛立った。

そして、大好きな自らの姉が他人に優しく出来ないところなど見たくなかった。ゆえに、怒る。

「どうして優しく出来ないですか！ お姉ちゃんはバカなお兄ちゃんがキライですか!?!」

「ち、ちがつ」

「何が違うのですか！ 葉月にはお姉ちゃんがバカなお兄ちゃんを嫌ってるように見えません！」

「違うの、葉月」

「あんな優しい人に優しく出来ないお姉ちゃんなんて、キライですっ!」

「あ、待って!」

葉月はそう言葉を吐いて捨てると、たちまち病室を立ち去ってしまった。

美波は手を伸ばすも、すばしっこい彼女には届かなかった。

呆然と病室のドアを見つめる美波。

病室には、葉月が来る前に点けていたテレビの音声のみが反響している。

——そこでふと、テレビが無視出来ない言葉を発した。

“未確認生命体第6号が出現”と。

その出現場所は、この病院に極めて近い。

加えて、葉月は今しがた出ていったばかり。

恐らく、病院からも出るだろう。

美波は、顔から血の気が失せるのを自覚した。



明久は、トライチエイサーを走らせていた。

すでにクウガに変身しており、車と車の間を縫うようにして第6号の出現場所を目指している。

明久は運動神経だけは良いので、ある程度の操縦技術はモノにしたようだ。

報道機関が第6号出現を報せる少し前に、一条からの連絡があった。

その連絡を受け、念のため病院に行くと偽ってすぐさま明久は学校を抜け出し、自宅付近に隠してあるトライチエイサーで出動した。

通り過ぎる人々に騒がれながらも進んでいると、やがて第6号らしき影を見つけた。どうやら第6号は、ひとりの男性を狙っているようだ。

クウガは、第6号が男性をジリジリと追い詰めていくのを、トライチエイサーで無理矢理割って入ることで阻止した。

突然のことに、第6号はやや驚き、男性は更に未確認が増えたことに戸惑っていた。固まって動かない男性に、クウガは声を掛ける。

「早く逃げて!」

「え……あ、はい!」

一目散に逃げてゆく男性を横目で見送り、トライチエイサーから降りて第6号と対峙する。

少しの間だけ、お互いをにらみ合っていると、第6号は驚きの行動に出た。

『クウガ。ジャマ……スル、ナ』

「!? 未確認が喋った!」

喋ったのだ。

たどたどしいながらも、つつかえながらも。

確かに、確実に。

日本語を喋ったのだ。

『コロ、ス』

「くっ」

しかし吐かれた言葉は、やはり殺伐としたものだった。

第6号は、その殺伐とした台詞とは裏腹に、流麗さすら感じられる動きでクウガに回

し蹴りを叩き込んだ。

クウガはとつきに腕で防ぐことに成功したが、彼の心境はそれどころではなかった。(もしかしたら……もしかしたら、意志疎通が出来るかも知れない！)

今彼の頭の中を支配しているのは、西村教諭の言った言葉。

「暴力は悪。他の手段で心を伝える」

クウガ……いや、明久として。

未確認とも戦わず、話し合いによつて事を解決しようとしていた。

それが正しいことではないかと、未確認とも意志疎通が可能ではないかと、信じたかったから。

「待って！」

『……………?』

第6号は、ピタリと動きを止め、不思議そうにクウガを見る。

明久は、しめたと思った。

第6号は、どうやら話しを聞く気があるようだからだ。

「何で人を殺すんだ。何か理由があるの？」

『……………』

聞いてはいるようだが、答えることはしない。

それでも、明久は話し掛け続けた。

「もしかして、君達は住む場所がないの？ 僕達人間が排除しようとするから、仕方なく殺してるだけなの？ だったら、僕が知り合いを通じて伝えるよ。君達が安心して生きれる場所を用意するべきだって」

『……………』

それでも、反応がない。

明久はじつと待っている、少しだけ反応があった。

軽く腕を持ち上げ、言ったのだ。

『ウル、サイ』

「んなっ!?! ぐあっ」

一言だけ発した言葉は、拒絶だった。

そして、痛烈なボディブローのおまけ付きだ。

攻撃されたとあつては、明久はクウガとして対応せざるを得ない。

流石に黙ってやられる訳にはいかないのだ。

自分がやられれば、人を守る者がいなくなる……それくらいは明久にも分かっていた。

しかし、残念な気持ちにはなるといふものだ。



「クソつ、ダメだったか……」

『シ………ネ』

結局暴力を振るわなければならぬことに、明久はやるせない悲しさを感じる。

しかし、やらねば第6号は誰かを殺すだろう。

明久は思考を切り換え、クウガとして反撃を繰り出していった。

いくら蹴り蹴られ、殴り殴られを繰り返していると、クウガは自分の方が優勢であることに気づいた。

どうやら、第6号はさほど耐久力はない様子なのだ。

不利を悟った第6号はバックステップで距離を置くと――

『フッ』

なんと、ひとつ跳びで近くのビルの屋上まで退避した。

いや、跳ぶ間に余裕そうに髪を掻き上げる動作をしたことから、退避というよりも、付いて来れるかといった挑発だったのかも知れない。

ビルの高さは、地面からおよそ20メートル。

あるいはクウガなら届くかと、明久は追いかけてみることにした。

「せえ——のおっ!!」

脚を曲げ、力を溜め、全力で跳躍をする。

ビルの屋上までグングンと近づいてゆき——  
「クソっ！」

半分と少しを超えた所で、失速し落下が始まった。第6号は、落ちてゆくクウガを愉快そうに見下ろしていた。難なく着地に成功したクウガだが、内心は悔しがつている。あと少しだったのだ。

あとほんの4、5メートルで届いたのだ。もつと、もつと高く。

そうクウガは強く思いながら、再度跳躍することを決めた。  
「おおおおお!!」

——変化が、起きた。

今度は、いとも簡単に屋上まで到達したのだ。

なぜ、と困惑するクウガだが、第6号の反応は違った。どこか、感心したような。

どこか、嬉しそうな。

そんな様子で、たどたどしい日本語で言う。

『ソウ、ダ……ソノ、イロ、ガ……イイ』

イロ。いろ。色。

——そう、クウガの生体装甲と複眼の色が、変わっていた。

いや、変わったのは色だけではない。

生体装甲の形状にも変化が起こっていた。

燃えるような真つ赤だった色は、深い海のような落ち着いた青に。

筋肉質な肉体を思わせる生体装甲は、見るからに動きやすそうな、とにかく軽量と  
いった印象を持たせるものに。

クウガは、これまでとは全く違った新しい姿へと変化したのだ。

「変わった!?!」

『ツイテ、コイ』

「あ、待て!」

変化が起こってからクウガは、動きもまるで違った。

赤の時では考えられないような身軽さで、ビルからビルへと縦横無尽に跳び移って  
回った。

「よし、やっと捕まえた!」

散々跳び回って、ようやく第6号を捕らえることに成功したクウガは、間髪入れずに  
ボディーブローの連打を見舞った。

「はあっ！」

『フン』

「なにっ!?!」

しかし、第6号はまるで意に介さぬ様子であった。

どうやら、全く効いていないようだ。

「パンチ力が、下がってる!?!」

『ソラ……イタイ、ゾ』

「がはっ——」

第6号はお返しとばかりに、ボディープローを一発だけ叩き込む。

しかし赤の時とさほど変わらないような動作であったのにも関わらず、クウガは今ままで一番の痛みを感じていた。

(耐久力まで下がってるのか……!)

第6号は、身体を折り込んでしまい隙だらけになったクウガへと追撃を叩き込む。

強力な回し蹴りによってビルから投げ出されてしまったクウガは、そのままどうすることも出来ず、地面に叩きつけられてしまった。

息も出来ないほどの痛みに苦しんでいると、第6号がビルから軽やかに着地をした。

そしてゆっくりと、クウガへと近づいてゆく。

クウガの頭を足蹴にし、そのまま踏み潰そうとした所で――

「あ………れ？ 未確認、です………？」

明久の知っている人物が、現れた。

――葉月だ。

（葉月ちゃん!? 何でこんな所に!）

思わず悲鳴を上げそうになったクウガだが、事態はそれだけでは済まなかった。

「葉月、葉月っ! 戻りましょう、今未確認が出てるって――え、あ………」

葉月を探しに来た美波まで、この場に居合わせてしまったのだ。

彼女はみるみる血の気をなくし、あつという間に顔面蒼白になってヘタリ込んでし

まった。

無意識か、頬の傷を押さえている。

そんな彼女らを見て、第6号は――

『エモノ、ダ!』

嬉しそうに、楽しそうに。

ひとつ跳びで、彼女らの前に立った。

「ひっ」

「お姉ちゃ――」

そして——ふたりをひっ捕まえ、ビルの屋上へと跳び上がった。  
「やめろおおおお!!」

クウガが力の限り叫び、悲鳴を上げ、追いかけてようとした。  
しかし、もう遅い。

待ってもくれない。

第6号は、優しげに姉妹の頭に手を置くと——

『トクテン、ガ……フタツ……ダ』

「あっ——」

ビルから、突き落とした。

「あああああ!?!」

クウガの……明久の、悲痛な悲鳴がビル群の中で反響した。

## 青龍

「やめろおおお!!」

クウガの制止の声も虚しく、聞き入れられることもなく、無情にも美波と葉月はビルの屋上から突き落とされてしまった。

彼女らが地面に落下するのは、時間にすればものの数秒だろう。

あと数秒で、地面にぶちまけられたトマトのようになる。

そのまま落ちれば、それは免れない運命であろう。

(絶対にさせるか! 今のスピードならまだ間に合う!)

無理矢理全身の痛みを無視し、驚きの速度で起き上がるクウガ。

ジャンプ力と移動速度に優れた青のクウガである今ならば、ギリギリ間に合うであろう。

そして実際に駆け出すと、想像以上に早く間に合いそうであった。

——だが。

(どっちかしか、助けられない!?)

そう、助けられるのは、どちらか一方のみであった。単純に手が届かないのだ。

第6号に押された時のベクトルが、少しだけ左右にずれていた。

その為、地面に近づけば近づくほどに彼女らは離れてゆくのだ。

逆に言えば、両方助けられる可能性は、行動が早ければ早いほど上がる。

(どうすれば……ん？ そうだ、何か長い棒で引き寄せれば！)

クウガはすぐさま行動に移す。

すぐ近くの木の枝を無理矢理手折り、その枝を持つて跳躍する。

公共の木を不当に折るのは罰則が課せられるのだが、そんなことを今気にしている余裕はない。

十分間に合う速度で跳び、葉月は抱き抱える形で、美波には木の枝を差し出して叫んだ。

「掴まれえ!!」

「っー!」

声に気づいた美波はクウガごと第4号が近づいていることに驚いたものの、差し出された木の枝に必死の形相で手を伸ばした。

……しかし。



「とど……かないっ！」

あと、ほんの数センチ。

距離にするとたったそれだけだが、今この瞬間においては途方もなく遠く感じられた。

届かないことを察して、美波は目を見開き、絶望的な顔をする。

このままでは、あと少しで葉月はキャッチ出来ても美波は通り過ぎてしまう。チャンスはこれだけ、これを逃せば美波は確実に命を落とす。

「もつと棒が長ければ……！」

そう後悔しながらも、諦めずに棒を差し伸べ続ける。

しかし、やはりどうしても届きそうにない。

届け。棒が伸びれば。

そうクウガは願った。

——その時、棒に変化が起こった。

「うわっ」

ただの木の棒が青く変わったのだ。

形状も変わっており、両端が円形に膨らんでいて、中華系武器の棍に近い。

だが、このままでは短く、やはり届かないであろう。

「クソっ、駄目か？——っっておわっ」

……その予想を裏切るかのごとく、棍の両端がスライド展開するように伸びた。

原理はよく分からないが、片方の端を持てば十分な長さになることは確かである。

後は、差し伸べて引き寄せるだけ。

「掴まれ!!」

「うう、くうっ!」

「よしー!」

がっしりと美波が棍に掴まったことを確認し、力強く引き寄せ、しかし壊れ物に触るように優しく丁寧に抱き寄せる。

葉月も同様にキャッチした。

クウガになって力が強くなっていることを考えてのことだ。

そして、大切な友人を守りたいという心の現れでもある。

その後は持ち前の身体能力を活かし、危なげなく着地に成功した。

葉月と美波を優しく降ろすと、彼女達は腰が抜けたのかその場にへたり込む。

そしてクウガを見て警戒心を出しながらも、なぜ助けたのかという疑問から来る困惑を向けた。

だがクウガはその視線をあえて無視した。

流石に面と向かって話すと声で明久とバレる為である。

なので、早々に第6号と戦うべく立ち上がった。

(第6号は……いた)

第6号はビルの上から、じっとこちらを見つめている。

その様子を見てクウガはゾツと背筋が凍えるのを感じた。

第6号は、美波達が死ぬのを見届けるつもりでいたのだ。

クウガには、なぜ彼ら未確認が人を殺すのか理解出来ない。

その理解困難な行動をする彼らに、本能的な恐怖と危機感を抱くのは仕方のないことであろう。

自然、身構える。

……だが、当の未確認にはどうやら、これ以上戦う気はないようである。

きびすを返し、ビルの影へと消えて行った。

(逃げる気か？ 犠牲者が出る前に倒さなきゃ！)

クウガは一步前に出てビルを見上げる。

そして軽やかな動きで屋上まで跳躍した。

ひとつ跳びで小さく見えるほど高く跳んだクウガを見て、葉月が「スゴいのです……」と感嘆の声を上げている。

素直に感心する妹とは違い、姉の美波はあつと声を上げて手を伸ばしていた。

「お礼くらい、言えば良かったかな……」

「あつ、お礼を言つてないです」

結局、礼を言う暇もなくクウガは去っていった。

かといつて礼をする為はこの場で待つのは危険だと判断し、美波達はひとまず病院へと逃げ込むことにする。

少し休めば腰が立つようになったので、すぐさま歩き出した。

その途中、ふと美波が口を開く。

「そっういえば……」

「? どうしたんです?」

「青い4号の声、誰かに似てた気がする」

クウガは失念していた。

掴まれ、と叫んでいたことを。



羽のように軽い身のこなしでクウガは着地した。

跳んだ先は、先程まで第6号のいたビルの屋上。

しかし、そこにはすでに第6号の姿はなかった。

「逃げられたか？ いや、まだ近くにいないかも知れない」

クウガはビルの下を覗き込んでみると、丁度第6号が下の道路を歩いている所を目撃した。

「いたー！」

発見するや否や飛び降りようとした時、第6号の様子がおかしいことに気付き動きを止める。

少し様子を見てみると――

「に、人間になった!?!」

バツタのような化け物の姿から、ライダースーツを着こなした頭髮の爆発した男の姿へと変わった。

第6号だった男は何事もなかったかのように歩みを続けると、この場から離れて行く。

クウガは男を見失わないように慌てて道路に降り立つと、男を尾行し始めた。

（このまま着いて行けば、アジトが分かるかも知れない。それに、未確認のことも何か分かるかも）

クウガは変身を解き明久の姿へと戻ると、こっそりと男の後を着いて行く。男は全く周囲を警戒していないのか、後ろを振り向く気配がない。

「どうやら撒いたと思っっているようだ。」

それから数十分ほど歩き続けると、徐々に人通りが少なくなってきた。

更に歩けば、段々と廃墟が多くなってゆく。

男は、その廃墟の内のひとつに入って行った。

（ここがアジト？ いかにもって感じだなあ）

そう思いながらも明久は後を追いかけてやうとする。

いざ入らんとした所で、上空から人型をした蜂のような化け物が飛来した。

新たな未確認である。

明久は慌てて物陰に隠れたが、果たして見つかったであろうか。

『……………』

（あ、危なかった……）

明久を見つけた素振りもなく、廃墟へと入って行く蜂の未確認。

「どうやら間一髪の所で見つからなかったらしい。」

だが、ほっと安心したのも束の間。

それからもちろはらと未確認が集まってきたのだ。

一体だけでも大変だったと言うのに、それが何体もいるとなると流石に生きては帰れないだろう。

戦々恐々としながらも隠れてやり過ごすこと数分。

新たな未確認が現れることがなくなり、どうにか見つからずに済んだ。

そろりそろりと移動し、物陰から廃墟内を覗ける場所を探す明久。

隠れながらなので多少時間が掛かったが、良い場所を見つけることが出来た。

息を潜めて覗いたその先には――

(これが未確認……?)

服装こそおかしいものの、普通の若者が集まり、談笑しながら食事を摂っている風景があった。

(まるで人間と変わらないじゃないか)

仲間が集まり、笑い、笑顔を見せ合いながら同じものを食べる。

その光景は、まさしく人間そのものであった。

(いや、人間みたいじゃない。彼らは僕と同じで「元々人間だった」んじゃないだろうか。だとすれば、僕のやってきたことは――)

――人殺し。

その一言が、重く心にのしかかって来る。

今まで未確認を倒してきたことは、人を守ると誓った拳で人を殺してきた……ということになってしまふのだ。

未確認の人間の側面を知ってしまった明久は、果たしてこれまで通り戦えるのであるか。

それは、明久本人にも分からないことであつた。

(……そろそろ、戻ろうかな)

気が滅入つてはいるのだが、あまりこの場に残り続けるのも危険なので帰ることにする。

明久としては未確認がなぜ人間を襲うのか知りたかつたが、奴らの言語が理解できなかったので仕方なくの撤退だ。

落ち込むのは後でも出来る。命あつての物種ということだ。

明久は周辺を確認し、未確認がないことを確かめてから離れようと――  
ピリリリリリ!!

「やばっ」

した所で、携帯が大声をあげて鳴き出した。

大慌てでポケットから取り出すと、一条からだつた。

少々怒めしそうに睨みながらも高速で通話を切る。



そして、恐る恐る廃墟の内部を覗くと……

『『『……………』』』

「流石に気づくよね……………」

中にいた未確認の全員がこちらに視線を向けていた。

ばつちり視線が合ってしまった為、もはや誤魔化せそうにない。

ひとり、またひとりと立ち上がっては化け物の姿へと変化してゆく未確認達。

多数の未確認を同時に相手することは、不可能であろう。

それはすなわち、死を意味する。

「ど、どうしようっ」

明久は、絶体絶命の危機に陥っていた。

△▼△△▼△△▼

「なぜ電話を切ったんだ、吉井君……………」

明久に少し遅れて現場に到着した一条だったが、すでにそこには第6号も明久もいなかった。

その為、明久の所在を確認する為に電話を掛けたのだが、どうしてか即座に電話を切

られてしまった。

「電話に出れない状況にある……と見て良いだろうか。いやしかし、電話を取り出して切っているということは、それだけの余裕はあるはずだ。にも関わらず切らねばならない状況とは一体……」

しばらく考え込む一条だが、考えてばかりでも仕方がないので行動を起こすことにした。

辺りを走り回ってみる。

だがしかし、中々姿が見当たらない。

それでもと探して回っていると、一条は知っている人物を発見した。

「あれは……吉井君の同級生の、島田君か？ どうして規制中のエリアに」

見つけたのは、病院へ戻ろうとしている美波と葉月だ。

実は未確認が出たことで周辺一帯は警察による通行規制が敷かれていたのだが、彼女達は偶然にも規制の隙間をくぐり抜けてしまったのだ。

一条は彼女達に駆け寄り、声を掛ける。

「君達！ 一体何をしているんだ。ここは現在未確認生命体が出現中の為、通行規制中だぞ」

「貴方は……あの時の警察官さん？」

美波はいきなり声を掛けてきた一条に驚きながらも、見覚えのあるその姿に目を丸くした。

「お姉ちゃんのお知り合いです?」

「そうよ、前に未確認から助けてもらったの」

「そうなのですか! 警察官さん、お姉ちゃんを助けてくれてありがとうございます!」

「いや、市民を守るのが我々の義務だから——というのは置いといて。ここは未確認の出現エリアなんだ。遭遇したら危ないだろう」

「え……つと。そのお……」

美波が視線を反らしながら言葉を詰まらせる。

その様子を見て、一条はまさかと頭を抱えた。

「……遭遇したんだな?」

「う……はい……」

「遭遇した割には無事な様子を見るに、4号が助けたんだろう?」

「ええ、どうしてウチ達を助けたのか理由は分かりませんが」

「そうか。大きな怪我がなさそうで安心したよ」

「すみません、心配をお掛けして」

一条は「ああ」と返事を返してから、クウガの居場所を訊ねる。

それを受け、美波はクウガの跳び去っていったビルを指差して言う。

「4号は……あつちのビルの屋上に跳んで行きました」

「ありがとう。君は確か、近くの病院に入院していたね。妹さんを連れて早くそこに戻りなさい」

「はい、そうします」

美波は素直に返事をする、葉月の手を取り、礼をして帰ろうとした。

一条もクウガを探しに戻ろうとした所で、美波が「そうだ、少し待って下さい」と彼を呼び止めた。

「どうかしたのか?」

「ひとつだけ聞きたいことがあるんです」

「聞きたいこと? 私に答えられることなら構わないが」

美波は一条にしつかりと向き直り目を合わせてから、言葉を紡ぐ。

「4号は、ただの化け物……なんででしょうか?」

「それは……」

信頼、戸惑い、期待、嫌悪、懐疑。

美波の視線には、そんな複数の感情が混じり合って複雑になったものが乗せられていた。

(未確認は全部が残酷な化け物だと思つてた。でも、4号だけはどこか……違う気がするわ)

それは直接助けられたからこそその、疑問。

それまで彼女は、4号が人を守つたというのには信じていなかった。

ただの獲物の取り合いではないのか、仲間割れではないのか。その内に4号が人を襲うだろうと、冷めた目線で見ていた。

だが、実際に助けられてみて、それまでの考えは違つたのではないか……そう思うようになった。

あの青い化け物が、自分達を死なせまいと、死に物狂いで手を差し伸べていたのだ。

……だが、美波には4号の真意など分からない。

やはり、なぜ人間を助けるのか、その理由は分からないのだ。

(人間の味方だと判断するにはまだ早い……かしら。せめて、人間を守る理由が分かるまでは警戒した方が良いわね)

そう自己完結をした美波に、一条は――

「私は、4号を仲間だと思つている」

と、胸を張つて言った。

美波は驚きに目を見開く。

まさか、化け物から市民を守る警察官が、4号は仲間だと言うとは思っていなかった。「どうして、そう思うんですか？」

一条は、明久が4号の正体だからとも、警察が4号に全面協力するからとも言わない。いや、言えない。

4号の正体の露呈は、他ならぬ明久自身が拒んでいる為。

警察が全面協力していると言えないのは、どういう訳か警視総監自身が全面協力すると言ったにも関わらず、協力していることを世間から隠すよう指示した為である。

それでも味方だと言ったのは、明久の必死さと、覚悟を知っているからだ。

隠さねばならないとはいえ、明久の思いを踏みにじるようなことだけは言いたくなかった。

そして、一条にとって明久も守るべき市民ではあるものの、心優しく勇敢な彼と肩を並べて戦えることに、どこか言い様のない誇らしさを感じているのだ。

だから、味方だと語った。

「私もね、4号に助けられたことがあるんだ。それも2回も」

「助けられたのはウチも同じです。……でも、まだ味方とは思えません。どうして人間を守っているのか、そもそも守る為の行動なのかすら分かりません。……不安なんです」

「それは……確かに、不安になるかも知れない。理由が分からないのは怖い、というのは分かるさ」

でもね、と一条は続ける。

「私は立場上4号を見る人が多い。だから知っているんだ、4号が必死になって人を助けようとしているのを。傷付きながら、何度も未確認に立ち向かってゆくのを。私も市民を守る立場の人間だからね、4号の気持ちは何となく分かっってしまうんだよ」

「そんなの……貴方の主観じゃないですか。ウチには分かりません」

「そうだね。私の主観が含まれているのは否定しないよ。でも、だからせめて私だけは4号を信じてみようと思う。守ろうとしてくれていた彼への、せめてもの感謝として」

その言葉を聞いた美波は、目を閉じて考えた。

助けて貰ったことへの感謝は、確かにある。

だからといって、一条のように信用し信頼することは、やはりまだ難しい。

一条の話は、本当に人を守っているのでは？ という憶測に拍車を掛ける一助にはなっても、確信に繋がるほどのものではない。

ましてや、自らの顔に消えない傷をつけたのは、未確認だ。

忘れてはいけない、他ならぬ4号も未確認生命体の1体なのだ。

「……やっぱり、ウチには分からないです。どうしてそんなに4号を信じれるのか」

「……すまない、少し自分の意見を押し出し過ぎたようだ」  
「いえ……」

一条はつと我に帰り、バツが悪そうに謝った。

大人気なかったかと反省すると同時に、自分の本来の目的を忘れていたことに気付いて慌てた様子を見せる。

「すまないが、私はこれで失礼させて貰う。4号と6号を追っている途中だったんだ」

「あ……すみませんでした、呼び止めてしまつて」

「いや、気にしなくていいさ。それでは、気をつけて戻るんだよ」

「はい。行きましょ、葉月」

帰つてゆく美波達の見送りもそこそこに、一条も4号と6号を探しに駆け出した。

(さて……居てくれると良いが)

先ほど美波に教えて貰ったビルの屋上を目指して、脚を前へ前へと出してゆく。

階段も3段飛ばしで駆け上がる。

しかし、大急ぎで来たビルの屋上には、すでに誰も居なかった。

(居ない、か。どこにいるんだ)

結局振り出しに戻り、アテもなく周辺を探し回る羽目になった。

一条は明久を探して、人払いされた町を独り駆けてゆく。





一方、明久はとある人物と再会を果たしていた。

「久しいな、クウガ。いや、リントの少年か？」

「あ、貴女は……！」

額にバラのタトウーの入った妙齡の女――

「どうして僕に、ベルトを渡したんですか……！」

バルバだった。

## 流水・上

「どうして僕に、ベルトを渡したんですか……い」

明久の絞り出したような低い声が、バラのタトウの女——バルバへと詰め寄った。無意識、そして無自覚の内に眉根が吊り上げられ、射抜くような視線で彼女を睨む。その視線には、ある種の増悪のようなものがうつつすら見てとれた。

一方バルバはと言うと、およそ高校生が出て良いような殺気ではないそれを一身に受けながらも、なんの気負いも感じさせない涼しげな表情で受け流していた。

彼女はおもむろに口を開き、たった一言だけ告げる。

「ゲームだ」



時は数分前まで戻る。

未確認のアジトに潜入していた明久は、携帯の着信音によって存在を気付かれてし

まっていた。

総じて戦闘態勢に移った未確認達から逃げようとしたが、驚異的な身体能力を誇る彼らから逃げ切ることは不可能であった。

明久はクウガに変身して応戦しようとも考えたが、なぜか殺されることはなかったの  
で、下手に刺激しない為にあえて変身しなかった。

また、目の前で変身してしまえば当然正体がバレる。

そして明久はクウガと覚えられ、常に襲撃を警戒しなくてはならなくなる。

それだけではない、近しい者が襲われる原因にもなりかねない。

それ故に変身せずにいたら、未確認の1体が明久のみぞおちを殴った。

殺されない程度には手加減されていたものの、生身の状態で受ける未確認の拳は非常に重かった。

カハッ、と吐き出される吐息。

一瞬意識が跳びそうになるのを必死にこらえ、明久は未確認達に話し掛ける。

「君、達は……ゲホッ！ 何が、目的……なんだ！」

『？』

「ぐあっ！」

未確認は、明久が何を言っているのか理解出来てなさそうに首をかしげ、とりあえず

と言った様子で暴力を振るう。

顔を殴られて口を切った。

明久は痛そうに顔を歪める。

それでも諦めず、声を張り上げる。

「何で人をツ……ぐうっ!?! 殺すん、だ! があツ!?!」

『ウル、サイ』

「ゴフツ——!?!」

内臓が傷付いたのか、吐く唾液に鮮血が混じり始めた。

明久は、未確認と話し合いによって和解、そして不干渉を試みようとしていた。

それも叶わず今こうして殴られている訳だが、明久はそれでも耐え続ける。

何故か。

それは、1体でも話の通じる未確認がいるのではと、そう考えているからだ。

そして、果たしてその考えは、上手くいった。

——明久にとって意外な人物が現れる形となつて。

「待て、お前達」

「ど……どうしてここに、貴女が!?!」

現れたのはバラのタトゥーの女、バルバだった。

彼女は未確認達を、たった一言の流暢な日本語で下からせて見せた。

明久はそのことから、もしやあの女性は未確認の関係者——ひいては、そこその立場に就いているのではと、何となく察した。

(どうして? 僕へ未確認に対抗する為のベルトをくれた人が、何で未確認に命令をしているの?)

分からない。

彼女が未確認の敵だったならば、ここにいるのはおかしい。

彼女が未確認の味方だったならば、わざわざベルトを渡して敵を作るのはおかしい。どちらにしても矛盾が生じてしまうことに、明久は混乱する。

(だけど……もし、あの人が無確認の味方だったとしたら?)

そう仮定してみると、頭のそう良くない明久でも分かることがひとつだけあった。

——何らかの目的で、明久を騙した。

どういった目的なのか、そもそも本当に騙されたのかは明久には分からない。

だが、混乱した彼では冷静な考えなど出来ず、ひとつ出た考えこそが正解だと思い込んでしまった。

そうなれば後に残るのは、騙されたという怒りのみである。

(そんな……僕はもう、人間には戻れないんだぞ! 一生化け物なんだぞ! それなの

に未確認に利用されて……クソツ!!)

明久はぎりりとした眼光でバルバを睨むが、彼女は細事とばかりに無視して要件のみを伝える。

「来い」

「……………」

無言だが、明久は言われる通りにバルバに付いていくことにした。

内心では反吐が出る思いだったが、このままではいたぶられるのは目に見えていたし、話をすれば色々なことが分かる可能性があった為だ。

——そして移動し、ふたりきりになった所で冒頭へと繋がる。



「……………は？」

明久は聞き取った言葉が信じられない、といった様子で呆け顔になる。

「げ、ゲーム……？」

「そうだ、ゲームだ。簡単に説明してやろう」

そうやってバルバは、淡々とゲームとやらについて語り始めた。

ゲームは、「ゲゲル」と呼ばれる。

ゲゲルの参加人数は原則としてひとりのみ。

基本となるルールは単純、制限時間内に指定した数の人間を殺すこと。

そこに追加条件が組み込まれる場合もあるという。

ゲゲルは、いかにして課せられた条件をクリアするかという、ある種狩りにも似た「娯楽」だということ。

「そして、クウガはゲゲルの難易度を上げる為のアクセント、という訳だ」

多少難しくないと面白くないだろう？ と、皮肉たつぷりに言うバルバ。

笑えない冗談だ、と明久は思った。

それを聞いて、明久はひとつ聞きたいことが出来た。

何故自分がクウガとして選ばれたのか、だ。

「どうして、僕をクウガに選んだの？」

「ふむ。偶然……いや、気まぐれか。お前が力を欲したから与えたまでだ。クウガとしてゲゲルの難易度を上げてくれれば誰でも良かった」

「そう……か」

そして、こう思った。

（僕は騙されてなんかなかった——いや、騙されてすらなかった）

ただ、趣味の悪い遊びに付き合わされていただけ……と。

(こんな……こんなことの為にたくさんの人が殺されたの？ 美波は傷を負わされたの？ 僕は——)

“人間”を失ったの？

下らない。

下らな過ぎて涙が出そうだ。

明久は人を守る為にクウガになったのであって、決してゲゲルを面白おかしく盛り上げる為に戦って来たのではない。

それが実際はどうだ、身を傷付け心を痛めて戦ったのは、未確認達を楽しませていたに過ぎなかったのだ。

告げられたあまりの事実、頭がどうにかなってしまいそうだった。

「さて、そろそろバツのゲゲルを再開するぞ。こんな所で油を売っていて良いのか？」  
「っ!? まっ、待って——」

だが、バルバはそんな明久に気など遣ってはくれない。

掛けられた言葉は無情なものだった。

「待たん。さあ戦えよ、クウガ」

「ぐ……!」



バルバは明久に戦いを強要する。

人間を守る立場の明久がそれを拒む訳にもいかず、応じるしか手はなかった。

——本当は、戦いたくない。

人間と似た者達を、殺したくない。

未確認が人間を殺したから、憎くてたまらない……というのは良く分かる。

だが……彼らが楽しみに仲間同士で食事をしている風景を見てしまったからは、彼らもまた「生きている」のだと、そして人間らしさがあるのだと、知ってしまった。

明久がこれからしなければならぬことは、彼らの笑顔と命を自らの手で奪い取り、破り捨て、ゴミのように踏みじるということ。

愚かなままで優しい明久には、それは酷なことだった。

だが、やらねばならない。

殺らなければ、次に殺されるのは親しい者かも知れないのだ。

未確認は、待つてはくれない。

「やるしか……ないのか」

そう呟いて、明久は歩き出す。

向かうは警視庁だ。

一度戻ってバツのゲゲルが再開されることを伝える為だ。

そして明久は走り出す。

そのまま未確認達に邪魔されることもなく、廃墟を後にした。



その後、明久は警視庁に戻った。

電話で一条に警視庁に戻る旨を伝えると、一条はすぐに警視庁に飛んできた。

彼にバルバと話したことを伝えると、驚きをあらわにした。

その会話の内容を聞いていくに連れ、次第に表情に怒気が混ざっていく。

最後には怒髪天を突くような勢いで顔を真っ赤にしていた。

ただ、明久はその報告の中に自分の気持ちは一切含めていなかった。

当然だ、今さら戦いたくないなどと言えるはずもない。

だから自分の心は隠して、戦う準備を始める。

トライチェイサーに不調がないか触って確かめっていると、一条が近づいて来て、口を開く。

「吉井君、今回も頼む。第6号の犯行をこれ以上許してはならない。一緒に倒そう」

彼は使命に燃えた瞳で、明久に熱く語りかける。

明久はそんな彼の様子に後ろめたさを感じ、生返事で返してしまふ。

一条は明久のその様子に違和感を感じたようだが、他にも伝えることがある為に流した。

彼が後ろのドアに向かって「お願いします」と言うと、とある人物が入ってきた。

そのとある人物とは、沢渡 桜子である。

「久しぶりね、吉井君」

「沢渡さん？ どうしてここに」

「君に伝えないといけないことがあつて。今、大丈夫かしら？」

「ええ、構いませんけど」

桜子は「戦士クウガについての古代文字の解読に成功したんだけどね」と前置きをしてから話し始める。

「新たに青い戦士がいることが分かったのよ」

「青い戦士？ それなら——」

「なんか変身しましたよ、と続けたかったが、桜子はそれをさえぎって自分の話を続けた。

「どうやら、すでに自分の世界に入っているようだ。」

「——『邪悪なる者あらば、その技を無に帰し、流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士あり』。流

水が恐らく青を指してるはず。薙ぎ払うの部分だけど、一緒に解説した文に『長き物を扱う戦士』って書かれていたから、たぶん棒か何かで……」

「あの一、沢渡さん？　沢渡さんってば」

「え、ああ。何かしら？」

「だから、僕もうその『青い戦士』に変身しましたよ」

明久が半ば呆れたように言うと、桜子はとても驚いて「早く言つてよもうつ」と理不尽に怒った。

言う前にさえぎられたんだけどなあ、と心の中でぼやきつつ、青のクウガの特徴について説明する。

俊敏性及び跳躍力の向上、耐久性及び腕力の低下、長い木の枝が青いロッドに変化したことなどを教えたところ、「青い戦士で間違いなさそうね……」と呟いていた。

明久は明久で、あのロッドは低下した腕力を補う為の武器つてことなんだろうなと、ひとり納得していた。

互いに納得をした所で、桜子が用件も伝えたからと、いとまを告げようとした時——『全車輻に通達。未確認生命体第6号が出現しました。至急現場に急行して下さい。場所——』

明久のトライチェイサーから、警察無線による通信が鳴った。

その内容は、第6号の出現。

最後まで通信を聞いていると、その出現場所というのが美波達を襲った所であった。明久と一条は、まさかと顔を合わせると。

「一条さん」

「ああ、奴は殺し損ねた島田君達を狙っているのかも知れない」

「早く行かないと!」

「島田君達は近くの病院にいるはずだ。急がないと見つかってしまうぞ」

「はい! 僕、先に行つてますね!」

そう言いながら明久はトライチエイサーにまたがり、エンジンを起動させる。

透き通るような駆動音を聞きながらヘルメットを被り、先行して現場に向かった。

トライチエイサーを走らせている最中、明久は心の内でひっそりと、何かに言い訳するように、ことう洩らした。

(美波と葉月ちゃんを助ける為なんだ……。殺らなきゃ、殺られる。仕方ない……。仕方ないんだ)

ぐん、と。

トライチエイサーは加速した。



明久が現場に急行した頃、すでにひとつの花が散ってしまった。

道路に舞い散った多量の花びらは、いつそ狂ったように真つ赤だ。

弾けた果肉が、いかに手遅れかを雄弁に物語っている。

高所から落下しなければこうはならないだろうと、せり上がってくる胃液を飲み下しながら、明久はこの惨状を起こした者に確信を得ていた。

「第6号の仕業だ、間違いない」

もっと早く来ていたら結果は違ったのだろうか、無念と後悔の念と自責の念に頭を支配される。

——その亡骸には見覚えがあった。

前回の第6号出現の際に襲われていたのを助けた男性……名は知らないが、恐らく彼であろうと、明久は気づいた。

わざわざ殺し損ねた人間を探し出したのだろうか。

ならば、第6号は相当に執念深いということになる。

それはつまり、美波達の身に確実に危険が迫っていることを指し示している、ということに他ならない。

明久は嫌な予感をひしひしと感じながら、美波の入院する病院へとトライチエイサーを走らせた。

## 流水・下

清潔に磨き抜かれた廊下を、美波は葉月を連れて歩いていった。

アルコール消毒液の香りで充ちた静かな空間……それが病院というものなのだが、今日ばかりはどこか騒々しかった。

いったい何があつたんだろうと不思議に思っていると、どこからか甲高い悲鳴が薄く聞こえた。

「な、なに？」

病院にはあまり似つかわしくないものに思わずビクリと身体を縮こませる。

ついさつき第6号に襲われるという恐怖を味わたのだから、それも無理はない。

少女達がその場で戸惑っていると、対面の方から患者服を着た女性が全力で走つてきた。

美波はその女性を掴まえて何があつたのかを問う。

「ば、化け物が出たのよ！ バッタみたいな顔したのが、窓の外からじつと病室を覗いて……まるで誰かを探してるみたいだったけど、もう怖くて堪らないわ！」



それだけ言って、女性はさっさと逃げおおせてしまった。

だが、そんなことに構っている余裕など、美波にはなくなった。

(きつとウチらを探してるんだ！)

狙われていることに気づき、とたんに顔色が蒼白に変わりゆく。

どこか隠れる場所はないかと葉月の手を引いて探し歩く。

その間にちらちらと思い浮かぶのは、失望。

(4号は6号を倒せなかったんだ……)

だから狙われるのだと、倒せなかった4号のせいだと、ほんの少しだけ、思ってしまった。

それは違う、全ての責任が4号にあるというのはおかしいと、必死に自分を助けたじゃないかと考えを改める。

が、やはり恐怖によってまともな思考など出来ない。

どうしても誰かに責任を押し付けたいくなるのは、悲しいかな、人の性というものだろうか。

『うわあ!! み、未確認だ! 未確認が入って来たぞおー!』

「!」

隠れる場所も見つからない内に、ついに第6号は病院内へと侵入してしまったよう

だ。

同じフロアからの悲鳴ということは、第6号もこのフロアにいる可能性が高い。

(でも、どうしてウチがここにいるって分かったの？ ううん、そもそも病院にいることが分かったこと自体が……)

と、そこまで考えてから、美波は自らの着ている患者服に気づいた。

周囲には、同じ患者服を着た人間が多い。

(しまった……服で気づかれたんだわ！)

そう、第6号は服で美波のいる病院を特定したのだ。

襲われた時に美波の着ていた服は、患者服。

それと同じ服を着た人間が多くいる場所を見つければ、探すのは道理だろう。

動揺を隠しきれない美波だが、何よりもまずは身を隠さなければならぬと判断し、この場から離れようとした。

……が、その行動は少々遅かった。

『ミツケタゾ、オンナ』

「ヒイツ!？」

のし、のし、と歩きながら、バッタのような外観を持つ化け物が、病室のドアを壊して現れた。

もちろん、未確認生命体第6号だ。

「こ、来ないで！」

『ニゲルナ……コロシテヤロウ』

「い、嫌っ！ 嫌あああ!？」

「お姉ちゃん、早く逃げるです！」

美波は尻もちを突き、床を這いながら後退しようとする。

だが、第6号は後退した分だけ距離を詰めてくる。

葉月は腰を抜かした美波の腕を引つ張つて共に逃げようとするが、いかんせん幼い女の子の腕力では動かすこと叶わなかった。

また捕まってしまうのかと暗い覚悟を決めてしまひそうになった時、わきの方から横槍が入った。

「逃げるんだ、早く！ うおおお!!」

それは、見ず知らずの中年の男性だった。

患者服を着ていることから、入院患者であることが伺える。

……彼は、襲われている美波達を見て、決死の覚悟で助けに入ったのだ。

だが、ただの人間が第6号に敵うはずもなく、あっさりと弾き飛ばされてしまう。

「ぐあっ」

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫だよ。それより、早く逃げてくれ!」

そう言いながら、再度第6号に立ち向かってゆく男性。

第6号は鬱陶しそうにそれを払いのける。ゲゲルのルールでターゲット以外殺せないの、男性にとつて幸いなことに未だに生きている。

しかし死なないだけで怪我はするので、何度も立ち向かう度に彼の皮膚は破れ、骨は折れ、患者服が血に染まっていた。

それでも、男性は逃げない。

美波達を庇い続ける。

腰を抜かして動けない美波は、もう良いと、男性こそ逃げてくれと思わず涙を流した。「もうやめて下さい、死んじやいますよ!？」

「いいや、逃げない。ここで逃げたら、私は酒に溺れたあの頃に戻ってしまう! 娘と約束したんだ、変わるって! ここで君を見捨てたら、自分自身も見捨ててしまう気がするんだ!」

ボロボロになりながら、激しい痛みで動かない右腕を押さえながら、中年は叫ぶ。

それは、人の親としての意地であった。

彼は立ち上がり、近くにあった不審者撃退用の鉄棒を手にとって、また立ち向かった。

「どうして、そこまでして……」

「私の娘は、君と同じくらい年頃なんだ。見捨てられないよ」  
にこりと笑いかけて、第6号を鋭く睨む。

気合いをのどから絞り出しながら、鉄棒を第6号に叩きつけた。  
……が、やはり、第6号は傷ひとつ付かない。

防ぐことさえしなかった。

今度は少々強めに吹き飛ばされた中年の男性は、宙を舞った。

「おじさん!？」

あわや固い床に墜落か、と思いきや。

「大丈夫か、おっさん!」

患者の青年が、滑り込むようにして中年の男性を受け止めた。  
それだけではない。

数人の男達が、第6号を取り囲んでいるではないか。

——彼らは皆、中年の男性に心動かされた者達であった。

「おっさん、ナイスファイトだったぜ」

「男なら女子供を守らなきゃいけないよな!」

「俺も手伝うぞ!」

彼らはそれぞれ、手に消火器やら懐中電灯などの武器になる物を握っている。化け物相手に、戦うつもりでいるのだ。

無謀だということは、彼らも分かっている。

無理なことなど、彼らも重々承知である。

だが——ここで少女達と、その少女達を守ろうとした勇氣ある者を見殺しにするほど、彼らは無情でもなかった。

そんな彼らに、第6号はチラリと視線を向ける。

そして、フツ……と鼻で嗤った。

それを皮切りに、男達は一斉に得物を振り上げる。

全身全霊を以てぶん回されたそれらは、見事第6号の頭部や肩、胸に吸い込まれ——

『ヨワスギル、ナ』

やはり、と言うべきか。

弾き返され、その一切が通用しなかった。

骨を折ったのか呻く男達だが、第6号はもう彼らに興味を失ったのか視線をくれてやることもせず、美波と葉月の方へ歩を進めた。

「嫌……もう、やめて。どうしてこんな酷いことするのよ!!」

『……サア、シネ』

「ううっ……い！」

美波の悲痛な訴えには反応せず、彼女の胸ぐらを掴んで軽々持ち上げる第6号。  
「お姉ちゃん!? お姉ちゃんを離すです！」

捕まってしまった姉を離せと、葉月が第6号の脚を叩く。

当然離すわけもなく、次はお前だと言わんばかりに葉月に手が伸ばされた。

だが、そうはさせないと足掻く者がいた。

「その子達を離せえ！」

「お……じ、さん」

中年の男性だ。

彼は第6号の脚にしがみついても止めようと、喰らいついていた。

しかし、その傷だらけの腕にはもはや、力は入っていない。

『フン……』

「がっ——！」

結果、容易く蹴り飛ばされた。

今度こそ体力の限界が来たのか、中年の男性は微動だにしなくなってしまう。

彼の悲惨な結果を目の当たりにした美波。

頬をつたう一筋の涙は、悲しみと絶望が具現したものか。

どうしようもなくなった今、自然と唇が言の葉を結ぶ。それは、助けを求める声。

雫が、頬を離れて重力に引かれた。

「助けて——4号……！」

落ちて、床に散れる。

「おりゃああああああ!!」

蒼き閃光は現れた。

第6号の筋肉質な肉体を蹴り飛ばし。

第6号の手から離れた美波を優しく抱き止め、自らの身体で葉月が隠れるように前に出て。

美波を降ろし、第6号に堂々と立ち向かう、その姿は——

「4号……！」

そう、未確認生命体第4号。

またの名を、戦士クウガ。

クウガは、静かに拳を構えた。

周囲の人間が、救世主を得たかのように沸き上がる。



「4号だ……4号が来てくれたぞー！」

「お願い、アイツを倒して！」

「頼んだぞー！」

皆、思い思いに歓声を上げ、クウガにエールを贈る。

一身に歓声を浴びる中で、ふとクウガは手を引かれたことに気づく。

チラリと目を向けたが、どうやら美波がやったようだ。

美波は目の端に涙を溜めながら、絞り出すような声でクウガに言った。

「お願い……助けて……！」

それは、少女の精一杯の訴えだった。

それに対するクウガの答えは——首肯。

美波を安心させるように、大きく頷いてみせた。

そして中年の男性が落とした鉄棒を拾い上げ、軽く振って構える。

構えた鉄棒は、みるみる内に形状が変化し、1秒と掛からず青いロッドへと変わった。

カシヤリと音を立てて伸びたロッドを手にし——

「はあっ！」

第6号へと挑む。

以前は青のクウガでの格闘は一切通用しなかったが、今度は違う。

ロッドで戦うことで威力の向上が為されており、充分に第6号にダメージを与えることが可能になった。

クウガは俊敏さを活かして一息に接近すると、ロッドを横一文字に振り抜く。

リン、とロッドから涼しげな鈴の音が聞こえたと同時に、鈍器が肉を打つ鈍い音が鳴った。

クウガのロッドを持つその手は、まるで石のように硬く握り込まれている。

第6号はよろめくが、たった一度の打撃だけでは終わらない。

そのまま二度、三度と連打を重ねてゆく。

『グッ……ジャマラスルナ、クウガ』

第6号はそう悪態を吐きつつも、怒濤の連撃にたまらず逃げ出した。

近くの窓を蹴破ると、一息に病院の庭へと降り立つ。

がしかし、クウガも逃がす訳には行かない。

間髪入れずに追いかけてゆく。

美波は、クウガの出でいった割れた窓をじいっと見つめていた。

その顔には、先ほどまでの絶望の涙とは違う意味合いの涙が流れている。

そして、短く唇を動かしした。

彼女が何と言ったかは、初夏の風に吹かれたカーテンの音で、誰にも聞こえなかった。



クウガは跳んだ。そして逃げようとする第6号を、ロッドで足払いして転倒させた。その隙にロッドを胸部へと叩き込む。

第6号はうめき声を上げながらも、追撃を逃れる為に、たちまちにして起き上がった。クウガは息を整える為にあえて追わずに、一定の距離を保ちながらロッドを構える。

そしてクウガは思った。

(本当に、これで良いのかな……)

——そのロッドの先端は、小刻みに震えていた。

まるでクウガの……明久の胸中を表しているかのように。

彼は、未だ迷っていた。

明久の中で、何を優先すべきかは既に決まっている。

もちろん、人だ。人の命だ。

理不尽に未確認生命体に殺される人が出ないよう戦う……そう、決めた。

だが、問題は相手だ。

相手もまた、人。……もしくは、それに近い者。

未確認生命体達の人間らしさを、明久は見てしまった。

ゆえに、明久としては、どうにか未確認と分かり合つて穏便に済ませたい。

しかし未確認は人を遊びで殺す。それも大勢を。

ならばクウガとしては、殺される前に殺す他なかった。

そこが、明久にはどうにも割り切れなかった。

殺すということは、可能性を消すということ。

殺すということは、奪うということ。

未確認達の見せた笑顔もまた、本物。

それを奪うことを、明久はしたくなかった。

——だが、やらねばならない。

殺らねば、美波、そして何の罪もない人達の幸せが奪われるのだから。

だから、仕方ない。

そういう免罪符を掲げてまで振るわなければならない暴力が、明久は嫌で嫌で堪らなかつた。

——明久は、戦いたくなかつた。

そして、再びロッドで第6号を殴りつける。

すると、不意に第6号が喋つた。

『オレガ……シヌ、ノカ……ッ!?』

「っ」

第6号からは、焦ったような……恐怖。そう、クウガという暴力への恐怖が感じられた。

自分の全てが奪われるという、おぞましき。

第6号がそれを感じていることが、今の一言で明久に伝わってしまった。

(嫌だ)

クウガはロッドで第6号の顔面をぶん殴る。

第6号の口らしき箇所から、鮮血が飛び散った。

(嫌だ、嫌だ)

腕を打つ。

グシャリと骨がへし折れる感触がロッドを通じて手に伝わる。

(戦いたくない……)

胴に痛烈な一撃を叩き込む。

第6号はくの字に折れ、吐血して息苦しそうにしている。

(殺したくないっ!!)

ロッドであごをかち上げ、数メートルも吹き飛ばす。

第6号はよろよろと起き上がるが、满身創痕……隙だらけだ。そんな中、第6号はぼそりと呟いた。

『ゲゲルヲ……セイコウ、サセナケレ……バ』

美波のいる階層の、割れた窓を見つめながら。

何をする気なのかは、明白だ。

だから――

「ああああああ!!」

腰を溜め、腕を引き、ロットを持つ手に力を込める。

そして全てを解放し。

――全力の突きを放った。

『グッ……オオオ……! バ、バカ……ナア!?』

第6号の突きを受けた箇所が、光りだした。

そう、古代文字だ。

光る古代文字から輝く亀裂が走り、第6号の腹部のバックルへと伸びてゆく。

やがてその亀裂がバックルに届くと、バックルはバキンと音を立てて割れた。

その瞬間。

『ガアアアアアアア!!』

派手な爆発を起こした。

結果、第6号はバラバラの肉片と化してしまった。

爆発した際に飛び散った血液が、クウガの目元に付着し、流れる。

「……………」

クウガは、第6号のいた場所をじつと……じつと見続け、視線を外さなかった。

『ワアアアアア!!』

——突然、大歓声が上がった。

それらは、戦いを見ていた人間達から上げられたものだ。

皆、第6号という脅威が去り、思い思いに喜びを表している。

クウガが彼らに顔を向けると、その青い複眼には、大勢の笑顔が映った。

クウガには、明久には。

未確認生命体を殺したことが本当に正しいことなのかは分からない。

だが、たくさんの人の笑顔を守ったことは、確かなようだった。

クウガは、近くに置いてあるトライチェイサーに乗るために歩いてゆく。

その途中で、何者かに声を掛けられた。

「やったな。お疲れ様」

一条だ。

彼が、病院の中から出てくる。どうやら患者の避難誘導をしていたようだ。

彼は笑顔でクウガにサムズアップ——いわゆる、グッドサインを出して、言う。

「4号が……クウガが皆に認められたようで、良かった。君が頑張っているのに否定されたくはないからな。これからも、共にやって行こう」

一条は、クウガが市民に認められたことをまるで自分のことのように喜んでいた。

そして、喜びもそこそこに、彼は明久の身体の心配を始めた。

「ところで、身体は大丈夫なのか？ 怪我はないか？」

一条の心配気な声。

クウガは、ほんの少しだけ黙る。

何も言わないクウガに、一条は不思議そうに首をかしげる。

「どうした？」

ややあつて、クウガは答えた。

返すようにサムズアップを作つて。

「大丈夫。——僕は、大丈夫ですから」

それだけ言うと、クウガはトライチエイサーにまたがつて走り去つてしまった。

歓声が、少しずつ遠ざかってゆく。

彼の仮面の中の表情は、誰も知らない。





後日、明久は再び美波の病室に訪れていた。

開けられた窓から吹く爽やかな風が、ふたりの頬を撫でる。

美波は小窓の方を向いており、明久には彼女が今どのような顔をしているのか、伺うことは出来ない。

美波が、口を開いた。

「気持ち良い風ね」

「そうだね」

「ねえ、アキ」

「うん？」

「ウチね、来週に退院なの」

「もう、傷はいいんだ。おめでどう」

「ありがとう。……でもね。ウチ、本当は退院したくないって思ってた」

「え？」

美波は、小窓の方を向いたまま、天井を見上げる。

「恐かったの。未確認も、この頬の傷も。外に出たら、未確認に狙われるんじゃないかって。消えない傷痕のせいで、皆に変な目で見られるんじゃないかって」

そつとガーゼで保護された自らの頬に触れる。

手は、ふるふると震えていた。

「そんな時、第6号に襲われたわ。正直、恐くて恐くて仕方なかった。もう嫌だ、誰か助けてって心の中で叫んだわ」

美波は手を握り、その手をもう片方の手でぎゅつと抱く。

震えを抑えるかのように。

明久は、彼女の話を黙って聞いていた。

「もうダメかと思った時、男の人達がウチと葉月を助けようとしてくれたの。敵うはずがないのに、何度も立ち上がってくれたわ」

「……………」

「嬉しかった。見ず知らずのウチらを命がけで助けようとしてくれて。6号が4号に倒された後に彼らの所に行っただけで、皆何て言ったと思う?」

美波の質問に、明久は「心配された?」と答える。

「そう、皆、大丈夫か!?」って一番に言ったのよ。ウチらよりも酷い傷を負ってたのに、ウチらのことを真っ先に心配したの」

お人好しぼっかりよね、と美波は言う。

「でも、嬉しかった。人って、こんなにも優しくなれるんだって思った」

そして、抱いていた自らの手を離す。

そつと、ガーゼに手をやった。

「ウチね、思ったんだ。こんな傷を恐がってちやいけないって。だって、もつと酷い傷を負った人達は、皆笑顔だったんだもん」

「美波……」

「無茶しないでつて怒られながら、お酒が飲みたいっておどけて笑ってた。だったら、ウチも頑張らなきゃって思ったの。皆に、笑顔で返したいの」

美波はその細い指で、ガーゼの端をつまむ。

「本当はまだちよつと、この傷を見られるのは恐いけれど……。でも、人の優しさを信じて見ようと思うの」

それに――

「また未確認が現れても、きつと4号が助けしてくれるわ」

「――っ!」

彼女の言葉に、明久はバツと顔を上げる。

彼の顔には、驚きが張り付いていた。

「だからね」

美波は、ガーゼを勢い良く剥がす。

そして――

「――ウチ、頑張つて学校に行くわ!」

振り返つた。

その頬には、二度と消えない傷痕が一本走つていた。

だが――明久にはそれよりも、美波の眩しいほど満面の勝ち気な笑みに、目を奪われていた。

「アキ」

「え、あつ、うん」

「ずっと心配して会いに来てくれてたのに、冷たくしてごめんなさい」

「いやつ、良いよ。美波がまた元気になつてくれたから」

「ううん、これはウチのけじめなの。――それとね、アキ」

――ありがとう。

明久は、きつと忘れないだろう。

その時の美波は、照れたような――とても柔らかい、魅力的な笑顔だった。